
死神の人助け

すこうはじめ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死神の人助け

【Nコード】

N9055S

【作者名】

すこうはじめ

【あらすじ】

死んだ人間は天界に行き、その中でランダムに選ばれた者は”死神”としてもう一度現世へ赴く。拒否権はない。強制派遣。人を殺すためではない、人を助けるため。交通事故で一度死んだ春見秀人は、かくしてとある田舎町へ派遣された。

！ シリアスあり感動あり恋愛ありコメディあり……のつもりです

一話

見上げると、空があった。

何処までも碧く、何処までも遠い、透徹の青天。

遮るものなどなにもない。視界には空色以外の入る余地などありはしない。

絶え間なくリズムを刻む波の音だけが聞こえている。

砂浜に寝転がっていた。いつからかは分からない。気が付いたらそうだったのだ。頭皮まで入り込んだ砂がむず痒い。気怠い温風が肌を撫でた。汗の滴るほどではないが、いつまでも日なたで呆けて居られる陽光ではない。俺はゆっくりと身を起こした。

海だ。空の次は海。どうしてか、世界の大半を占める両者は同じ色をしている。俺が今見つめている情景においては、それらの境界線さえおぼろげだ。太陽が掛けてあるのが空で、キラキラと宝石を散りばめたように輝いているのが海。それだけ。

あまり多くの情報は貰っていない。初めから多くを知っておくのではなく、現地で直に学べということらしい。だがそれにしたって、自分の赴任先くらい教えてくれても良いものだ。辛うじて知らされたのは、黒江紫という人物の住所と、俺の役職名だけ。

役職名、死神。

ふざけている、と思う。もっとマシな名前が思いつけないものか。

今となつてははつきりと思い出せないが、感覚にして数年ほど前、俺は死んだ。

交通事故だった。信号は青だったし、俺を撥ねた運転手は酒を飲んでいた。つまり俺は悪くない。

親には申し訳ないと思うが、俺は自分が死んだことに対する憤りや悔恨を抱いてはいない。

当時の俺は、高校において勉強はできないしスポーツもできないし見てくれも良くないし趣味なんかないし友達はいないし、でも親の前では平静を装つてとにかく中身の無いがらんどろな毎日を送っていた。人生なんてどうでも良いと思つていた。生きてる意味など考えるまでもなく皆無だった。

そこに酔っ払い運転の車が通りかかった、というわけだ。流石に、運が良かった、とまでは言わない。生きる理由はないけれど、死ぬのには漠然と恐怖していたから。

かくして俺は生を失つて死を押し付けられた。そして、天界へ行った。

天界。まあ、平たく言えば天国なんだけど正式名称、天界。比喻ではない。本当に行つた。なんと存在したのだ、そんなものが。想像していた天国とは少々、いやかなり異なつた趣ではあつたが。

そして、その天界からランダムに人間が選出され、現世に送り込まれる。送り込まれた人間はある仕事を任される。聞いた話によると、ここで、つまり現世で人助けをするらしい。そんなの死神なんて物々しい呼び名にはいささか不似合だし、漠然としていて訳がわからない。

なにより、人助けなど、興味がない。

とつとと天界へ帰りた。死んでなお現世に引き戻されるとい
のは言いようのない違和感を覚える。死神には任期みたいなものが
あって、それを終えれば天界へ帰れるのだが、いかんせんその期間
を聞かされていない。

日差しが眩しい。目を瞑っても、赤く瞼を透かして光が入って
くる。早く日陰に移動したい、と思ったところで、思い出した。ジ
ンズの左ポケットからメモ代わりの紙切れを引っ張り出す。黒江くろえむ
紫らふさきという名前の横に住所らしき文字の羅列が書いている。天界曰く、
ここに行け、ということらしい。く号室とまで書いてあるところを
見るとアパートのようだ。

新任の死神は現世に来てからしばらくは先輩死神と行動を共にし、
死神の仕事を学ぶのだとか。先輩死神とはつまり自分より前から死
神に従事している人間で、この黒江紫という人物が今回はそれに当
たる。紫と言う名前に女性であろう。女性はあまり得意ではない。
しかし、天界の命令には従わなくては天界へは帰れない。ならば早
急にことを済ませてしまおうではないか。

そう思って海に背を向けると、すぐ左手に漁港があった。そこ
から砂浜に沿って防波堤が続いている。

その上に、少女が腰かけていた。

俺と同じ、高校生くらいだろうか。海に向かって体育座りをし
て、じつと海を見つめている。長い髪が海風に揺れた。

「……も、そう思いますか。私も、そっちの方が良いと思っ
ていたんですよ。だってそっちの方が可愛いですもんね」

独り言、だろうか。最初の方は聞き取れなかったが、言って少女は笑みを浮かべた。柔らかい、母親のような笑顔だ。誰かと話しているような口ぶりだが、彼女の視界には俺と、海と空と砂浜しかないはずだ。まさか俺に話しかけているわけではあるまい。綺麗なブラウンをした瞳はどこか遠くを見つめていた。

海と、会話しているように見える。

そういえば、俺はたった今天界からこっちに現れたわけだが、それは空から落っこちてきたりしたのだろうか。その辺の記憶は全くない。だがもしもそうだったとしたら、この少女に目撃された可能性がある。

現世に行ったならば、部外者に死神であるとばれてはならない。と言われているので、これはいきなりまずいかもしれない。

とりあえず、確認してみるか。

砂に足を取られながら、少女のそばまで歩み寄る。少女と同じように防波堤の上に乗ると、漁港全体が見渡せた。コの字にコンクリートの栈橋が渡してあり、その内側に十隻ほどの漁船が浮かんでいた。

「なあ、あんた、空から人間が降ってきたのを見なかったか？」

「なんだか妙な物言いになってしまったが、彼女は全く気が付いていなかった。俺たちの間には一メートルもないのに。」

「おーい」

俺がそうやって声をかけている間にも、少女は遠い目をして独白を続けていた。「あははっ、それも良いですね。マコトは、どう思う？」マコトって誰だろう。俺ではない。やっぱり独り言のようだが、それにしても独り言に熱中しすぎている。なんだか危ないやつに見えなくもなかった。状況的には間違いなくそうなのだが、それを自然に見せる何かを少女は持っていた。神秘的というか、文学的

というか、なんだかそういうオーラが出ているのだ。

「もしもーし？」

などとひねりも何にもない呼びかけを試みるがしかし、反応はない。海に向かつてにこにここと微笑みかけるばかりだ。この分なら俺が降ってきたとしても気がついてはいなかっただろう。

だがその時、一瞬にして少女の笑顔が掻き消えた。代わりに苦悶の表情が浮かぶ。かすかにうめき声すら漏らしていた。

「おい、大丈夫か！？いきなりどうしたんだよ！？」

華奢な肩に手をかけたところで、少女はやつと俺の存在に気が付いたらしい。かなりびっくりした表情をしている。見知らぬ男に突然声をかけられたら驚きもするだろう。動揺するなかで、しかし苦悶に歪んだ表情は変わらない。

「いや、あの、大丈夫、ですから……大丈夫です」

少女はひらひらと手を振って健常を主張するが、辛そうなのは変わらないかった。

「本当か？風邪でもひいてんだったら、こんなところで独り言言っ
てないで寝てろよ」

何の含みもなく、そう言った。

「……独り言じゃ、ないです」

「え？」

少女の声音が、変わった気がした。それまでの当惑気味の声から、強い意志を感じさせる声へと変化した。

「独り言じゃ、ありません」

そう言って少女は立ち上がった。真っ白いワンピースが風にはためく。そのまま少女は防波堤を飛び降りた。

背後の防砂林を抜ける細い道へ這入っていき、姿が見えなくなる。

なんだったんだ。俺は有難迷惑だったということか。しかしなぜあの少女は自分が独り言を言っていたことを否定したんだろう。あれは明らかに独り言だった。

メモにあった住所には、予想通りアパートが建っていた。かなり古い建物らしく、一見ただけでそこかしこが老朽化しているのが分かる。

篝原^{かきじま}壮^{つよし}。アパートの壁面には色あせた看板が掛けていった。いかにも古めかしい命名である。死ぬ前まで東京郊外の小奇麗なマンションに住んでいた俺からすれば、住居としてはあまり優秀とは言えない。

ここにたどり着くまでにはこれと同じような失望が俺を休ませることはなかった。先程の海岸からここまで徒歩で十五分程度。道中見かけたものと言えば、未だ木製の電柱、田園、壊れた自動販売機、田園、バス停、田園、指折り数えられるほどの民家、田園、道祖神と、それから田園だけだ。

田舎も田舎。ドのつく田舎だ。

どうして俺はわざわざこんな田舎に送り込まれたのだろう。生前

と違いすぎるではないか。死神の赴任先として、これはどう考えてもはずれくじだった。

そしてこの篝原壮も、森に眠る古城のようにひっそりとそこに佇んでいた。部屋は全部で四部屋、二階建て。一階を順番に見ていくと、奥の部屋の表札に、「黒江」というネームプレートが入っている。

ここか。そういえば、年代はどのくらいなんだろう。俺のコミュニケーション能力の問題からして、同世代と言うのは避けたい。かといって中途半端に年を取って五月蠅い年代なのも困る。おばあさんが良いかもしれない。話しやすそうだ。

当然のようにインターホンは無く、こんこんとドアを叩く。反応はなし。間抜けな打撃音が空しく響くだけだ。

そういえば、俺もこのアパートで暮らすのだろうか。天界からは俺の住居については明言されていない。自分でどうにか都合しろということか。なんとも適当な連中だ。

こんこん、こんこん。

ミンミンミンミン。

うだるような暑さ、とまではいかないがそれなりに暑い。せつかな蝉はもう喚き始めている。

こんこん、こんこん。

ミンミンミンミン。

留守か。さてどうしたものだろう。とりあえずどんなに小規模でも良いからスーパードでも探して涼をとろうか、とドアを叩く手を止めた時、

「あなたが、春見秀人ですか？」

鈴を転がすような、玲瓏な声が俺の名前を呼んだ。

振り向くと、少女が立っていた。真っ黒い日傘を差している。しつらえられたリボンもレースも、黒一色。

腰まで伸びる、墨を流したように漆黒のロングヘア。切れ長の瞳は黒過ぎるほどに黒く、宝石のように美しい。小さな輪郭に、整った鼻と花弁のように可憐な唇がそつなくおさまっている。肌は白磁のように白く、黒いワンピースとのコントラストが目を引き。

俺は呆気にとられていた。綺麗過ぎる。

中途半端な五月蠅い年代？ばあさん？は？何言ってるんだ。

それは、さながら天使のような美貌で、しかしその美貌が常軌を逸脱しているが故に、悪魔のようでさえある。

彼女の周囲だけ、涼しげに見える。

「新任の死神ですね。入ってください」

黒い少女は俺の横に並び、「黒江」と表札の付いた扉の鍵穴に鍵を差し込んだ。ふわりと、石鹸のような香りが舞った。

一話（後書き）

ぼちぼち更新してまいりますので、よろしくお願いいたします。二話以降はコメディー要素も予定しています。

一話

この世には、悪魔というものが存在している。悪魔は、余命あと数週間の人間の前に現れ、死の到来を自覚させる。また、ここでいう余命とは、病死や老衰ではなく、不慮の事故や突然死など本来ならば計ることのできない死までの時間を指す。そして余命を自覚した人間の願いを、幻覚という形でなんでも叶える。この幻覚から人間を解放し、健全な状態で死に導くのが死神の役目。

というのが、黒江から聞いた話のあらましだ。

天界といい、死神といい、悪魔といい、突飛なことが多すぎる。だが、実際に死を経験して天界なんてものに行つた人間が、それらの話を否定する根拠など持ち合わせているはずがなかった。

「でも、どうして悪魔なんてものが存在するんだ？」
当然の疑問をぶつける。

「一説によると世界のバグみたいなもので、存在自体に意味はないらしいです。一種の病気みたいなものですね。自分が近日中に死ぬことが分かって、死ぬまで望んだままの幻覚を見る。そういう病です」

黒江は扇風機の風を優雅に浴びながらアイスコーヒーを飲んでいった。ぼろい内装とお嬢様然とした彼女があまりにも不釣り合いで、どうも違和感を覚える光景だった。

部屋には居間とキッチンとトイレと風呂だけがあり、壁紙などがれかかっている所もある。クーラーはない。まさに古びた安アパートという雰囲気だ。しかし家具などは几帳面に片付けられていて、全体的には小奇麗な印象になっている。

「黒江は、いつから死神なんだ？」

「一年くらい前です。あと、私のことを名前で呼ばないで下さい。不快です」

「……じゃあなんて呼べば良いんだよ」

紫、か？俺は生まれてこの方（もう死んでるけど）女子を名前で呼んだことなど一度もない。ましてや今目の前になる少女はあまりにも綺麗で、俺なんか名前前で気安く呼ぶなど罪悪感さえ覚える。

ていうか、不快って……もうちょっとオブラートに包めないものだろうか。

「紫とでも」

と、澄ました顔で言われてしまった。あまりそういうことは気にしない性格なのか。

「それより、春見君はどうして死んだのですか？」

「交通事故だよ。酔っ払い運転の車に轢かれた」

「そう、お気の毒ですね」

全くお気の毒に思っただけではないであろう口調だった。

「くろ……紫、は、後どのくらい任期が残ってるんだ？その任期の間に俺に死神の仕事を教えなくちゃならないんだろ。ていうか、幻覚から解放するって意味あるのかよ？数週間後に死ぬ人間がどんな幻覚を見ていようが良いじゃないか」

そこで紫は扇風機の前を離れて、俺の前、テーブルの向かい側に座った。綺麗に膝を揃えて、座り姿まで完璧だ。

「死神の任期は期間じゃなくて担当した人間の数です。それにしたってあと何十人と担当することになるでしょうね」

マジかよ。それは俺も当然現世に居なくてはならないということだ。激しく気が滅入る。

「幻覚から解放する意味があるかどうかは、どんな馬鹿でも実際に

仕事をすれば分かります」

それは暗に俺が馬鹿だと言ってるのか。まだ会って十分と経っていないのに。黒江紫という女は性格が歪んでいるかもしれない。

「で、仕事って具体的にどんなことをするんだ？」

悪魔に見せられた幻覚を解除するというのは分かったが、それは漠然としすぎている。具体的な内容が聞きたかった。そしてなるべく早く天界へ帰るのだ。

「幻覚を解くためには、その幻覚が自分には必要ないとその人に思われれば良い。つまり説得します」

「……」

最悪だ。あきらかに俺の得意分野からは外れている。まして死を前にした人間にかける言葉など俺にはさっぱり思いつかない。論外だ。

「俺はそういう、人と接して会話するみたいなのが苦手なんだが」

「私も他人と接するのは苦手ですが、やらないと天界に帰れませんから。仕方ありません」

「あんたも早く帰りたいクチか」

「ええ。人助けなんて私の性に合っていないから」

紫は真顔で俺を見つめる。黒い切れ長の瞳は、見つめられると吸い込まれるような錯覚を覚えた。澄んだ湖面を思わせる。そこから紫の感情を読み取ることはできなかった。

「覗いたりしたら、殺しますから」

紫は真顔で言った。というのも、俺が住む当てがないことを伝えたと、隣の部屋が空いているから使えば良い、と言うのだ。なんでも篝原壮には現在住人が紫と大家しかいないらしい。二階の一室は大家が住んでいて、もう一室は大家の物置状態。必然的に紫の隣部屋だけが空き部屋で、俺はひとまずそこで生活することになった。思い出したが、生活に必要な家具などは連絡すれば天界から送ってくるのだ。どうやって運ぶのか見当もつかないが。

「少しでも不埒な行為に及んだ場合は、死ぬまで忘れられない悪夢を見ることになります」

もう一度言うが、その隣室に俺を招致したのは紫だ。これから死神の仕事において行動を共にするにあたって、住居も近い方が便利だから、らしい。というかすでに死んでいる人間に対してそれを言うのは一種のジョークなのか？

「別に妙なこと考えたりしねーよ。安心しろ」

篝原壮にはちょっとした庭があり、一階の二部屋はその庭でつながっている。つまり庭に出れば紫の部屋は簡単に覗けてしまうのだが、流石にそれをするほど俺はデリカシーの無い男ではない。と、信じている。自分で。

「本当に殺しますから」

紫は全く感情の籠らない声で念を押した。こいつならやりかねない、と心の中の俺が悲鳴を上げている。覗くつもりなど毛頭ない。紫のような綺麗過ぎる女の子が隣室にいるだけで、なかなか幸福である。

その後は紫の部屋でこれと言って何も無い怠惰な時間が過ぎた。大家に挨拶に行こうと思ったのだが、生憎外出中で、帰って来るま

でやることがない。死神の仕事は天界から具体的な仕事内容の連絡を受けるところから始まるそうで、今のところ連絡はないらしい。どうやら死神と言うのは基本的には暇のようだ。

「春見君、冷蔵庫の中にあるアイスコーヒーを持って来てください」「はいよ」

「あ、蝉が窓から這入ってきました。春見君、退治してください」「とりやつ」

「今日は結構暑いですね。二階の物置状態の部屋に扇風機がもう一台あると思うので、持って来てください。鍵はこれです」

「どっこいしょっと」

「春見君、投げたゴミがゴミ箱に入りませんでした。後始末を……」

「了解 っておい」

「はい？」

「『はい？』じゃねーよ！なにいつの間にかき使ってたんだよ！？なんかすげえ自然な流れで奉仕しちまったじゃねえか！」

「嫌ですか？」

「……」

おそらくこいつは性格が歪んでいるとか、それ以前の問題だ。

しかし。しかし、その目は反則だ。あまりにも綺麗で、見蕩れてしまう。扇風機の前で真っ黒な髪がなびく。そのせいでシャンプーのような匂いが風に乗って俺の顔にまで流れた。黒いワンピースから露出する白い肌は少し汗ばんでいるようにも見えて。

お前、綺麗過ぎるだろ。どんだけ美人なんだよ。

嫌だと、言えないじゃないか。俺は別にマゾなわけではないが、今この状況でどうしても、黒江紫という少女に拒絶ができなかった。「別に。知るか」

と、案の定訳のわからん返事しかできなかつたのである。

「春見君はマゾなんですか？」
「うるせえよ!?!」

そんな風に騒いでいると、電話が鳴った。じりりりりり、という古典的な音が響く。

「出てください」

「お前の家の電話だろ」

「おそらく天界から仕事の連絡です。春見君、見習いですよね」

「しょうがねえな。早く仕事覚えて終わらせて天界帰りたしいし、分かったよ」

そう。俺は現世とはできるだけ早くおさらばして、天国もとい天界へ帰るのだ。現世は色々面倒臭いから。

それにしても天界から仕事の連絡って電話で来るのか。妙に普通だな。生活費が口座に振り込まれたりするのもそうだが、結果だけ見ると天界のやることはいちいち庶民的だ。もっと摩訶不思議なやり方もあるだろうに。まあメカニズムは現状でも十分摩訶不思議だが。

じりじり喚く昔懐かしい（祖父母の家でしか見たことがない）黒電話の受話器を取る。

それを耳にあてた瞬間、非常に耳障りな声が聞こえた。

「あ、紫すあん! どうも、毎度お馴染みの天界対悪魔部伝達課です! いやあ紫さん、ぐへへ、今日も元気でいらっしやいますかあ? わたくしはもう紫さんの美声が聞きたくて聞きたくて、夜も寝られない有様ですよ! 本当に一度お姿を拝見したいい! 可愛いんだらうなあ! 可愛いんだらうなあ! う、うへへっっへへっへへえ!」

変態からだった。すぐに受話器を戻す。

じりりりりり、じりりりりり。

しつこいな。

もう一度受話器を取ってみる。

「どうして切っちゃうんですかあ！　？もしかして電話口からわたくしの魅力に気付き心を奪われ、はち切れんばかりに膨らんだ切ない恋心を今日こそは吐露するべく、心の準備をなさっていたんですねえ！？　いやあいやあ照れますなあ照れますなあ！　わたくしもね、そろそろ来るなどは思っていたんですよ？　ぐへ、紫さんならいつでもウエルカムですから、いつでも飛び込んでおいでマイハニー！！」

「お前、誰だ？」

「……………てめえどこのモンだコルア？」

いきなり口調が変わった。変態恐るべし。だが紫の身が危ないかもしれない今、ここで引き下がるのはいかん。

「俺が先に聞いたんだ。お前から答えやがれ」

「ああ？　でさえ口叩きやがって。チツ、てめえアレだろ？　新任の死神だろ？　紫さんとこに見習いに行ってるなんて良いご身分だなあおい？　夜道には気をつけるよクソ野郎。こちらら天界対悪魔部伝達課の近藤ってモンだ。てめえみてな青いガキにものを教えるなんて吐き気がするが、紫さんのお手を煩わせるのはいけねえ。糞ほども気が進まねえが教えてやる。この電話は仕事内容を伝えるものだ。てめえが今いる地域で悪魔の被害が出次第、その情報をてめえらに連絡する。てめえらはそれを解決し、その旨を俺たちに報告しろ。良いな？」

「お前なんか電話するのは虫唾が走るんだが」

「俺だつててめえの声なんぞ毛ほども聞きたくねえ。だから以後電話はすべて紫さんに任せろ」

「変態にそんなことを許せるか」

「んだとコルア。じゃあ聞くが、俺がここで仕事内容をペラペラ喋つて、お前はその後どうすんだ？　しょっぱなから自分でやれんのかあおい？」

くっ、確かにその通りだ。一度紫に情報を通さねば話にならない。俺はまだ仕事の右も左も分からない上に、そもそも説得なんてもの

は元来苦手なのである。紫の手助けは必要不可欠だ。

「……分かったよ。今代わる。妙なことは言わないよ」

「はっ何様だてめえ。言っておくが俺の方が紫さんとの付き合いは長いぜ?」

これも本当のことだ。くそっ、こいつしょうもなく嫌な奴だ!

何かこいつに嫌味を言っつてやらねば気が済まない。

「俺も言っつておくが、俺は紫の隣の部屋で暮らすからな」

「!?!?!?」

電話口の向こうで近藤が声にならない悲鳴を上げているようだったので、俺は多少満足して紫に声をかけた。

「天界悪魔部伝達課の近藤とかいう奴から仕事の電話だ。細心の注意を払った上で代わってくれ」

紫はこくりと頷いて俺の隣まで歩いてきて、受話器に耳を当てた。

「もしもし」

「はああああんっ紫すわん! お話できてわたくし幸せです! いやあ紫さんの声が美声過ぎて受話器からマイナスイオンが出てるみたいですよお! めっちゃ癒されます!」

近藤の声が漏れ聞こえてきた。こいつ、多重人格者なのかもしれない。

「気持ち悪いです」

「え? カッコいいです? そんな、いきなりどうしたんですか!? 今世紀最強のモテ男のわたくしでも流石に、照れますよお!」

あまりの気味悪さに俺は冗談じゃなく気分が悪くなってきた。紫は真顔で軽くあしらっているし、まあ大丈夫なのだろう。近藤の声が聞こえない居間のテーブルまで移動して俺は腰を降ろした。

十分ほど下らない問答があったあとで、紫の口調は真剣なものになった。

「そうですか。分かりました。すぐに行ってみます。はい。分かりました。それでは」

紫が受話器を戻した。

「春見君」

「ん？」

紫の口調は真剣なままだ。

「悪魔の被害が出ました。初仕事です。行きましょう」

二話（後書き）

二話でした。お読みくださって、ありがとうございます。感想待っておりますので良ければお願いします！悪い点のアドバイスなどは非！

三話

外に出ると日はまだ強いままだった。太陽は俺がここに来た時より幾分西に移動しているが、まだ夕日とまではいかない。三時半とか四時とかその辺だろう。

俺は紫と並んで海までの道を歩いていった。俺が先程、紫のアパートを探して歩いた道を逆戻りする形になる。白っぽく見えるアスファルトの両側には田園風景が延々と続き、所々に農家と思しき瓦屋根の家がある。しょうもない田舎だ。紫によるとここは奏木町といい、駅の方まで行けば商店街くらいはあるという。

「仕事ってことは、幻覚を見ている奴を説得しに行くのか？」

「ええ。幻覚なんて見る必要はない、と諭すんです」

「でも全員が全員幻覚を見ない方が良かったことはないんじゃないのか。その幻覚ってのは自分が望んだものなんだろう？」

「私たちがそういう判断をしたならば、幻覚を見せたままでも良いんです。仕事を全部こなさないと減給、とかはありませんから。でも幻覚を見なくても良い、と判断した人の幻覚は解除します」

「ふうん」

果たしてそこに意味はあるのだろうか。悪魔に幻覚を見せられている人間は、自分の余命を自覚した人間だ。数週間後に自分は死ぬ。そう自覚させられて今までの人生を振り返り、何か欲求が生まれる。それが幻覚として現れる。別に誰の迷惑にもならないし、むしろ当人にとっては幸せだと思う。なぜ説得する必要がある？それに他にも疑問に思うことがあった。

「場合によっちゃ幻覚を見せたままで良いんなら、最悪、死神なんていなくても大丈夫なわけだろ？みんなが幻覚を死ぬまで見続けるっただけで、他人に迷惑はない」

「極論を言ってしまうばそうです」

「じゃあどうして死神は存在する？」

一拍おいて、紫は言った。

「それは、死神の役目が単なる人助けだからです」

日傘に隠れて紫の表情を窺い知ることはできない。弱まらない日差しが俺たちの影を短く作っていた。

「なくて問題はないけれど、あつた方が良い。そんな程度のものです。私たちは」

「そんなあやふやな理由で楽しい天界生活から追い出されるのは本当に酷いもんだよな」

「そうですね。私も天界は好きでした。要は天国ですから」

多くの死神は、自分が選ばれたことを不幸と感じる。自分が生前生活していた場所に赴任することはできないし、生きている知り合いに会うことは許されないからだ。

「紫は、今まで何人くらい担当してきたんだ？」

「二十人くらいです」

「結構多いな」

悪魔の被害つていうのはそんなに頻繁に出るものなのか。紫は一年ほど前に死神になったというから、大体二週間に一人くらいの計算になる。

「そいつらをみんな説得してきたのか」

「ほぼ全員幻覚から解放しました」

「そりゃすごいな。エリート死神じゃんか。みんな幻覚から解放されて喜んでたか」

「さあ。私はそういうのには疎いので、よく分かりません」

確かに紫は心の機微とかに鈍感そうである。でも百パーセント全員が喜びはしなかっただろう。幻覚にずっと浸っていたかった奴も

大勢いたはずだ。現実から目を背けたくなる奴の気持ちは良く分かる。しかもそれが自分の死期を悟った時なら、叫びだしたくなるほどに現実には怖いだろう。

というか、そいつらをみんな説得してきたって、それはすごいことじゃないか？こいつは、会った時から表情などほとんど変えず、辛辣な非難を浴びせることもしばしばだ。決して多弁な方ではないし、本人の言う通り心の扱いに長けているわけでもなさそうである。一体どうやっているんだ。

「紫はさ、説得とか得意なのか？」

「まさか。人と話すのは苦手です。聞かなくても分かりそうなものですが。馬鹿なんですか？」

一言余計だった気もするが、まあ予想通りの返事ではある。これまでの（と言っても数時間程度だが）紫を見ていても、とても見えず知らずの人間と気さくに話せるタイプではないことは分かる。

しばらく話題が途切れて、沈黙が俺たちを覆った。蝉の声があちらこちらから聞こえてくる。真夏に聞くような大合唱ではないが、夏を感じるには申し分ない音量だ。ねっとりとした熱気が鬱陶しい。

手持無沙汰になって、俺はなんとなく紫を見た。真っ黒い髪で、真っ黒いワンピースを着て、真っ黒い日傘を差して、俺の隣をやたらと綺麗なフォームで歩いている。華奢な肩とか腰のラインとか、大きすぎないけど小さすぎない胸とか、かなり目のやり場に困った。いやまあそもそも紫から目を離せばいいのだけど、なかなかそれではできずにいた。

「春見君、気色悪い目で見ないで下さい。変態が隣を歩いているなんて、寒気がします」

「……すいません」

もうちよつと可愛げのある言い方はできないものか。もつとこつ、赤面して恥らつてみるとかさ。そんな、マジでゴミを見るような目で見られると流石に凹む。

ちよつと注意してみるか。

「なあ紫、お前もうちよつと可愛く反応できないものか？」

「可愛く？」

「そつだ。『そんな風に見られると恥ずかしいです、春見君……』
みたいなさ」

「それが可愛いですか？」

「うむ」

個人的にはとても。

「そつですか。でも、どうして私が春見君に可愛いことをしなくてはならないのですか？」

それは、お前は元が凄まじく綺麗だから、とは当然言えず、俺はどうしていいか分からないままもごもごと口を動かすことに終始した。

「私は、春見君に可愛いと思ってもらおうとは一切思いません。残念でしたね」

眉ひとつ動かさず紫は言い放つた。黒すぎる瞳は前だけを見つめている。どうも脈は全く無しのようなようだった。いや、最初から期待はしていなかったけどさ。

そんな風に話していると、碧いガラスを粉々に砕いたような、輝く水面が見えてきた。そこへ続く罅だらけのアスファルトはゆらゆらと夢のように揺れている。

「こんな所まで来ちまつたけど、どうして海なんだよ？悪魔に襲わ

れた奴の家に行くんじゃないのか？」

「今から会いに行く榊奈絵という人はいつも海にいるそうです」

「そりゃ随分な物好きだな。漁師の娘とかそんなところか」

「分かりませんが、港に行けば会えると近藤さんが言っていました」
近藤がねえ。

田んぼが途切れ、頼りない防砂林を抜けると海に着いた。

目の前にある堤防を超えれば、数時間前俺が落ちてきた（？）砂浜に降りることが出来る。空も海も、まだ青いままだ。日光を反射する水面が眩しくて俺は目を細めた。

「いました。春見君、行きましよう」

熱気を孕んだ潮風が紫の髪を揺らす。漁港のある方へ、紫は歩き出していた。

砂浜に沿って続く、防波堤の少し先。コンクリートでできた栈橋の付け根あたりに、女の子が座っていた。その顔には見覚えがある。まだ記憶に新しい。

海を見つめて独り言をしていた、あの女の子に違いなかった。

四話

少女は既視感さえ覚えるほど同じ場所で、同じことをしていた。つまりただただ海に向かって独白するという行為。俺と紫が近寄っても、口の動きは止まらず、訪問者を意に介する様子はない。紫はそれを日傘の下からじっと見つめていた。

「……、行きたいですね。絶対に一緒に行きましょう。みんなと一緒に行きましょう」「あははっ、確かにそうですね。じゃあ季節はいつが良いでしょうか?」「私はいつでも良いです」「うーん、じやあ、秋。紅葉が見たいから」

ひどく楽しそうに、少女は一人で喋り続ける。屈託のない笑顔は健康的に日焼けし、太陽のような笑顔が良く似合っていた。

「ずっとこの調子なんだよ」

「ずっと? 春見君、この人を知ってるんですか?」

「ああ。現世に来てすぐに会ったんだ。そんなときもずっと独り言を言ってた」

「そうだったんですか。近藤さんの言っていた特徴と一致しますから、この人が榊香奈絵さんです」

「ならこの独り言は……」

「幻覚を、見ているんでしょうね」

静かに、呟くように、紫は言った。

幻覚。自らの死が近づき、それを悪魔に自覚させられた上で叶えられた幻。榊香奈絵というこの少女の独白はそれに起因するという。ということとは、同時に、榊の身には死が近づいているということだ。実感がなかった。悪魔に襲われるということは、数週間後に死ぬと

いうこと。頭では承知していた。だが、実際に目にしてみるとそれはあまりにも残酷なことだった。病気でもないのに、余命が分かる。近々なんらかの事故で自分は死ぬのだと、この少女は知ってしまったのだ。

それなのに、笑っている。これでもかというほど、楽しそうに。

それは幻覚のためだろう。どんな幻覚を見ているかは分からないが、誰かと話しているのだということは台詞の端々から解る。それが彼女を救っている。死を悟ってなお、笑みを保たせている。

「榊さん」

紫が声をかけた。

「榊さん」

それでも、榊は反応しない。ただ、海に向かって喋り続けるばかりだ。

「やっぱり、そういう観光地に行ったらご当地グルメですよ。私は結構食べますよ。あ、それとアイスクリーム。でもどうして観光地ってアイスクリームが売っているんでしょう？」「そうでしょうか？ でももしかしたら　　ぐっ」

榊の表情が歪んだ。笑顔は消え、眉間にしわを寄せた苦しげな表情が浮かんだ。口元を手で押さえ、身を屈める。

「おい！？」

まただ。俺がこっちに来てすぐ会った時も、こいつは同じように苦悶していた。

「と、とりあえず、横になるか？」

どうしたら良いかなど分からない。生前、病人の看病などしたことがなかった。ただ怠惰に生きてきただけだ。急な対応など論外である。

焦ることしかできない。その間にも榊は嘔気に耐えているようだ

った。俺は、焦ることしかできない。

「春見君、どいてください」

役に立たない俺を退けて、紫がしゃがみ込んだ。白く細い手で、
榊の額に触れる。

「榊さん」

紫が呼びかけると、榊は苦しげに顔を上げた。

「うつ……うつ、ど、どなたですか？あ、いえ、確かあなたは……」

まだ幾分青白い顔をしているが、榊の目は今度は海を見つめては
いなかった。紫と俺を交互に見比べている。彼女にとっては突然の
訪問に驚いているようだ。汗で額に張り付いた前髪を整えて、榊は
座り直した。

「あの、ええと、すいません。なんか、具合悪くて。ご迷惑お掛け
しました。先程は失礼な態度を取ってしまったし」

榊は俺に向かって恭しく頭を下げた。栗毛色の髪が垂れる。

「いや、別に良いんだよ。それより、風邪ならマジで家帰って寝て
いた方が良いんじゃないのか？」

夏とはいえ、こんな海辺でずっと座っていて体に良いわけがない。

「あはは、そう、ですね。気をつけます」

困ったような笑みを浮かべて榊は言った。

俺は独り言のことを言おうとして、寸でのところで言葉を飲み込
んだ。数時間前、それを聞いた時の榊は様子がおかしかった。おそ
らく独り言が幻覚であることに関係するのだろう。

ちらりと紫を見た。日傘に遮られて表情は見えない。

やがて紫は口を開いた。

「あなたは、生きている間に、何がしたいですか」

涼しげにまつすぐに、そう尋ねた。

その途端、榊は後ろから矢で打ち抜かれたような顔をした。目を

見開き、言葉を発するでもなく口をぱくぱくと動かした。白いワンピースの裾を握る拳は、力を込めすぎているのか血色を失っていた。僅かに震えているようにも見える。

「ど、どうして、知ってるんですか……？」

「私は、死神ですから」

「死神？じゃあ、あなたが私に……？」

「いいえ。貴女に死期を悟らせ、望みを尋ねたのは悪魔であって死神ではありません」

「……」

榊はじつと自分の拳を見つめて黙り込んでしまった。普通なら、紫の言ったことは意味不明だ。語彙も文意も現実離れしていて理解できない。しかし、榊にはそれを受け入れることのできる事情があるのだろう。唇をきつく噛みながらも、次の言葉を探しているように見えた。

「榊さん」

「はい」

「話を聞かせてくれますか」

「……はい」

しばし逡巡した後、そう答えた。紫の冷静沈着な口調は人からものを聞きだすのに効果覲面のようだ。

一つ大きく深呼吸をして、悩みを吐露するように榊は語り始めた。

「お父さんと、お話がしたかったんです」

五話

「お父さんは、漁師でした。この奏木港から毎朝船で漁に出るんです。朝って言っても、まだ日の昇らないような真つ暗な早朝です。自慢のお父さんでした。とつても幸せでした」

昔話を聞かせるような口調で、榊は言った。

「お父さんが獲ってきた新鮮なお魚を沢山食べました。傷ついたりして商品価値の無くなったお魚は市場へ出さず、お父さんが持って帰ってきたからです。とつても美味しかった。その日の海はどんな様子で、魚はどれくらい獲れたか、誇らしく語るお父さんが好きでした」

「ずっと、幸せな毎日が続くと思っていました」

榊はそこで言葉を切る。憂うように長い睫毛を伏せた。

「……ある時ね、嵐が来たんです。そもそもその時は何十年に一度つていう酷い不漁で、奏木の漁師たちはみんな困っていました。私たちは元からあんまり裕福ではなくて、その時の不漁は大打撃でした。とつてもとつても困りました。だから、お父さんは私と漁師仲間の反対を押し切つて、一人で嵐の中漁に出ました。お父さんは船の運転が上手だつて、みんなに褒められていたし、私は信じていました」

でも、だめだった。帰つては来なかつた。そう、榊は続けた。

「馬鹿ですよ。あんな嵐の中漁に出るなんて。戻つてこられるわけがないじゃないですか……」

榊の目に滴が浮かんだ。それは目尻に溜まっていき、やがて一筋の線になった。日の光を受けて、榊の涙は眼前に広がる海のように

輝いていた。

「私がつと必死に止めれば良かったんです。私が必死に懇願すれば思いとどまってくれたかもしれないのに、できなかつた。お父さんなら大丈夫だと心のどこかで思っていた。お父さんは、私のために漁に出たんです。裕福でなかつた私たちが、私が、困らないように。お金を稼ぐために。私が悪いんです。私が悪いんです。私だつて高校生なんだから、どこかでアルバイトでもしてお金を稼げばよかった。でも私はお父さんに甘えっぱなしだつた。そのせいで、お父さんはあの日無理に漁に出なければならなかつたんです。私のせいなんです。全部、全部、全部……」

榊の言葉は、叫びだつた。涙ぐみながら、見えない何かに向かつて叫んでいた。頬にはもう幾筋もの涙が流れ落ち、顔はぐしょぐしょに濡れていた。目を真っ赤に腫らして、嗚咽を漏らしている。その呻きは波の音に調和して、海風にのつて掻き消えていく。

「優しい、人でした……。もつと、生きていて欲しかつた。もつと、一緒に居たかつた。一緒に生きていたかつた……。っ」

風が強くなつた。榊の真っ白いワンピースがはためく。

肉親を失つた人間にかける言葉を俺は知らない。俺は近い肉親を失つたことがない。せいぜい祖父母くらいだ。所謂核家族というやつで、都会に住む俺と両親とは違い田舎の実家に住んでいたから、年に数回会う程度だつた。そのためか涙を流すほどの悲しみは感じなかつたのを覚えている。葬式など退屈なだけだつた。

だが、俺の目の前にいる少女は違う。父親という、もつとも近い血縁者の一人を失つた。その悲しみや、喪失感など、俺には想像し得ない。中途半端な同情とか、中身の無い慰めなんて、相手を傷つけるだけだ。でも俺には中途半端な同情と中身の無い慰めの言葉しか思い浮かばなかつた。

「大好きでした。お父さん」

「……」

そこで榊はため息をついた。しゃっくりを止める為にも、なにか決意をするためにも思えた。

「そして、今度は私でした」

ゆっくりと、一文字一文字を噛みしめるように、榊は言った。

今度は私。前はお父さんっていうことだろう。死ぬ、ということだ。榊香奈絵は悪魔に襲われた。自分の死期を知らされたのだ。今度は自分が命を落とすことになる。それもあと数週間で。榊は、何を思ったんだろう。だが、俺にそれを尋ねる勇氣はなかった。

どうせ何の役にも立たない励ましの言葉が思いつくだけだ。

だから、

「そうか」

としか言えなかった。これ以上榊香奈絵を傷つけたくなかった。だって、十分過ぎるほどに榊は傷を負っている。もう、十分だ。

だが紫はさして気にした様子もなく、言葉を返していた。

「そこで、貴女は自分が死ぬまでの間父親と会話がしたい、と悪魔に願ったのですか」

「……そうです。何日か前のある夜、夢に見たんです。誰かが私に話しかけている夢です。その誰かは言うんです、私がもうすぐ死んでしまうって。そんなことどうして判るんだって私は言い返しました。そうしたら、私は夢の中でさらに夢を見ました。自分が死ぬ瞬間の夢です。怖かったです。それはあまりにも現実的で、年齢は今と変わりませんでした。もうすぐ自分は死ぬんだって思いました。あんな夢を見てそう思わずにはいられませんでした。そして私がそう悟ったあとで、誰かは続けました。死ぬまでの間、お前の望みを

一つ叶えてやるって。だから私は、お父さんと話したいって答えたんです。それ以来、あの日お父さんが旅立ったこの港にいと、海の方からお父さんの声がするんです。話せるんです」

それで榊は海と話すように独白していたのか。それなら、今日出会いがしらに「独り言なんて」とか言った俺の言葉に立腹したのも無理はない。謝罪したい気持ちにかられ、俺は謝ろうとするが、紫が先に言葉を発していた。

「それで、貴女は幸せですか？」

辛辣とも取れるその発言に、榊は頷いた。

「もちろんです」

「そうですね」

実に素っ気なく紫は返す。無神経にも程があるという具合に。だがその素っ気なさがむしろ榊の心を軽くしているようにも思えた。なんでもないように話す紫につられてか、榊も幾分平静を取り戻していた。

「あのう、私は本当に死んでしまうんでしょうか……？」

相手の様子を窺うように問う。目は真っ赤に腫らしたままだ。

「貴女がそういう夢を見たんでしょう」

「でも、でも、」

「あなたは、数週間後には死にます。死神が言うんだから絶対です」それはあまりにも強引な物言いだ、そんな説明以外ないのかもしれない。だがそれを聞いても榊はさして驚いた様子は見せなかった。

「死神って言いましたよね。どうして私のことを知っていたんですか？」

「夢に願いを叶える誰かが登場したのと同じ理由です」

「同じ理由？」

「偶然、です」

「よく分かりませんが、世の中って不思議なことがあるんですよ」

「ええ」

「死神だつてこと、私は信じますよ。あ、お名前は何て言うんですか？」

「黒江紫、です」

「くろえむらさき、さん。綺麗な名前ですね。死神さんですか。愚痴こぼしちゃってすいませんでした。つまらないお話でしたよね」

「いえ、仕事ですから」

榊は目こそまだ赤いものの、すでに涙は止まっていた。薄くではあるが笑顔さえ浮かべている。どうやら、紫は本当は説得とかが得意なのかもしれない。俺にはできない素っ気ない態度で、相手の心を開いてしまう。榊じゃないが、不思議なことつてあるもんだ。「私は今、すつごく幸せなんです。話せないと思っていたひと話すことができ」

もうすぐ自分が死んでしまっても構わないくらい。と榊は続けた。死を控えてなお平静を保っている理由。幻覚に支えられて、榊香奈絵は短い余生を笑顔で過ごす。

太陽はいつの間にか傾いて、日は赤みを帯び始めていた。遠く東の空は藍色に滲んでいる。

「うづく……」

うめき声がした。見ると、榊がまた青い顔をして俯いている。風邪はこじらせるると案外洒落にならないものだ。

「もう帰れって」

「……はい。今日はもう満足です。帰ります」

額に冷や汗を浮かべながら榊は言った。海の方へ投げ出していた足を引っ込め、防波堤の上に立つ。

「死神さんたちとの会話、楽しかったです。私は死ぬまでは大抵ここにいますもりなので、良かったらまたお話ししましょう。それじゃあ」

「あ、送っていいこうか？」

柄にもなく、俺はそんなことを言った。気安い同情、なんかではないつもりだ。

「いえ。漁師の家というだけあって家はすぐそこですから。ん、そういうえば彼氏さんのお名前は？」

は？

「彼氏さん？」

「黒江さんの彼氏さんじゃ、ないんですか？ あ、死神にはそういうのはいんですか？」

それは、どうだろう。分からない。いや、その前に否定しなければならぬことがある。

「俺は別に紫の彼氏なんかじゃねえよ」

そればかりかまだ知りつて半日と経っていないのだ。ふと紫の様子を窺うと、紫も口を開いた。

「こんな薄汚い小物が恋人だなんて自殺ものです」

いや、そこまで言わなくても……。あまりの言われように腹を立てる気さえ萎えてしまう。

「ま、まあとにかくそういう関係ではないんだ」

「そうなんですか。つまらないです」

「変なところで落胆しないでくれ。ちなみに名前は春見秀人だ」

「すみません。ちょっと調子に乗っちゃいました。はるみひでと、さん。黒江さんに負けず劣らず素敵な名前ですね」

「そうか？」

妙に人の名前を褒めたがるやつだ。

「では、お名前も教えていただきましたし、本当にこれで」

そう言つて榊は踵を返し、すくと堤防から飛び降りた。数時間前と同じように細いアスファルトの道に這入っていき、姿を消した。

やがて紫も腰を上げた。

「私たちも帰りましょう」

五話（後書き）

五話でした。お読み下さった方に感謝です。ありがとうございます。
感想、よろしければお願いします。アドバイスなどは是非！

六話

篝原壮の自室に戻ると、家具が全てセットされていた。俺がここに住むということ了近藤に言ったためか。中々趣味のいいデザインの家具たちが趣味のいい配置で素直に収まっていた。仕事が早いというか、天界のやることには驚かされる。

突然だが、俺は料理ができない。料理素人の定番、目玉焼きすら危うい。せいぜい湯を沸かしてカップに注いで三分待つくらいが限界だ。まあ生前の俺の生活スタイルを鑑みれば当然のことなのだが、いざ篝原壮の自室に戻って腹が減ってみると、料理ができないという不便さは尋常ではなかった。昼間こっちに来てから何も口にしてはいないのだ。腹も減る。しかし、奏木町にはコンビニなんて気の利いたものはない。駅前には商店街はあるらしいが、駅への行き方など知らない。

と、いうわけで。

俺はお隣さんの力を、つまり紫の料理を頼るしかなかったのである。

そんな他力本願極まる決定を下し、「黒江」と表札を掲げた扉の前に立った。出会ってから半日も経たないうちに料理を食わせるだなんて失礼だし、そもそもこんな時間に女の子の部屋にお邪魔するのは嫌がられるかも、という疑念が頭をよぎった。だが彼女は俺の空腹を満たす最終手段であることも確かで、背に腹はかえられないのであった。しょうがないことなのだ。

ノックをしようとして手を上げたところで、不意にその扉が開いた。俺は驚いて一歩下がってしまい、出てきた紫と目が合っても咄

嗟に言葉が思いつかなかった。

「何をしているんですか」

「いや、別に覗きをしにきたわけじゃないぞ？」

「仮にそうだとしてもドアからは何も覗けません」

確かに。アホな墓穴を掘ってしまった。

「うん確かにそうだ。次からは庭を使う」

「本当に覗きにきたんですか？ 磔にしますよ」

「……。違うって。実は紫に頼みがあつてだな」

ここからが本題だ。自然に紫に受け入れられるような頼み方をしなくてならない。ここで断られたら餓死してしまう。

「奇遇ですね。私も春見君に頼みがあつて今から部屋を伺うところだつたんです」

そうなのか。ならここは先手を紫に譲って貸をつくり、そこにかこつけて俺の頼みも聞いてもらおう。などとせいこいことを俺は考えた。

「紫の頼みはなんだ？ 俺がなんでも聞いてあげよう」

「そうですか。では春見君」

「うむ」

「お腹が空きました」

「お前、料理できなかったのかよ」

「春見君こそ、本当に使えない男ですね」

ずばばばば、ずるるるる。俺たち二人は結局紫の部屋でカップ麺を啜っていた。死神として現世で暮らすこと約一年間。紫は駅前商店街で購入した即席麺やら冷凍食品やらお惣菜やらで食いつないできたらしい。部屋を見る限り、掃除や洗濯は器用にこなすみたのだが、料理は駄目なのか。

「私の嫌いな食べ物を知っていますか」

「知らん」

「添加物の味がする食べ物です」

良くこれまで生きてこられたものだ。今食ってるカップ麺なんか添加物の塊みたいなものだろうに。

「私は最初自分のもとに新任死神が来ると聞いて浮足立ちました。まともな食べ物ができるかと思っただからです」

「そりゃあ悪かったな。俺もカップ麺くらいしか作れないんだ」

「絶望しました」

失望ではないのか。

紫は表情一つ変えずラーメンを口に運んでいる。佇まいというか纏っている雰囲気というか、そういうもののせいでこいつは何をしなくても様になる。上品に整った顔立ちと俗っぽいカップ麺のパッケージが不似合に感じた。本当に、容姿だけは完璧な奴だ。

「また、私のことを見ていますね。警察呼びますよ。というか本当は料理ができるんだけどあえてそれを隠し、私の部屋に入る口実を作ったのかもしれませんがね。ど変態ですね」

しつこいようだが、容姿だけである。

こういう時は話題を変えるのがスマートな対処法だ。

「ところで、榊香奈絵を幻覚から解放してやるつもりなのか？」

紫は麺を口に運ぶ手を止め、俺と目を合わせた。黒すぎる瞳は水晶のように綺麗で、俺は一瞬呆けたようになってしまった。

「まだ分かりません」

「ってことは解放するってのも策な訳だろ。なあ、それって意味あ

るのかよ？」

榊は父を失った悲しみを、涙を流しながら吐露した。それでも、父と話せるという幻覚のおかげで彼女は笑っていた。榊は、あと数週間で死んでしまう。死因はおそらく不慮の事故。タイムリミットは近いのだ。その短い間の安らぎ。それを壊す必要がどこにある？

「意味があるかもしれないから、まだ分からないですよ」

「俺はないと思うけどな」

「これから色々調べてみます。そもそも幻覚を解くには説得するか方法がありませんし、私たちの説得に彼女が納得するかどうかも分かりません」

「そうだったら榊は幻覚を見たまま死を迎えるのか」

「はい」

「本当に、死神つてのは人助けなんだな」

「百パーセント善意の人助けです」

天界は面倒な役割を創ったものだ。死者をランダムに引き抜いて現世の強制帰途させた上、見ず知らずの他人に善意を行使することを強要する。まったく酔狂だ。俺のような人間にはそういうのは全く合っていない。人選ミスも甚だしいというものだ。

「さて、春見君。不味いラーメンは食べ終わりましたし、私はもうお風呂に入って寝ようと思います」

紫は立ち上がって、カップと割り箸をゴミ箱に捨てた。

「そうか。じゃあ俺もそうするよ」

壁に掛けられた時計の針は十時を指していた。生前なら下らないテレビゲームでもしていた時間帯だが、今日は何かと疲れたし、このくらいの時間に寝るのも良いかもしれない。

そんなことを考えていると、紫はやや声のトーンを落として言うてきた。

「そのお風呂なのですが、私にとっては不幸、春見君にとっては幸福なことに、昨日から私の部屋のシャワーが壊れているのです」

「そりゃあ大変だな。でもなんで俺にとって幸福なんだよ？」

「なぜなら春見君の部屋のお風呂を貸していただくしかないからです」

「……」

平坦な声で淡々と言った。

「というわけで、お風呂を貸していただきます」

え？え？おいおいおい。

「ま、待て。風呂を貸すのは良いんだが、その間俺はどうしていたら良い？」

紫は知的に顎に手を添える。

「私の部屋に居られると私の下着が入った箆笥を引っ掻き回したりしそうなので、決して覗きなどの行為をしないと約束し、自室でテレビでも見ていて下さい」

箆笥引っ掻き回したりなんかしねえよ！

「どど変態の春見君にできるでしょうか」

「どが増えてるぞ！ くそっ、俺がそんなに肉食系な野獣に見えるか！？」

なんだか俺は悔しくなって、必要のない自己嫌悪に陥っていた。紫にもてあそばれている気がしてならない。

「良いだろう！ 俺は覗きなどと言う卑劣な行為には走らない！約束する！」

「じゃあ正々堂々お風呂に押し入ってきたりするんでしょうか」
「するか！」

六話（後書き）

六話でした。稚拙な文章ですがお読みくださった方に感謝です。
お風呂の話は次回にも続きます。

感想待ってます！アドバイスいただけると嬉しいです！

七話

それはさながら拷問のようであった。

絶対にテレビから目を離すな、と血も凍るような冷たい声で脅迫されたために、俺はソファーに身を預けてテレビ画面を凝視している。紫は護身用とか言って自室から包丁を持参していた。恐ろしいほどに徹底したやつだ。背中が寒いのは扇風機の風が強すぎるからではあるまい。

そんな中。

しゅるる、ぱさ、という衣擦れの音が俺の鼓膜を絨毯爆撃していた。薄っぺらい木の扉をはさんで向こう側の脱衣所では、紫が今あられない姿となっていていよう。

ん？今のはワンピースを脱いで床に落とした音か？ま、まさかこれは下着では！？

と、大変健全な妄想が俺の脳内で独裁政権を樹立しつつあった。すべてはテレビのポリウムが低いのがいけない。

じゃあ高くすれば良いじゃないか。

だが死んでいるとは言え、心も体も男子高校生な俺がそんな蛮行を犯すはずがなかった。

「春見君、私は今、裸です」

「！？」

扉の向こうからくぐもった声。

「嘘です。今の衣擦れの音は着たままの服を擦り合せただけで、春見君の煩惱を弄んだだけです」

悪魔のような奴だ！

「テレビのポリウムを上げてください」

「……はい」

俺はリモコンを掴み、渋々ポリウムを調節した。

「下げるとは言ってません。刺しますよ」

「ごめんなさい」

紫は今頃護身用に持ってきた包丁を構えているだろう。今度こそ音量を上げた。お笑い芸人の喚く声が部屋に満ちる。これでは衣擦れの音など全く聞こえない。

やがて、ジャーというシャワーの音がし始めた。

正直言つて、覗きたいさ。

紫はちよつとあり得ないくらい綺麗だし、こんな生殺しの状況は地獄のようだ。いつそ包丁で一刺しにされるの覚悟で決行してしまうか。いや、すでに死んだ身とはいえ刺されたら痛いだろう。

というかその前に、紫を傷つけてしまうかもしれない。護身用の凶器を携帯しているからと言って、知り合つて間もない男の家で風呂に入っているのだ。それなりに信用してくれているのだろう。無防備すぎるほどに。少し、いやかなり嬉しかった。

「春見君が据え膳もろくろく食えないへタレチキン野郎だと踏んだだけです」

「風呂の中から心を読むな！　つか相変わらず酷い言い草だなおい！」

俺の歡喜も台無しだ。

それから悶々とテレビを見つめ続けて時間を過ごした。

がらがらと脱衣所の引き戸が開く音がしたのは二十分ほど時間が経つてからか。振り返ると首がバキバキと鳴った。自棄になつて食い入るように画面を見ていたせいだ。

そこに佇む紫は、それはもう、天上天下地球の裏側まで名が轟くのではないかと思うほど、可愛かった。上気して淡桃色に染まる頬、フリルとリボンをあしらつた高級そうなネグリジュ、濡れて艶めく黒髪は華奢な肩に垂れている。シックな黒いワンピースに日傘で纏まつた昼間とは違い、なんとも無防備で庇護欲を刺激される姿だっ

た。いつもは「綺麗」という印象の紫だが、今は「可愛い」という印象を受ける。

「お、おう、お、お疲れ」

つい見蕩れてしまい、変にどもってしまった。

「どどど変態に卑しく厭らしい目で見られて悪寒がしたのでもう一度お風呂に入ります」

「ああ！ すまなかつた！」

だが紫は本当に踵を反して脱衣所に戻り、勢いよく引き戸を閉めてしまった。

くそっ！ なんて潔癖症な奴なんだ！ これなら俺はもう自室でも紫の部屋でもなく、外に出ていようではないか！ そうだ、それが良い！

そう思い立って、俺は部屋から飛び出した。

扉を開けるとともに、じっとりとした夏独特の夜気が身体を覆った。いまこんなに暑かったら真夏はどうなってしまうのか。あるいは今の俺の身体が熱いのかも知れなかった。

虫と蛙の鳴き声しか聞こえない。外国人には雑音としか捉えられないという合唱に包まれて、俺は深呼吸した。むせ返るような潮と緑の匂いが肺を満たした。生前住んでいた東京のマンションとは天と地ほどの差である。舗装されていない砂利の地面は、歩きたびにざくざくという音がした。

最初からこうして外に出ていれば良かったじゃないか。無理してテレビに齧りついたりせず、もちろん箆子を引っ掻き回したりもせず、外に放り出されれば紫としても安心できたはずだ。

こめかみをじっとり汗が流れ落ちた。夜とはいえ、結構暑いものだ。早く部屋に帰って扇風機にでも当たりたい、と思った。

あいつは、存外優しい奴なのかもしれないな、なんてことを考えた。

七話（後書き）

お読み下さった方、ありがとうございます。
なんだか今回は小休止的な回になりました。こういうのも書いていて楽しいです。

次回もお読みいただければ嬉しい限りです。

感想などよろしければ！！素人ですのでアドバイス等いただけると狂喜乱舞です。

八話

翌日。用事がある、というようなことを言って紫は出かけてしまった。

榊に関する仕事は後日にするらしい。死神に仕事の他に用事があるとは意外だったが、そういうものか。そこで俺は一人まんじりともせず、部屋でテレビを見ていた。クーラーはないので扇風機が生命線だ。今日も昨日と同様、夏真っ盛りにはまだ時期尚早であるが、涼を取らねば体調でも崩してしまいそんな気温である。

体調を崩すと言えば、風邪っぴきの榊は今頃何をしているだろう。死ぬまでは大抵ここにいるつもり、と言っていたから、今日も海に向かつて喋り続けているのだろうか。

どうせ部屋に居てもすることなどない。何もしないで怠惰に時間を過ごすのには慣れてるが、昨日の榊の涙を思い出すとなんだか居心地が悪かった。

行ってみるか。海に。

そう思ったのが、死を間近に控えて幻覚に腐心する少女への同情なのか、死神としての仕事に対する意気なのかは分からない。どっちでもない気もした。

テレビを消して扇風機を止める。紫がないのに俺だけ榊に会って、実のある会話ができるかどうかは甚だ疑問だが。

それでも俺は篝原壮を後にしていた。

外に出ると息をするのも躊躇われるような熱気が迎えた。肌を纏わりついて気持ちが悪い。田んぼの緑が波打って潮の香りを運んでいた。蝉と蛙は相変わらず仲良しである。

海までの道は一本道だし間違えることもなかるう。白っぽく霞むアスファルトをゴム草履でペタペタと歩いた。

これから榊に会って俺は何を話すつもりなんだろう。父を亡くし、

数週間後には自分の命も潰えると知ってしまった彼女に、なんと声をかければ良いのかなど分からない。気軽で明るい話題を振るのはどうもわざとらしくなってしまいそうだ。紫のように淡々と冷静に話すことなんてできない。紫はあれでも器用な人間なのかもしれない。あの性格があつてこそ、死神としての説得という仕事をこなしてこられたのだろう。かなり、頭が下がる。とても真似できない。でも、榊の幻覚を覚ます説得には賛成しかねた。結果としてそれが榊を幸せにするとは思えなかった。

昨日と同じ場所に榊は座っていた。無骨な防波堤の上で、白いワンピースがはたまえている。

俺は隣に腰を降ろして、同じように海を眺めながら榊の一人語りを聞くことにした。

「え、飛行機ですか？電車にしましょうよ。飛行機だとあっけなく目的地に着いちちゃってつまらないですよ。電車でのおんびり行きましよう」

昨日から、亡き父親と旅行の話でもしているのだろうか。海と談笑する彼女の声は本当に楽しそうで、胸が締め付けられる思いだった。

どうして、こんな奴が早くに命を失わなければならないんだ。若くして死ぬのは俺のような役立たずの屑だけで良いのに。素直そうな笑顔で榊は会話を続ける。

「電車ならグリーン車に乗ってみたいですね。今まで乗ったことないですし。夢なんですよ、グリーン車。普通の車両とは座り心地が全然違うとか」「車窓から流れ行く景色を眺めて、お弁当を食べてお話して。ほら、飛行機より楽しそうです」「本当に、楽しそうです」「絶対に行きましようっ」

榊はその言葉の語尾を強めた。はしゃぐ子供のように無邪気だ。けれど。

こいつがグリーン車に乗ることはない。旅行に行くことはない。車窓から景色を見て駅弁を食うことも、お話しながら旅を楽しむことはない。

死神に襲われた人間は死が近い、ということにずっと目を瞑ってきた。それをはつきりと理解してしまっただけ、あまりに悲しいからだ。人の死は悲しい。当然だ。だが当然のことを見ないように見ないように生きていくことだって許されるはずなのだ。なのに、榊の独白を聞いていると俺は現実を見ずにはいらなかった。目頭が、熱い。俺がこんなにも他人に感情移入してしまう人間だとは思わなかった。

「漁師仲間さんに沢山お土産を買っていきましょう」「あ、やつぱりそういうのが無難ですかね。多すぎるのも気を遣わせちゃうかもしれませんし」「お土産屋さんを沢山回って考えましょう」

榊の独白は続いていく。父と娘の会話が途切れることはない。一つ話し終わってはすぐ次の話題に移り、笑いあう。榊は忙しなく笑顔を保ち続ける。

見ているだけの俺でも口元が緩んだ。

こいつのこの幸せを、幻の幸せでも良い、できるだけ長く見せてやりたいと思った。説得など何の意味も持たない。

今日もう一度紫にそう進言してみよう。

「春見さん？」

唐突に名前を呼ばれた。見れば榊は少し青い顔をして俺を上目づかいに見つめていた。

またか。風邪はまだ治っていないらしい。体調の変化に波があつて、それが悪くなると榊は幻覚から一時的に目覚めるようだった。

「おう。暇だから来ちまった。邪魔だったか」

「いいえ。そんなことありませんよ。今日って平日ですよ。死神さんは学校に行かなくて良いんですか？」

榊は茶化すように言った。

「良いんだよ。死神つてのは一回死んだ人間なんだ。それが天界からランダムに選ばれて、現世に送られる。そうして死神として榊みたいなやつのところに来るんだ」

「それって本当に不思議ですね。そんなこと言つて信じるのは私くらいですよ。……私みたいになつて、死んじゃうことを知つてしまつた人ですか？」

「ああ」

「どうして、ですか？」

「それは……」

お前が幻覚を見なくても良いと納得させるため、とは言えない。

喋りすぎてしまったか。関係者とは言え、仕事の対象本人にあまり深いところまで言うべきではなかった。

「そ、そんなことより、お前は学校良いのか？平日なんだろ。サボりか」

榊はちよとバツが悪そうに眉間にしわを寄せた。それでも目だけ困つたように笑っている。

「サボり、です。お父さんと話していたくて」

「そっか」

それを誰に責められよう。なるほど学校よりよっぽど大事なことに思えた。

「それにしても、死神さんつて本当に不思議ですね。死んだ人だなんて。私は信じますけど」

自分がこれですから。と続けた。これ、というのは悪魔に襲われたことを言っているのだろう。死を自覚させて願いを見せる摩訶不

思議を実体験していること。

この流れで死神の目的を再度尋ねられるのではないかとひやひやしたが、杞憂だった。

「死神さんは、生前の記憶ってあるんですか」

「あるよ。とにかく駄目な奴だったのをよく覚えてる」

「そうは見えませんかよ」

「いやいや。今思うと絵に描いたような駄目人間だったよ。友達なんか全然いなくて、勉強はできなくて、部活もやってなくて、漫画とゲームに延々と時間をつぎ込むナマケモノだった」

「学校は楽しくありませんでしたか？」

「当たり前だろ。友達いないのに学校に居場所なんかねえよ。休み時間の度に意味もなくトイレに二回も三回も行って時間つぶしたりしてたな。忙しいアピールだよ。友達いないわけじゃなくて今たまたま忙しいんです、って周りに誇示するわけさ。バレバレなのがまた空しくてな」

「春見さん、ちょっと声かければ友達くらいできそうですよ。現に今私は楽しく話してます」

榊の言葉にお世辞らしき雰囲気はない。おそらくこいつは本当にそう思ってくれているんだろう。まっすぐな榊が羨ましく思えた。だがそんな些細なことさえ嫉妬をしていることに自己嫌悪を覚えて、俺は首を振った。

「それはありがたいけどさ、都会だとそうもいかないんだよ」

「はあ。私は奏木町からほとんど出たことがありませんからピンときませんが」

「良いことだよ。子供同士で遊ぶにしたらって、こっちでは海とか山とか自然で遊ぶだろ？都会だとゲーセンとかカラオケばかりだ。あんなところ、猥雑で五月蠅いだけだ」

まあ一緒に遊ぶ友達がいなかったから、あんまり行ったこともないんだけど。と自嘲気味につなげようと思って、しかし結局引つ込めた。そんなことを言ってまた榊にフオローされたら俺はまた下ら

ない嫉妬をして意味のない自己嫌悪に陥るかも知れなかった。優しさは嬉しいんだけどさ。良い奴過ぎるのだ、榊は。俺なんかには眩しいほどに。

「奏木町でも家でゲームしたりして遊びますけどね。やっぱり都会とは勝手が違うんでしょうか」

「そうそう。榊は友達とかいるか？」

「多い方ではないですけど、いなくはないです。たまに駅前に買い物に行ったりしますよ」

「十分だ。友達つてのは数じゃないからな。一人だつて信頼できる友達がいたらそれで良いんだ」

「こつこつこのを負け犬の遠吠え、と言うのかもしれなかった。

「今は、紫さんは友達じゃないんですか？」

それは予想外の質問だった。はて、どうなのだろう。俺はあいつから罵詈雑言を浴びせられてばかりだが、一触即発の喧嘩仲というわけではない。もちろん他人ではないし、かと言って親しい友人かと聞かれると即答できない。

「どうなんだろうな」

と俺が曖昧に濁すと、

「紫さん、すつごく綺麗ですよね」

榊は女子高校生という年相応の悪戯っぽい笑みを浮かべた。肘で俺の脇腹を突つついてくる。

「死神さんに恋はできないんですか？ あんなに可愛い人なかなかいないですよ。タレントさんだつて顔負けです。春見さん、アタックしましょう！」

榊はなんだか妙にテンションが上がっていた。どうして女子はこの手の話になると色めき立つのだろう。俺には死神の存在と同じくらい不思議だった。

「あいつがとびきり美人なのは認めるけどさ。そうは言ってもなあ、会ったのは昨日だぞ。それにあいつは性格面で少々問題がある」

「性格？ クールでカッコイイじゃないですか」

「いやなんか俺のことをことあるごとに貶してくるんだよ」

「それは愛情の裏返しですね」

「うーん、そうだろうか。もう一度言うがお互い会ったのは昨日だ。まだ二十四時間くらいしか経ってないんだが」

「恋に時間は関係ありませんよ。要るのは愛です。愛」

榊は歯を見せて笑った。楽しげだ。この笑顔を浮かべさせられただけでここまで来た意味がある。俺も自然と頬が緩んだ。

それからしばらく取り留めもない話をしていると、不意に榊は神妙な面持ちになった。

「春見さん」

「ん？」

「死んだ瞬間のことって覚えてますか？」

八話（後書き）

ここまでお読みいただきありがとうございます。

最近更新の周期が二日に一回というのが自分の中でのパターンになってきました。今後もこんな感じで行きたいと思います。

感想があれば是非m() () m 初心者ですのでアドバイスなんか貰えたりしたらもう嬉しくて嬉しくてたまりません！

九話

「春見さん」

「ん？」

「死んだ瞬間のことって覚えてますか？」

「ああ。覚えてるよ」

「聞いても、よろしいですか？」

控えめに、榊は言った。不安の色が見て取れた。幻覚に支えられているとはいえ、死への不安や恐怖があるのだろう。当然だ。だから、俺は努めて明るい声を出した。

「大した話じゃないけどな。俺は酔っ払い運転の車に轢かれたんだ。死ぬ瞬間は痛くもかゆくもなかったぜ。一種のアトラクションみたいな感じ。走馬灯つてのは本当に見えるんだけどな。まあ俺の人生なんて大したことしなかったから、ろくな走馬灯じゃなかったけど。せいぜいお袋がタコみたいに赤くなって怒ってるるところとか、親父がなんか必死にお袋に謝ってるるところとか、そんなんが関の山だ」

榊はくすくすと笑った。良かった。辛気臭い空気にならないで済んだらしい。誇らしい充実感みたいなものが、俺の胸に去来する。

「だからさ、そんなに怖がらなくても大丈夫だ」

無意識に、俺はそう言っていた。

「あんまり悲観しなくても良い。人は誰だって必ず死ぬんだから。それが他より何十年か早いってだけのことだ。天国じゃ、お前はみんなの先輩だぜ。したり顔で色々アドバイスしてやれよ」

今度は榊は何も言わず黙っていた。そうして、砕けた波の音だけが俺たちの間に流れて、十分くらい経っただろうか。おもむろに榊は口を開いた。

「大丈夫ですよ。そんなに心配してもらわなくても、私は大丈夫です。だって、お父さんも励ましてくれますから」

榊の目は遠く水平線を見つめている。それは遙か海の向こうに目

を凝らしているようにも、見えない何かを必死に探しているようにも思えた。

物憂げな横顔。よく見ると、その表情は青白く、嘔気や寒気をこらえているみたいだった。

「そついや、風邪は大丈夫なのか」

「あ、はい。全然平気です。そのうち治りますよ」

ぎこちない笑みを浮かべて、榊は言った。

次の日も紫は一人で出かけていった。あいつは榊のことは放っておいて良いのだろうか。こうしている間にもタイムリミットは着々と迫っている。なのに今日も隣の部屋は空っぽで、俺は一人寂しくカップ麺を啜っていた。

時刻は十一時。昼食を摂るには幾分早いけど、暇な人間は早くから腹が減るものだ。

取り立ててすることは無い。悪魔に襲われた人間に接し説得を試みるという仕事以外に義務はないのだ。どうも四六時中仕事に追われる職種ではないようである。その上、榊を幻覚から解放してやることに意味は見いだせない、というのが俺の判断で、つまりそれは榊を放っておくだけのことだ。

それを昨日の夜紫に進言したところ、

「そつ。春見君がそうしたいならそうすれば良いです。でも私は私

で私のしたいように動きます」

と、きっぱり返されてしまった。紫は榊を幻覚から解放するつもりだということだ。あくまで現実を見せるということ。立場上、紫が先輩で俺が見習いであるから俺は紫に従わなければならないかと思いきや、勝手にしろと言う。それならばということ、俺は今日も生前よりしく怠惰な時間を過ごしていたわけだ。

しかし。存外俺は行動的な性格であるのか、部屋で一人グダグダしていることに些か不快感を持った。生前ならば信じられない精神状態である。まだ生のある頃、俺の生活と言えば毎日が夏休みのようにゆったりと時間は流れ、布団の上で体を横たえていることに幸福と安心を感じていたのだ。それが今、出かけてやるのも吝かではない。

気が付けば外に出ている。

目的地はやはり海。奏木町に来て三日、俺の行動範囲は篝原壮と海の往復だけなのだから仕方がない。海に行つて榊に会つたつて、俺は説得する意思がない以上、それは雑談の域を出ない。ふと、死を迎えるまでの短い間だけ許される幻覚を俺は邪魔しているのかもしれない、と思った。それは説得よりもはるかにたちが悪いことだ。だがもしそうならば榊の一人語りを隣で聞いているだけでも良い。幸福の呪文を聞き流すだけでも良い。

情が移つたのか。俺はお人よしなのかも知れなかった。

今日は、酷く暑い。

「誕生日プレゼント、ですか？良いですよこんな歳にもなって。なんだか恥ずかしいです。あ、でもそういうものですかね？」「えへへ、じゃあ喜んで」

今日はそんな話だった。

父親にプレゼントを貰うことを恥じながらも了承したようだ。微笑ましくなって、そんな榊の大切な時間を邪魔しないように俺は横に座って黙っていた。

無論、話す相手は海だが、榊は榊の見えるものを信じれば良い。

潮くさい熱風に白いワンピースが躍った。空は快晴で、海はコバルトブルーに冴えわたっている。反射した日光が肌を焼く。

思えば、生前の記憶の中に海はない。家族で海水浴など気恥ずかしい以前に退屈そうだった。一緒に海に出かけるような友人はいなかったし、カノジョなど言うまでもない。夏はクーラーの効いた部屋でゲーム。

そんな俺に、気の弱い父が一度だけ聞いたことがある。「お前は将来大丈夫なのか？」あれだけ非社会的な生活を送っていたにも関わらず、父はそんな文句を一度しか言わなかった。母は毎日のように喚いていたが、馬耳東風。それだけに、父からの一言はしばらく俺の心にとどまったのだが、それも三日持ったか持たないか。結局「知らねえ」と突っ返してしまった。

生前に未練はない。不思議と両親にまた会いたいとも思わない。ただ、親不孝を後悔していないのかと聞かれれば、答えは判然としない。まあ今更何を後悔してもどうにも世界は変わらない。俺はもう死んだのだから。

空を見上げる。一匹のカモメが旋回するように頭上を飛んでいた。今日は真夏のように暑い。日差しが強く、肌に鉄板を押し付けられているようだった。

「坊主」

しわがれた声がして、俺は振り返った。依然一人語りを続ける榊の後ろに、中年の男が立っていた。奏木の漁師だろうか。顔に刻まれた皺のわりに、がっちりとした体つきをしている。赤銅色に日焼けした肌に、白い手ぬぐいが似合っていた。

「坊主、香奈絵ちゃんの知り合いか」

ガラガラした声が榊の名を呼んだ。

「はい。友達です。あの、あなたは？」

「そこで漁師をしてる桐嶋善次郎って者だ」

桐嶋は後ろを指差して言った。指の先には奏木漁港があり、数隻の漁船が停泊していた。

「香奈絵ちゃんとはちよつと関わりがあつてな。坊主の名前を聞くじゃないか」

春見秀人です、と俺は会釈しながら答える。桐嶋はふうんと鼻を鳴らして頷いた。

「ここんところの香奈絵ちゃん、変だろっ？」

「ええ、まあ」

ここんところもなにも俺は最近の榊しか知らない。だが海と会話し続けているというのは、「変」と評するに十分値する。桐嶋はただでさえ皺の多いその顔にもつと皺を寄せて、心配だよ、と呟いた。悪人には見えない。一見人相が悪く見えるが、その皺の奥には優しさが見えようを感じた。

「坊主あまり見ねえ顔だが越してきたのか？」

「はい。東京の方から。父の仕事の関係で」

適当な嘘をついておく。死神の存在を第三者に漏らすのは厳禁だからだ。

「この町に仕事の都合で来るなんて珍しいな。商店街の方で働いてんのか」

「そうだと思います」

「そうか。香奈絵ちゃんとは結構親しいか」

「そこそこ、ですかね」

出会ったのは三日前、とはなんだか言いづらくて話を合わせてしまった。でも実際そこそこ程度には仲がいいはずだから問題はあまりない。

「そんなら坊主、香奈絵ちゃんを見とつてくれよ。最近どうも調子が悪いようだし、心配なんだ。俺はこれから漁に出にやならんし、頼むよ」

桐嶋は困ったように目を伏せて、堅そうな口元をもごもごと動かし、随分と禰の身を案じている。丸太のように太い腕や、幹のように頑丈そうな胴に関わらず、桐嶋は酷く小さく見えた。

「桐嶋さん、禰とはどういう御関係なんですか？」

「ああ、知らんのか。まあ色々あってな」

そう言つて桐嶋は踵を反した。漁港の方へ歩き出す。じゃあな、と後ろ手に手を振った。色々、とは漠然とした答え方で追求したくなつたが、大きいような小さいような桐嶋の背中は何も答えそうになかつた。俺は後ろ姿を見送ることしかできず、姿が消えるまで見つめていた。

漁師で禰の知り合いと言つことは、禰父の知人かもしれない。はつきり答えたがらなかつたのも、仕事仲間である禰父の死を思い出したくなかつたからだろう。船の運転が上手く勇敢だった禰の父は漁師仲間にも慕われていたわけだ。

そんな父を思つて、少女は海に語り続けていた。

「えへへ、お父さんのお誕生日には、私がケーキを作ってあげます。

もちろんプレゼントもありますよ」「無理なんてしません」「びっ
くりまするおじいさまの、です」「

九話（後書き）

九話でした。お読みいただきありがとうございます。

自分より遙か年上の人物を書くのは難しいです……（汗

感想待ってます！辛辣なアドバイスなども是非！！

十話

「えへへ、お父さんのお誕生日には、私がケーキを作ってあげます。もちろんプレゼントもありますよ」「無理なんてしません」「びっくりするようなもの、ですっ」

ずっと海に居るからか、榊の顔は健康的に日焼けしている。太陽のような笑顔が良く似合う。これだけ愛されて、榊の父も喜んでくれるだろう。

「どんなケーキが良いですか？私はチョコケーキが得意なんですけど」「チーズケーキ……ですか、頑張ってみます」「ああ、もちろんですよ。でも、あ、つつっ……」

言葉に詰まったその瞬間、不意に榊の身体が傾いだ。

今までのように嘔気に耐えて伏せたわけでも、青い顔をして強がったわけでもない。榊は、防波堤のコンクリートに倒れ込んでしまった。力なく四肢が投げ出される。

「榊!？」

これまでとは比べものにならない。荒く肩を上下させるだけで、榊は意識を失っていた。額には玉のような汗が溜まり、次々とコンクリートに滲みを作っていく。

頭が真っ白になった。

どうしたら良い？どうしたら良い？同じようなことは何度もあった。なのに俺はまた何もできない。そればかりか、今度はかなり重態の上、紫はいない。桐嶋の後ろ姿もすでに屋気楼の彼方に消えていた。

「くそっ！ 榊！ 聞こえるか！」

反応がない。指先一つピクリとも動く気配がなかった。

「病院に連れて行かないと……！」

しかし、俺は病院の場所など知らない。救急車を呼ぼうにも携帯電話は持っていない。状況が悪すぎる。こんな日なたに寝かせておくわけにもいかない。とりあえず日陰に運ぼう。

榊の肩と膝の下に腕を回し、そっと持ち上げた。女の子はみんな羽のように軽いと思っていたが、実際にはずっしりと人間一人分の重みはある。榊はそれでも軽い方なのだろうが。お姫様抱っこ言うやつだが、そんなことを喜んでいる余裕はなかった。

榊の身体は火傷してしまいそうなほど熱い。四十度近くあるかもしれない。

慎重に、なるべく榊の身体を揺らさないように、防波堤から飛び降りた。榊の身体が軽いにしてもこれは流石に腕の負担が大きかった。こめかみから汗が滴る。顎まで流れ落ちた。

「日陰、日陰は……」

きよろきよろとあたりを見回す。しかし、榊一人を寝かせられるような日陰は見当たらなかった。何しろ防波堤の後ろは心もとない防砂林が辛うじて存在するだけで、その後ろは延々と田んぼと畑だ。防砂林の木陰はどうだろうかと思っただが、地面は砂利の上、松の葉は大きな日陰を作れてはいなかった。

とりあえずちよつとでも日陰を伝って歩こう。最悪、篝原壮まで運んでもいい。少し遠いが、部屋に戻れば扇風機も布団も水もある。熱中症の類か、今までの風邪をこじらせたのかは判らないが、俺にはそのくらいしか思いつけない。

蝉と蛙が喚き散らす中、ひたすら歩いた。

両側が変わり映えしない田園風景であるせいか、屋気楼のせいか、歩いても歩いても進んでいる気がしなかった。

「はあ……はあ……」

暑い。汗で滑りそうになる両腕に一層力を込めて、榊を落とさないようにと腐心した。腕はがくがくと震えはじめ、筋肉に乳酸が溜まって悲鳴を上げていた。

ちらりほらりと民家があるが、そこへ行くには細い畦道を行かねばならず、そんなことをしたら田んぼに転がり落ちてしまいそうだった。足取りは酷くおぼつかない。自分の足ではないような気さえた。その時。

「春見、さん……?」

「! 起きたか!？」

腕の中の榊が薄らと目を開けて、ぱくぱくと唇を動かしていた。まだ意識が朦朧としているのだろう。上手く喋れていない。

「あの、私……、すみません……」

「喋るな。今から俺ん家まで連れて行ってやるから。そこで休め」「あ、ありがとうございます……」

榊はもう一度瞼を閉じた。少し安心した。腕に力が籠る。筋肉も関節も限界で、ティーシャツは着衣泳をしたようにびっしょりだ。額の汗が目に入って、視界が霞む。

倒れそうだ。

生前の俺に運動をする趣味などなかった。部活はやっていなかったし、体育の授業は適当に流していた。スポーツをしておけば良かった。今まで「部活熱血の奴とかキモイ。意味不明」と罵ってきた

自分が恨めしい。体力がなければ看病もできないのか。

無力感と後悔で頭がパンクしそうだった。白くぼやけた視界は汗だけのせいではないかもしれない。

大気が沸騰したような厩気楼が行く手を歪ませた。過度の疲労と厩気楼のせいで夢の中を漂っているかのような心地だ。

混濁する視界の中、田んぼが途切れた。気が付けば小高い山のすぐ下に着いている。そこに、ひっそりと眠る古城のように篝原壮が建っていた。

着いた。早く、早く榊を寝かせないと……！

両手が開いていないからドアノブは回せないことに気が付き、庭に回った。幸い俺の部屋の窓は開いていて、網戸だけが頼りなくそこを塞いでいる。棧を蹴り飛ばして網戸を外す。修理費は天界の経費から引いてもらいたい。

「おら、着いたぞ榊！」

ソファーまで何とかたどり着き、俺は脱力した。そっと降ろしてやるなんて紳士な芸当をかます余裕はない。榊の身体がソファーで跳ねたが、日陰に寝かせるという目標はなんとか達成した。扇風機のスイッチを入れて俺も膝をつく。

体がずっしりと重い。背中に石の塊でも乗せられているようだ。扇風機の乱暴な風が天国のように気持ちいい。

板張りの床に伏せる。心臓が異常な速度で鼓動している。睡魔が俺を誘惑する。

まだだ。まだ終わっていない。

渾身の力を振り絞って台所まで行き、冷凍庫から氷を引っ張り出す。それをビニール袋に入れて氷枕を作った。榊の額に乗せてやる。榊の表情が少し緩んだ気がした。あれだけの高熱だ。氷枕はさぞ

気持ちが良いに違いない。

そつだ。家族に連絡しなくてはならない。救急車を呼ぶのも手だが、まずは保護者に連絡しておくべきだろう。氷枕のおかげか柙は幾分穏やかな表情をしているし、気絶しているわけではなく寝息を立てている。妙な男がお姫様抱っこで部屋に連れ込んだことの弁解もしなくてはならない。

何か連絡先が書いてあるものはないかとワンピースのポケットに手をつ込む。他意はない。そこにピンク色の携帯電話が入っていた。なんだ、これで救急車を呼べば俺がここまで運んでくる必要もなかった。防波堤にいた時点で気が付けば良かったのと思うが、今更そんなことを考えてもしょうがない。

携帯電話を開いて電話帳を見る。「自宅」という登録の上に「父」と登録があり、胸が痛んだ。もうかけることはない番号だ。「自宅」にかけようとしてふと指を止める。もし母親が電話に出て、娘の携帯から男の声がしたら邪推は免れない。

固定電話を使うべきと踏んで、庭に出た。俺の部屋には電話がないからだ。庭でつながった紫の部屋もまた窓は開いていて網戸だけ名前を呼んでも応答がないのを見るとまだ外出中らしい。案内戸締めりとか気にしない奴なのか。まあこんな田舎で空き巣などいそうもないから良いけれど。

そつと網戸を開けて紫の部屋に入る。空き巣同然の所業だが今日だけは勘弁だ。

古き良き黒電話の前に立って受話器を耳に当てた。番号を確認しながらダイヤルを回す。ジーこ、ジーこ、という緩慢な音がもどかしい。

人の家に電話するというだけで緊張しているのだ。その上なんと説明したら良いか。香奈絵さんが体調を崩してしまったので自分の

家に運びました、というのは事実なのになんとか不自然な気がした。番号を回し終えて相手が出るのを待つ。十秒ほどコールして、相手が出た。

「もしもし、榊です」

男の声だ。兄か祖父だろうか。田舎だと核家族化があまり進んでいないから、三世代で住んでいることも十分あり得る。

「あの、春見という者です。香奈絵さんの友人なのですが、ええと……」

なんと説明したものでろう。しっかり考えてから電話するべきだった。

「娘が、どうかしましたか」

「はい。ええと、今日香奈絵さんと漁港の近くで……」
と、そこまで言っただけで違和感に気が付いた。

「ま、待ってください、あなた、どなたですか？」

聞き方が不躰だったからだろう。やや苛立った口調で相手は答える。

「香奈絵の父ですが？」

十話（後書き）

お読みくださってありがとうございます。十話でした。

自分で言うのも変ですが、物語が動いたなーって感じます。次回以降も読んでいただけると嬉しいです！

感想、アドバイスなどよろしければ（＾Ｏ＾）

十一話

その後、何を話して電話を切ったか分からない。もしかしたら何も言わずすぐに切ったかもしれない。

頭の整理がつかない。

電話の男は榊の父だと名乗った。おかしい。榊の父は亡くなったはずだ。榊の為に周囲の反対を押し切って漁に出て、波にのまれて海の藻屑と消えたのだ。榊本人がそういつていたのだからそれが事実だ。

それなのに、電話の向こうで榊の父は生きていた。ホラー映画のようだ、なんて自分で思っただけ苦笑する。死んだはずの人間が生きていたなんてことは一笑に付したいとこだが、俺自身一回死んだ人間だ。だが、電話に出たあの男が死神となった榊の父であるなんてことはあり得ない。死神というのは地域ごとに派遣され、奏木の死神は俺と紫だけだ。仮に死神だとしても、見ず知らずの人間に生前の自分の地位を口走るなんてことはタブー中のタブーである。

可能性があるとするれば、初めから榊の父は亡くなってないか、たということ。榊が俺や紫に嘘をついていたという場合だ。実際、それ以外に考えられない。

でも、どうして？

どうして榊は俺たちに嘘をつかねばならない？ 榊の言動のどこからどこまでが嘘なんだ？ 自分の父親が死んだという嘘に何の意味がある？ 父親が生きているなら、榊は海に向かって誰と話している？

疑問だらけだ。特に最後の問い。父親が生きているのなら、榊はわざわざ海に向かって幻覚を見る必要はない。それなのに父親が死

んだと言って、榊は父親と会話する幻覚が見たいと悪魔に頼んだ。自分が死ぬまでの数週間、自分の為に命を投げ出した父親と会話することを望んだのだ。それはつまり心に潜む最強の願い。

それが根本から嘘だった。

どこから何を考えたなら良いのか解らない。

おぼつかない足取りで、ソファーに腰を降ろす。その瞬間、肉体と精神の疲れが一気に押し寄せた。膝や腕は震えるように痙攣し、頭の中にはいくつもの疑問と混乱が渦巻いている。気が付けば天井を見ていた。仰向けに寝転んでいる。

隣の部屋で寝ている榊になにか掛けてやらなくては、そして事の真相を問いたださなくては。やらなければならぬことは山積している。だが、極度の疲労がそれを許さない。体を起こさせてくれない。不恰好に伏したまま、瞼が重くなる。

こんなにも動いたのだから無理もない。起きたら全部やれば良いさ。幸い榊の容体は安定しているし、榊が死を迎えるのは今日明日の話ではない。そもそも幻覚を解く必要がない以上、榊が俺たちにどんな嘘についてどんな幻覚を見ようと構わないのだ。それで榊が幸せならば。

そんな風に自分に言い訳をして、目を閉じた。

急激に意識が沈没していき、何も分からなくなった。

十一話（後書き）

十一話でしたーありがとうございました。

今回は短めでした。きりが悪くてとりあえずこれだけって感じですよ。

台詞ないしぎつちり文字で読みにくいっ………ですよー（汗………

次回はもっと動きがあるはずなので、よろしくお願いします！

感想待ってます！アドバイスなどいただけると本当に嬉しいです。

十二話

「春見君、起きてください」

名前を呼ばれた。玉が水面を打つように玲瓏な声。混濁した意識がゆっくりと掬い上げられる。

「覗いたら殺すと忠告しておきながら、乗り込んでくるとはいいい度胸です。今すぐ起きてください」

紫、か。そういえば紫の部屋で寝てしまったのだった。だが寝ているうちにソファから転げ落ちてしまったらしい。クッションではなく硬い床の上に寝転んでいた。

「……分かった……今、今起きる……つぐお！」
脇腹に鋭い痛みが奔った。肋骨の隙間に激痛が残る。

「なんだ!？」

ぼやける目を擦って瞬くと、蛍光灯の明かりを遮るようにして紫が見下ろしていた。片足が俺の腹に乗せられている。踏まれていた。さっきの激痛は紫の足が肋骨の隙間に突き刺さったものらしい。安眠妨害も甚だしい。

ていうか、人を踏むなよ。

「……どいてくれ」

あまりの屈辱にため息が漏れる。

「なんですかその吐息は。ああ、春見君はマゾですから、こつちつて足蹴にされることに密かに興奮しているわけですね」

「痛えただけだよ!」

上体を起こして紫の足を退け（紫の足はこれまた作り物のように形が良く綺麗で、一瞬心臓が跳ねた）、よろめきながらもソファに座り直した。窓の外は真っ暗になっている。

「獲ったものを出して下さい」

「獲ったもの？」

「とぼけるつもりですか。私の筆筭を破壊せんばかりの勢いで引つ掻き回し、入っていた下着を乱獲し絶滅に追い込んだのでしょうか？」

「そんなことしてねえ！」

「では、まさか、洗濯カゴに入っていた、使用済みの方、ですか？」
「それも違うわ！」

「ではうっかりシンクに出しっぱなしにしていた使用済みの食器類ですか？」

「んなもの盗つてどうすんだ……？！」

「さあ。変態の思考回路は理解の外です」

「ボロクソ言いやがって！ 言っておくがそれもしてないからな！」
「本当ですか」

「本当だ」

「じゃあどうして私の部屋にいるんですか」

「お前はそういうの以外で俺がここにいる理由が思いつかないのか！？」

「はい」

涼しい顔で紫は答える。相変わらず綺麗過ぎる奴だった。黒い瞳と黒い髪が、白い蛍光灯の光に映える。その上全く悪びれた素振りもないせいで、俺は反駁する気力を根こそぎ削がれた。

「……いつ帰ってきたんだ」

「たった今です」

「そうか。悪かったな。勝手にお前の部屋で寝ちまって」

「いえいえ。私の私物に一切手を触れず、見てもいないのなら問題ありません」

「そんなん無理だ。」

「この経緯を説明するとだな、俺の部屋って電話ないだろ？ だから紫の部屋の電話を借りようと思って……」

“ 榊の父ですが？ ”

そつだ。思い出した。呑気にぎゃーぎゃー言い合っている場合じゃない。榊の父親は生きているし、榊本人は俺の部屋で寝ている。物音がしないところをみると、まだ休んでいるのだろう。

今日防波堤の上で榊が倒れ、それを自室に運んだことを紫に話すと、紫は切れ長の目を細めた。

「衰弱にかこつけて自室に連れ込むとは……。私だけに飽き足らず榊さんまで毒牙にかけますか」

「そうじゃない！ 緊急事態だったんだ！ ていうか俺が今までお前に何をした！？」

「苦しい言い訳ですね。哀れです」

「違うだろ！ お前の被害妄想だ！ ……って、こんな馬鹿話をしている場合じゃないんだ」

ツツコミ疲れて肩で息をする。落ち着いてから紫に向き直った。

「榊が倒れて俺の部屋で休んでものも一大事だが、それだけじゃない。驚くかも知れないが、榊の父親が生きいてる」

「ええ、生きていますね」

事もなげに紫は答えた。

「……知ってたのか？」

「私が昨日今日と遊び歩いていたらとでも？」

紫が眉を顰める。不満の色が滲み出していた。

「昨日は榊さんの実家と学校へ事実確認。今日は奏木漁港の漁師たちに話を伺ってきました」

一人でそんなことをしていたのか。俺はと言えば成り行きで榊を助けたが、それさえ結果的にはあまり意味のないことだった。自分の至らなさが恥ずかしい。

「実家には榊さんの母親と祖父母と、父親がいました」

「そうなのか。でもそれならどうして昨日の時点でそれを言ってくれなかったんだよ」

「まだ確証がなかったからです」

「何の？」

「榊さんが見ている幻覚の真実ですよ」

「真実ってことは、やっぱり榊は嘘をついているってことか」

「いいえ。彼女は一つも嘘はついていません。ただ私たちが勘違いしているだけです」

その言葉に耳を疑った。

「勘違いだって？」

「そのうち解ります。まあ彼女も私たちにわざわざ勘違いさせるような言い方をしているんでしょうから、嘘とそう変わりませんけれど」

嘘と変わりないような、意図的な勘違い。なんだそれは。

紫の言うことも、榊の意図も、俺には解りかねた。

なので、俺は紫に一番訊きたかったことを訊いてみる。

「なあ、紫はやっぱりまだ榊の幻覚を解くつもりでいるのか」

ここで紫が首を縦に振れば何の問題もない。榊の嘘は放っておいて、とりあえず看病だけしてやるのでも、実家に送り届けてやるだけでも良いのだ。

「絶対に解きます」

しかし、紫はそう断言した。そこには断固として揺るがない強い意志が垣間見えた。

「経験的なものですが、私は幻覚を解いて後悔したことなど一度もありません。春見君は、榊さんにとつての幸せが、現実に一つも存在しないと思っっているのですか？私は、榊さんの幻覚は絶対に解きます」

「そうか……」

紫を止めようとすることもできる。男と女だ。羽交い絞めにして止めることもできる。

だが、紫の黒い瞳はそんなことでは決して意志を曲げないように見えた。

それにそもそも俺が榊の幸せのためにそんなに必死になる必要性

はないのだ。他人なんだから。それでもこれまで俺が榊の幻覚を尊重してきたのは、やはり死を目前に控えた少女に同情や憐憫を持っていたからだろう。薄っぺらい同情、中途半端な慰め。「榊さんにとつての幸せが、現実の一つも存在しないと思っっているのですか？」頭を思い切りぶん殴られた気がした。今になって気が付く。そんなのは俺のエゴだ。人間は一円募金しただけでも善人になった気になれる。俺のやっていることは所詮その程度のものなんじゃないか？短絡的に榊の幸福を願い、せめて短い命が尽きるまではと甘えさせてやる。ただ放っておくだけで、自分が良い人間に思えてくる。それに比べて、紫の視線は強かった。嫉妬するほどに強靱な意志を漂わせていた。

「勝手にしろ」

と、そう呟くのが精いっぱいだ。何が正しいのかなど判らない。いままで紫は幻覚を解くことに関して俺に強く言うことはなかった。それはやはり「確証がなかったから」なのだろう。そして昨日今日と調査を重ね、確証を手にしたのだ。だから今日は俺に強く意見を提示している。

「では、行きましよう春見君。人助けへ」

俯いている俺に、紫が声をかけた。

「榊さんのところに言っただけで説得をします」

悪魔に襲われた人間の幻覚を解く唯一の方法は説得だ。こんな幻覚を見る必要はない、と当事者に自覚させれば幻覚は解除される。

「待ってくれ、その前に俺にも榊はどうして嘘をついたのかを教えてくださいよ。紫はそれがわかったんだろ？」

「それは私が説得を始めれば自ずと解りますよ」

紫は薄く笑った。

十二話（後書き）

十二話でした。ここまでお読みくださった皆様、ありがとうございます！

十三話の投稿は遅れます。多分二週間くらい遅れます。学校のテストです。二期制の学校なのでこの時期に一回目のテストがあるので

す。

感想など待っております！アドバイスなんか是非！

十三話（前書き）

テスト終わりました！ 再開であります！

十三話

あたりはすっかり暗く、俺の部屋にも夜のとばりが降りていた。淡い月明かりを頼りに蛍光灯のスイッチを探す。俺より先に紫が探し当て、部屋が明るく照らされた。

「榊ー大丈夫か？」

努めて陽気な声で呼びながら、ソファアを覗きこむ。

「……！」

そこには、誰もいなかった。

代わりに、向かいあうテーブルの上にメモ帳の切れ端が置いてある。丁寧な丸文字で一行だけ言葉があった。

” ありがとうございます ”

言葉に詰まる俺の後ろで、紫が口を開いた。

「行った場所は大方予想がつかますけどね」

「……海、か」

「他に考えられません。彼女は毎日夜の十時ごろまでずっと海にいるみたいですから。まだ八時です」

「でも俺たちが榊に会いに行った日なんかはあいつも夕方くらいで帰ったじゃないか」

「帰ると見せかけて一度席を外し、もう一度海に戻ったのでしょね」

それじゃあまるで俺たちのことを避けているかのようだ。いや、事実そうだったのかもしれない。榊は内心、短い間の樂園を邪魔されたくなかったのかもしれない。俺が初めて会った日だって、榊は一度立ち去ってその後また海にいたじゃないか。

「春見君、海に行きましょう。その場で説得します。私はちょっと支度をしてきますから、少し待っていて下さい」
そう言い残して紫は外に出て行った。

紫の部屋の前で待つこと十分。

「お待たせしました」

声がして振り向くと扉を開けて紫が立っていた。先程と同じ黒いワンピースを着ている。着替えをしてきたわけではない、と思いきや襟や裾のデザインが僅かに違うことに気が付く。いつも黒のワンピースを着ているから同じやつを何着も持っているのかと思っていたが、そうではないらしい。今着ているものはこれまでよりリボンとかフリルとかの装飾が多い気がした。

「そうやって視線で舐めまわして興奮している場合じゃありません。一刻を争うような事態ではないですが、なるべく早く終わらせましよう」

その方が彼女にとっても幸福です。と紫は付け加える。

「出発しようか」

俺は今から正しいことをしに行くのか、余計なお節介をしに行くのか。そんな問いかけが頭の中で繰り返されていた。

歩きはじめるとあたりの暗さに驚いた。何しろ街灯がほとんどない。一つの街頭の下にたどり着くと、次の明かりは小さな点にしか見えない。道の周囲はすべて田んぼなので他に光源は見当たらず、

暗い砂漠のど真ん中にいるようだった。

「少しも教えてくれないのか」

真つ暗な上に沈黙というのは耐え切れず、俺はそう切り出した。

「何をですか？」

「榊が見てる幻覚についてだよ。一体あいつは誰と話してる？まさか本当に独り言ってわけじゃないだろ」

「もちろんです。ただ、榊さん自身がいた方が説明しやすいのでまだ待っていて下さい。それにかなり確証めいたものがあるとはいえ、私の憶測をここで話してもし間違っていたら酷く惨めです」

これまでの紫の性格からすると理由としては後者の方が主な気がする。それをわざわざ後に言ったのもまた性根がにじみ出ている。

波の音が聞こえてきた。海が近いらしい。田んぼが途切れ、頼りない防砂林を抜けると視界が開けた。

「夜の海つて不気味だな」

淡い月明かりが弱々しくあたりを照らして、それこそ海の底にいるようだ。

「春見君は暗闇が苦手なんですか」

「いやまあ取り立てて得意なわけではないな」

ふと気が付いたのだが、さつきから紫のいる位置が妙に近い。くつつくほどではないが、石罅のような良い匂いが鼻をくすぐる。

「まさかとは思うが」

「はい？」

「暗闇が怖いのか？ ……ぐおっ!？」

爪先に強烈な痛み。見れば紫が俺の足を踏んでいた。ヒールの部分で執拗に潰してくる。

「痛い痛い痛い痛い！」

「次言ったら、足首から下は無いものと思ってください」

……。どうしてこいつが言つとこんなにも本能的な恐怖を感じるのだろう。

「ところで、馬鹿な春見君」

「そんなんで返事してもらえと思うなよ」

「してるじゃないですか。あれ、見て下さい。いました」

紫の指差す先。漁港の街灯の下に、少女がいた。いつものように防波堤に腰かけ、榊は海を眺めている。

「行きましよう」

俺の返事を待たずして紫は歩き出す。俺がその場で動かないでいると紫もすぐに立ち止まった。

「なんでお前も止まるんだ」

「さようなら、春見君の足首から下」

「ぐああああっ!」

無くなりはしなかったが、一生忘れられない痛みだった。

「榊さん」

紫の呼びかけに、当然榊は答えない。

「……私はそれが良いですっ。絶対それにします!」「そ、そうです、ね、じゃあこっちに」「良いですよ気を遣わなくて。私もそれくらいお金持ってます」

例のごとく榊は海と会話している。湛えられた笑顔は昼間と全く変わらない。暗く広大な海に向かって榊は喋り続けていた。

十三話（後書き）

十三話でした。お読みくださった皆様、ありがとうございます！

前話からずいぶん時間が経ちましたが、学校のテストが終わったので連載再開いたします。読んでもる人もあんまいないと思いますが…
…笑

感想など待っております。よろしければ！

十四話

「榊さん」

紫の呼びかけに、当然榊は答えない。

「……私はそれが良いですつ。絶対それにします!」「そ、そうですな、じゃあこっちに」「良いですよ気を遣わなくて。私もそれくらいお金持ってます」

例のごとく榊は海と会話している。湛えられた笑顔は昏間と全く変わらない。暗く広大な海に向かって榊は喋り続けていた。

「それならこれで決まりですね」「ついでにこっちも……うわっ!」

唐突に台詞が途切れる。だが今度は具合が悪いのが原因ではなかった。榊の肩を紫が掴んでいる。半ば強引に、榊に自分の方を向かせた。

力チリ、と紫にスイッチが入ったように感じた。暗闇の中で、黒い瞳が光る。

「え……あ、ええと、紫さん……と、春見さん……どうしたんですか、こんなところで?」

当惑した表情で榊は言う。

「春見君にちゃんと礼を言ったらどうですか」

紫の語調は強かった。気圧された榊は、すすすみません、とどもりながら謝った。

「いいえ、その言葉は春見君にも私にも必要ありません。他に言うべき人がいるんじゃないですか?」

「え……?え?」

「おい紫、そんなに強く言わなくても……俺は別に礼なんか求めて

ないし」

「春見君は黙っていて下さい」

今までにないくらいきっぱりと言い切られ、俺は口をつぐむ。今度は俺が気圧された。

「榊さん、貴女は父親を亡くしてはいませんし、風邪をひいてはいません」

え？風邪をひいていない？じゃあなぜ榊は時々具合が悪そうにするんだ？

「と、突然何を言っんですか……？」

「貴女がいつも海に向かって話しているのは“お父さん”ですが、自分の父親ではありません」

凜と澄んだ声が、これまでの認識を悉く破壊した。俺はそれに付いていけず、二人を見守るばかりだ。

「貴女が話している相手は、桐嶋一真さんという方です。桐嶋一真さんのことを貴女が“お父さん”と呼んでいるだけです。貴女の血縁上の父親は昨日も奏木市役所で働いていました」

一拍置いて、紫は声のトーンを下げた。

「貴女、妊娠しているんでしょう？」

榊の目が驚愕に見開かれる。俺も同じような表情をしたかもしれない。

榊が、妊娠している？

紫は続ける。

「貴女は自分が妊娠したことを家族含め周囲に隠しています。桐嶋一真さんは、貴女の通う高校の同級生で、漁師の見習いでした。船の操縦が上手く、港の人々から一目置かれていた期待の新人でした。ですが一月前、彼は嵐の日に漁に出て亡くなりました。愛してやまない恋人を残して。それが、貴女です。いえ、正確には貴女とお腹の中の赤ちゃんですね。貴女は一真さんの名前にあやかり、赤ちゃん

んにマコトと名付けました。マコトなら男の子でも女の子でも合うからでしょう。たびたび体調を崩していたのは風邪ではなく、つわり、です。今日倒れたのはただの熱中症です」

「……全部、調べたんですか」

「はい。貴女は、悪魔に自分の死期を知らされた時に願いました。

桐嶋一真さんと、お腹の中の赤ちゃんと話がしたい、と。そして貴女は、桐嶋一真さんの亡くなった海を見ながら、二人と会話ができるようになりました」

「……………」

「榊さん、それは幻覚です。現実ではありません。その証拠に、つわりが始まると貴女は幻覚を一時的に見られなくなる。なぜなら、すでに死んでしまった人と話すのは幻で、つわりは現実。幻と現実には共存できないからです」

「……………調べ過ぎですよ……………死神さんはそういうことをする人たちなんですか？」

「貴女の目を覚ましに来たんです。貴女が幻覚を必要としなければ、幻覚は消えます。私は、消しに来ました」

「消える……………？ そんな……………どうして……………ですか？ どうして私の幸せを奪うんですか……………？」

榊の声は震えている。カチカチと歯のぶつかる音が響いた。

「どうして、ですか？」

そして、堰を切ったように、榊は声を荒げた。

「どうして？ どうして私は何もかも失ってしまうんですか？ 大好きだった一真さん……………お父さんも、私の命も！ 生まれてくるはずだったマコトも！ どうして？ どうして？ 私はどうしてこんなに苦しまなければならいんですか？ 失わなければならいんですか？ 海なんて、本当は大っ嫌いですが！ ……………お父さんを……………返して下さい！」

榊は叫ぶ。その目は途中から紫を見てはいなかった。暗い水平線に向かつて叫んでいる。亡き恋人の眠る海に向かつて叫ぶ。涙をいっばいにためて、泣き叫ぶ。

「あんなに好きだったのに！ 私が魚食べたい、って言ったから、一真さんは漁に出て……海なんて、大嫌いです！ マコトが……マコトがいるのに！ もうちょっとでお父さんになれたのに！」

それは、誰に叫んでいるのだろう。榊の目はもう何も見つめてはいない。頬をぐしゃぐしゃに濡らして、海と空の境界線を遠く臨んでいるだけだ。ヒステリックな声が、漁港にこだまする。

「私を一人にしてほしくなかった！ 私は一人で赤ちゃんを背負えるほど強くない！ 不安で、自分が消えてなくなってしまうそうです……！ 一真さんが、お父さんがいなくちゃ……私……私……つぶれてしまいそうです……！ 声をかけてくれなくちゃ、起き上がれません！ 手を繋いでくれなくちゃ、歩けません！ 笑いかけられなくちゃ、笑えません……！」

反響する悲痛な叫びは、海の方こうへと消えていく。打ち寄せる波だけが間を埋めて、やがて紫は口を開く。

「貴女は、起き上がれているし、歩いているし、笑っています。つぶれてなんかいません。貴女は自分で思っているほど弱くありません」

「それは、今は、海の方こうに一真さんの声が聞こえるから！ 本当はそんなことあり得ないって分かっています……でも、私はそれに頼ってしか生きられません！ あなたは、どうしてそれを奪おうとしているんですか！？」

榊は全力で抗議の態勢を取る。

「あなたに、何が分かるんですか！？ 死んでしまうことが怖い！

妊娠してしまったことが怖い！ 私は、もうすぐ死んでしまうんですよ！ あと数週間……それだけでも、三人で居て何が悪いんですか！？」

きつと、何も悪くなんかない。出かかった言葉を飲み込んだ。紫が後ろ手に俺の手を握っていた。

「貴女は、残り数週間の命を幻覚に委ねて良いのですか？ 現実を見つめなくて良いのですか？ お腹の中の赤ちゃんは無視して良いのですか？」

「……っ」

榊が唇を噛む。紫の口調はあくまで冷静で、それでいて力が籠っていた。

「人は誰だっかっていつかは死んでしまいます。貴女はそれが他人より早いです。誰だっかって死ぬのは怖いし、悩みを抱えています。貴女だけじゃありません。桐嶋一真さんが亡くなったことも、貴女だけが悲しいわけじゃありません」

「知りません！ 私の気持ちなんて誰にも解るはずがないです！」

絶叫して、榊は防波堤を飛び降りた。海風に乗って涙が散る。コンクリートにはいくつもの滲みが出来ていた。

俺たちに背を向けて、走り出そうとした瞬間。

「きゃっ」

短い悲鳴があつて、榊は転んでいた。何かにぶつかったのか榊はしりもちをつき、それを見上げていた。

「あ……桐嶋……さん……」

地面に座り込んでしまった榊の目の前。弱々しい電燈の下で、男が立っていた。昼間会った漁師。桐嶋善次郎だ。

「香奈絵ちゃん、ほら、立ってごらん」

男は大きな手を差し出す。榊は震える手でそれを握り返した。

「話は紫さんから聞いていますよ。今の話も聞いていた。信じられないような話だがね、本当なんだろう？」

ひどく緩慢な動作で榊は頷いた。信じられないような話と言うのは、榊がもうすぐ死んでしまうこと、幻覚を見ている、ということだろう。紫は、それを桐嶋に話したのか。

「俺はそんな経験はないから香奈絵ちゃんの気持ちを理解するのは難しい。だが解っていることもある」

桐嶋は赤子を諭すような口調で、頭一つ背の低い榊に語りかける。「息子は君を本当に好きでした。君のお腹の中にいる子は望むべくして誕生した命だ。まだ高校生なのに、早まったとも思うがね。不安なのは解る。君は一人ですべて背負おうとしている。でもね、そんなに頑張らなくても良いんだ。死ぬことが怖かったら、心の中で一真に相談すれば良い。妊娠したことが怖いなら、君のお母さんやうちの家内にも相談したら良い。一真を失ったことが辛いなら、俺に相談したら良い。誰も、君を一人にしてなんかいないんだ」

優しく、優しく、桐嶋は語りかける。神父の言葉のように、それは榊の心を温めていく。

「……うっ、あ……うっ……」

「香奈絵ちゃんが悲しいなら、俺も悲しいんだ。一真がいないのは、みんな悲しいんだ」

榊は俯いたまま嗚咽を漏らした。

「……うっ、うっ……き、桐嶋……さん……」

「なんだい？」

「すみま、せん……」

「謝る必要なんかない。若いころは自分一人でなんでも背負っちゃまうもんだ」

「でも、でも、私、桐嶋さんだつて苦しいのに、私ばかり子供みたいに甘え放題で……」

「君は、まだ子供だ。甘えて良い。でも、本当に大切なことを疎か

にして逃げ出してしまうのはよくない」

「本当に、大切な、こと……？」

「息子との子供、マコト、と名付けたそうじゃないか」

「はい……」

桐嶋は皺だらけの顔をもっとくしゃくしゃにして、笑いかけた。

「大切に、しなさい」

「……あ……は、はい……っ。……うっ、うあああああああ！」

あれだけ涙を流して、もう涙腺は枯れてしまったかと思っただが、

そんなことはないらしい。榊は声を上げて、子供の様に泣いていた。

「桐嶋さんっ……桐嶋さんっ、ううっ、私、怖いです……悲しいで

す……一真さんがいなくて、もう、どうしたら良いか分からなくて

……っ、ごめんなさいっ……幸せなことを考えていないと、心が押

しつぶされてしまいそうでっ」

幸せなこと。

“……、行きたいですね。絶対に一緒に行きましょう。みんなで一緒に行きましょう” “あははっ、確かにそうですね。じゃあ季節はいつが良いでしょうか？” “私はいつでも良いです” “うーん、じやあ、秋。紅葉が見たいですから”

“え、飛行機ですか？電車にしましょうよ。飛行機だとあっけなく目的地に着いちちゃってつまらないですよ。電車でのんびり行きましよう”

“誕生日プレゼント、ですか？良いですよこんな歳にもなっただんだか恥ずかしいです。あ、でもそういうものですかね？” “えへへ、じゃあ喜んで”

“あははっ、それも良いですね。マコトは、どう思うっ？”

紡がれた言葉は、海へと消えていく。

海には、桐嶋一真が眠っている。この海のどこかで、彼は恋人を見守っているだろう。子供を見守っているだろう。幸せを願ってい

るだろう。

「人間、何かに甘えないと生きていられないからね。自分を責めることはない。でも、幻の他にだって、甘えるものはあるはずだ」

「……はい」

「息子は、本当に君のことを好いていたからね」

「……はいっ」

「誰も本当の幸せなんか分からないが、孫にも、幸せを見せてやってくれよ」

この人は、どうしてこんなに優しく話せるのだろう。

親として、義父として、祖父として、この人はなんて優しいのだろう。

榊の表情が、次第に緩んでいく。

「……桐嶋さん、ありがとうございます……」

榊は泣き腫らした目を擦りながら、今度は防波堤には上らずに、海を見つめた。

「一真さんっ……!!」

声を張り上げる。あの水平線の向こうまで届けとばかりに。

「私、マコトと歩きますっ!」

泣きつかれた喉で、精一杯に叫んだ。

「もうあと何週間しか残っていないけど、その間だけでも、マコトと向き合って暮らします! 一真さんがくれた小さな命を、私が守りますっ! 今まで見守ってくれて、ありがとうございます! 一真さんがいてくれなくちゃ、何もできないけど、一真さんがいたから、何でもできますっ! 幻なんていりませんっ! 一真さんはきつと見ていてくれるからっ!」

榊は一度俯いて、嗚咽を飲み込んで、もう一度前を向く。

「私を支えてくれる沢山の人がいるから！ 一真さんっ！ 本当に、本当にありがとうっ！ 一真さんと出会えて、私はとっても幸せですっ！ 旅行に行きたかったです、ご飯を作ってあげたかったです、プレゼントをあげたかったです！ 悔しいなあっ……あんなに優しかったです……もっとそばにいてくれても、良いじゃないですかっ！ ひどいですっ！ とっても意地悪ですっ！ ……でもっ、大好きですっ！ だから、ありがとうございましたっ！ いっぱいいっぱい幸せをありがとうっ！ マコトをくれてっ！ 最高の幸せをくれて、ありがとう、ございますっ！ そしてっ、そしてっ、

そして、

これから、よろしく。

十四話（後書き）

十四話でした。次話のエピローグをもって第一章完でございます。
お読みくださった皆様、ありがとうございます。

感想お待ちしております！欠点ばかりかもしれませんが、よろしければお願いします！

十五話 (エピソード) (前書き)

この話でとりあえず第一章完結です。

十五話（エピソード）

帰り道。僅かな街灯を影踏みのように伝え歩いている。紫の歩く位置はやはりどうも近い。俺としては全く持つて吝かではないが、それを口に出したら膝から下がなくなるだろう。

「どうでしたか、春見君」

先程までの強い口調はすっかり消え失せ、いつもの涼しげな口調に戻っている。

「まあ、なんとというか、勉強になったよ」

榊が最後に見せた、吹っ切れたような笑顔が脳裏に残っている。

その後、榊は両親に自分が妊娠したことを伝える為に帰宅した。今は親を驚かせているだろう。桐嶋も、漁の準備があるといって家に帰っていった。

「そういえば桐嶋は紫が呼んだんだろ？ まさか偶然ってわけでもないだろうし。いつ呼んだんだよ」

「家を出る前、春見君を待たせている間に電話しました」

「ああ……」

着替えたばかりでなく、そんなことまでしていたのか。

待てよ。と言うことは、家を出る時点で紫は、榊を説得するためには桐嶋の力が必要だと読んでいたということになる。あまりの手際の良さに舌を巻く。

最初に話した時、紫は「人助けなんて私の性に合いませんから」とか言っていたのを思い出す。嘘つけ。大得意じゃねえか。

榊が最後笑っていたのは桐嶋親子のおかげであるが、そうなるようセッティングしたのは紫である。芸術的なまでの采配だ。本来、第三者に死神や悪魔のことを教えるのはタブーだが、まあ今回は結果オーライだ。

榊にあんな綺麗な笑顔を与えた紫を、俺は素直にかっこいいと思った。まるで、幼いころテレビの中で見た正義の味方のようなのである。

なら、俺の正義はどうだったろう？

「人にはみんな自分の掲げる正義があつて、それを貫くために奮闘するものです。私は、私の正義を貫いただけです」

事もなげに紫は言う。黒江紫は、ため息が出るほどにかっこいい奴だと思つた。

俺の正義は、溺れている者が藁を掴むのを邪魔しないことだつた。紫の正義は、溺れている者に大声で泳ぎを教えてやることだ。例えばそのまま溺れ死ぬとしても、藁を掴んで沈むのか、溺れても自分はまだ泳ぐことができるんだという希望を持つて沈むのか。どちらが良いかなんて判らない。誰にも永遠に判らない。

どっちが正しいなんてない。たまたま今回はハッピーエンドだつただけかもしれない。

運命なんて変えてやる、なんて漫画の主人公は良く言うけれど、そんなのは無理だ。変えられないから運命なのだから。

でも、運命という檻に入れられた人生を、有意義に過ごすことはできるんだろう。人間は、気の持ちようで、幸せでいられるのだから。

俺は、今度溺れている奴がいたら、泳ぎを教えてやろうと思う。

紫のようになれるだろうか。紫のように、人を笑顔にできるだろうか。「人助け」ができるだろうか。

榊の笑顔。紫の眼差し。

生きている頃の怠惰な生活。意味のなかった人生。死ぬのが怖いから生きていた人生の意味を、取り戻せるだろうか。

俺は、まだ間に合うだろうか。

夏もいよいよ本番となり、毎日毎日むせ返るような暑さが町を覆う頃。

榊香奈絵は、自宅の階段でうずくまっていた。転んでしまった。

足を滑らせた。

強く頭を打った。

頭を手で守らなかった。

手は、お腹に添えられている。

榊香奈絵は、自分のお腹をかき抱くようにしてうずくまっている。

榊香奈絵は、話しかけている。

心の底から言葉を紡いでいる。

“一真さん、やっと会えますね”

“マコトを生めなくて、ごめんなさい”

“でもこの三週間、私は、とっても幸せでした。ありがとう”

“一真さん、今度は、三人で会えますね”

“一真さん……”

“マコト……”

“……大好き、ですよ”

十五話 (エピソード) (後書き)

第一章完結です。ここまでお読みくださった方々、本当にありがとうございます！

一章書ききったという達成感。しかし読み返してみると「なんだこの上辺だけの綺麗ごと書き連ねた駄文は？」と思えてなりません！
… アドバイス、感想いただけるととっても嬉しいです！！

気が向きましたら二章もよろしく願います！
() < 引き続き頑張ります！

十六話（前書き）

第二章です。

十六話

篝原壮の近くまで戻ってくると、ひんやりとした空気が出迎えた。周りが自然だらけで木陰が多く、海風がよく通るからだろう。足を止めて風を受けると、潮の香りを含んだ風が汗を冷やして心地良い。真夏も真夏。世の子供たちにとっては夏休みという超ビッグイベントが幕を開けていた。

「ほら春見君、悠長に休んでないで早く支度をしましょう。あんまりぐずぐずしていると春見君の分はありませんよ」

「はいはい」

『スーパー 北条』という地元スーパーのロゴが入ったビニール袋をぶら下げて、俺はおぼつかない足取りで紫の後ろを追う。当然のように紫は手ぶらだ。黒い日傘だけ差している。

「お前は楽そうだな」

思わず皮肉が漏れる。

「儂げで深窓の私としてはこんな日照りの中を歩くことさえ辛いのですよ」

紫は汗一つ見せずに言う。紫の持つ雰囲気のせいで彼女の周りだけ涼しげに見えるのだが、それがまた皮肉を返されたようで腹立たしい。

「というか、その自己評価はどうなのだ。確かに紫は『深窓のご令嬢』というイメージがあるけれど、自分で言っているのか。」

やっと篝原壮にたどり着き、紫の部屋に入る。冷房なんてものは備えられていないので、すぐに扇風機のスイッチを入れてへたり込んだ。ビニール袋が情けない音を立てて崩れ落ちる。

「男のくせにヘタレですね。生前の怠慢な生活がありありと想像できます」

「ほっとけ。暴言は良いから先に作っててくれよ」

俺はビニール袋を紫に差し出す。中にはそうめんの乾麺が入って

いた。駅前にある秦木町唯一のスーパーで購入したものだ。料理ができない俺達にも比較的簡単に調理できる上、涼も取れるという優れもので、店頭で見た時に購入を即決した。その上、スーパーでレジ打ちをしていた高校生くらいの女の子に大幅にまけてもらえたので財布にも優しくかった。一年前から通っている紫のみならず、最近になって顔を合わせた俺に対しても妙なハイテンションで対応してきたのには少々たじろいだ。

時計を見れば、時刻は十一時。作り終わってもまだ少し早い。暇人は早くから腹が減るのだ。

「しょうがないですね。春見君のような頼りない駄目男を見ていると暑さに加えて食欲減退を招きますし、ここはひとつ私が労働を買って出ましよう」

風鈴のように涼しげにとんでもなく失礼なことをぼやきつつ、ビニール袋を受け取った紫は台所に立った。

なにを大仰なことを。茹でるだけじゃねえか。

鍋に水を注いでコンロにかけ、そうめんの袋を開ける音がする。台所に立つワンピース姿の紫を眺めた。紫が台所に立って作業している光景というのはこれが初めてではなからうか。いつもは即席麺や冷凍食品、惣菜の類ばかりで、電子レンジとヤカンさえあれば事足りてしまう。その上それらの雑事を請け負っているのはいつも俺だ。

墨を流したように黒い長髪が、体の動きについてくように揺れる。なんだかこんな風に、紫が台所で料理をしていて、リビングで俺がそれを眺めているというのは、傍から見ると同棲中のカップルか夫婦みたいに見えたりしないだろうか。と、紫に知れたら「気色悪い」「変態」などと罵詈雑言の嵐を食らいそうな想像が頭をよぎる。でもしょうがないのだ。ほっそりした腰つきであるとか、すらりと長い手足であるとか、絹のように滑らかな髪であるとか、とにかく抜け目がなく美麗なのだ。紫は。

「変態く……じゃない、春見君、そうやって事あるごとに私を視線

で犯すのは止めて下さい。心底不愉快な気持ちになります」

「ちよつと眺めてただけだ！ 人聞きの悪い！ つか俺のこと『変態君』って呼ぼうとしただろお前！」

ボケてんのか！？ 俺からのツッコミ待ちなのか！？ いやはやそうとしか思えない紫の発言は、ツッコミ疲れに起因する肩こりという形をとって近頃俺を悩ませている。

全く、あの性格さえなければ。天は二物を与えないとはこのことか。

神の一件から数日。献身的で厳しく、子を抱えて死を待つ少女に笑顔を与え、それでも謙虚だったかつこいい紫はどこへやら。被害妄想過多の毒舌少女の舌は、今日も悪口を量産している。

それから三分ほどして。

「できましたよ。私の手料理を食べようなど一万年は早いですが、そうめんくらいなら大目に見ます。どうぞ、召し上がれ」

紫の白く華奢な手がそうめんとつゆの皿を並べていく。そうめんは川の流れるような曲線を描いて皿に盛られ、見ているだけでも涼しげだ。

「なんだ、結構上手いんだな。どうして他の料理はやらないんだよ」
いただきます、ずるるるる……、と勢いよくそうめんを口に運ぶ。

「……硬」

「なにか？」

紫の鋭い視線に射竦められ、俺はぐいつと首をひっこめるが、それでも口の中のものが無くなるわけではない。くちやくちやくと芯の残る小麦粉の塊みたいなさうめんを噛みしめながら、俺は過ちを犯した。

「いやあの、製作者に多大な敬意を持って、非常に恐縮ながら助言などさせていただくと、もう少し茹で時間を延長された方がよろしいかと」

本当に俺は恐縮な気持ちでのアドバイスなのだが、皮肉に聞こえ

なくもない物言いになってしまった。案の定紫は後者で取っただらしく。

「……む」

「あの、紫さん……？」

「……二度と、春見君に料理など作るものですか」

かなり険のある口調で紫は返した。自分の箸を握りしめ、むっつりと膨れている。あれ、なんか今までに無く怒ってる……？

茹で時間が足りないのは事実なんだが、なんか悪いことしちまっただな。そうめんと言えど、せっかく紫の手料理なのだからそれは非常に嬉しいのだ。

どう挽回しようか思いを巡らせていると。

じりりりりり、じりりりりり。

聞き覚えのある呼び出し音が鳴った。

天界だろう。受話器を取って耳に当てると、これまた聞き覚えのある声が聞こえた。

「くあああああああつ紫すあーん！！ げへへっうへ、天界対悪魔部伝達課の近藤ですう！ 今日も紫さんの声が聴けると思うと、心がっ心がっ……くっくぎゅっうっうっうっ！！ 仕事など忘れて、紫さんとゆっくりお喋りできたら……っ！ 紫さんっ今度は非お食事でもっ！ わたくしお奨めのフレンチなどいかがが！？ それでそれで、『近藤さん、あーん』なんてっ！ くはははくははは！ むふふふふふふふふふふふふふっ」

「俺だ」

「……………チッ」

「お前、マジで頭おかしいと思うぞ。今まで紫に警察呼ばれたりしたことないのか」

「へっ、それも勲章よ。ポリ公の数だけ愛があるってもんだぜ」

「ねえよ」

生粋のストーカーだ、こいつ。早く、なんとかしないと……。

「変質者の戯言に付き合ってる暇はないんだが、要件を早く言っ

くれ」

「なんでてめえなんだ。紫さん出しやがれオラ」

「いや今回は俺が聞く。榊の件で死神の仕事についても随分理解したからな。今度は俺がやってみたいんだ」

これは、売り言葉に買い言葉ではなく、本心だ。ドブに捨てたよ
うな生前の人生を、今から取り戻したい。紫のようにやれるなら、
俺は生きる意味を掴めるかもしれない。

「へえ。そいつは殊勝なこった。良いだろう。だがな、条件がある」
「条件だと？」

近藤は電話の向こうで、ふん、と鼻を鳴らし、ドスの効いた声で
切り出した。

「今、紫さんがつけているブラの色を教えてください」

「……」

そうか、馬鹿なのか、こいつ。

……………。

いや、まあ、男などみな馬鹿なのだ。

「おーい、紫」

テーブルで硬いそうめんを啜っている紫に声をかける。

「はい？ 代わりましょうか」

まだ怒っているかと思いきや、以外にも涼しい顔をしていたので
そのまま切り出す。

「いや、今回は俺が聞くから良いんだ。ただな、一つ尋ねたいこと
がある」

紫は小鳥がやるように可愛らしく首を傾げた。

「今つけてるブラの色を教えてください」

「……………」

ガタリ、と紫は立ち上がり、台所の戸棚を開けた。中から鈍く光
る出刃包丁を取り出し、俺と目を合わせる。

「聞き間違いかもしれませんので、念のためもう一度」

「い」

「っ」

「ぎゃああああああああああっっっ!?!」

紫が俺のすぐ前まで猪の如く猛進してくる。俺の髪を掠めて出刃包丁を思い切り壁に突き刺した。深々と刺し込まれた刃が震えている。紫の腕が、おそらくは怒りに震えている。

俯いていた紫が、ぬらりと顔をあげ、瞳孔のかがぴらいた目で俺を串刺しにする。

「念のため、もう一度」

「い、今食べてるそうめん、この世のものとは思えないくらい美味しく、紫はそりゃあもうミシュラン三ツ星確定で世界の一流シェフもこぞって子弟にしてほしいと懇願してくる腕前なんだが、一体全体どうやって作ったんだ?」

俺の声は、おそらく恐怖に震えている。

「茹で時間を短くしました」

「うん、そうか。シンプルかつ奥深い、いやむしろシンプルだからこそ誰にも想像できなかった、ありきたりなようできて斬新なアイデアだ。あの硬さを実現する茹で時間は、ただのそうめんを全世界に比類なき逸品に仕上げた究極の一手で間違いない」

紫は壁から出刃包丁を引っこ抜き、台所にそれを戻した。テープルについてまたそうめんを食べ始める。

「もしもし、近藤」

「おう。首尾よくいけたか」

「黒、だ。縁にフリルが付いていて、中央には大きめのリボンがあらわれている」

先程、壁を刺して俯いた紫が俺を見上げた時、襟元から見えたのだった。

だが今日の恐怖を俺は忘れないだろう。紫の感情の消え失せた目、怒りに震える出刃包丁を。

そして、黒い下着と、雪のように白い胸元のコントラストを。

近藤から教えてもらった住所は、スーパーだった。スーパー北条。ついでさつきそうめんを格安で購入した小さな地元スーパーである。篝原壮から海とは反対方向に二十分ほど歩くと駅に至り、駅前にはひどく寂れた商店街がある。その中でも比較的大きな店構えで、真新しい建物が「スーパー北条」だ。店内に入ると、篝原壮では味わえないクーラーの暴力的なまでの心地よい冷気が出迎えた。

『北条千鶴って奴だ。奏木高校の一年生で、小柄で髪はショートカット。父親は自営業のスーパーを経営してる。自宅はそのスーパーの二階にある』近藤からの情報は要約すればそれだけだった。伝達の連中ももつと詳細な情報をくれたら便利なのだと思う。知っているのに渡さないのか、本当に知らないのかは判らないが。

「おお！ 絶世の美少女、紫さんと……その使用人じゃん！」

レジにはさつき俺達にさうめんをまけてくれた女の子がいた。元気そうにぴよんぴよん跳ねている。小柄な体躯を軽そうに弾ませて手を振っていた。

「使用人じゃねえ。春見秀人だ」

「ごめんごめん、秀人くん、と呼ばば良いかな？」

リスのような仕草で覗きこんでくる。紫とは正反対のタイプだ。親しげで快活に動き回り、小柄な体型も相まって可愛いらしい。紫は俺の目線くらいの高さだが、こいつは頭一つ分小さい。

「さつきそうめんを買ったばかりなのに今度は何かな？ どじょう

かな？ イナゴかな？」

「そんなマニアックな食材を買うつもりはない。つうかそんなもん売ってんのか」

「ないない。奏木は港町だからね、そういうの食べなくてもお魚で事足りるわけよ」

ふふんとなぜか自慢げに胸を張る。わざわざ張るほどの胸がないのが残念だ。

薄い胸に、プラスチックのネームプレートが付いていて、「ちずる」と書かれていた。

いたたまれなくなつて、目を伏せる。

「それより、お前、名前は？」

それでも尋ねたのは、現実を認めたくなかったからだ。

「千鶴だよ。北条千鶴。このスーパー北条の跡取り娘なのさ！」

むむんと北条はさらに胸を張る。ネームプレートを誇示するようで、俺は視線を逸らした。

榊の時と同じだ。元気そうで、とても数週間後に命を落とすとは思えない。それに、北条は幻覚を見ている様子もない。快活にくるとよく動く瞳は俺と紫をちゃんと見つめているし、独り言を言ってもいいない。

後ろに立つ紫を見やる。近藤からの情報を強引に聞いたのもそうだが、今回の件は自分主導でやろうと思っていた。だから紫には今度の対象者が北条千鶴であるとは伝えていない。俺が自分でなんとかしたいとの旨を伝えると、「監督者ということだ。仮にも『先輩死神』ですから。いつも使えない春見君ですから、放っておくわけにもいきません」などと例の如く一言余計な発言をして、何も聞かずに俺についてきた。

「なあ紫」

自然と声が小さくなる。紫は一年前からこの町にいて、このスーパーを使っているんだろう。それならば北条とも結構な付き合いのはずだ。

「分かっています。私が聞きますか」
紫は落ち着いた口調でそう返した。

「……いや、俺がやる。そう決めたからさ」

そうですか、と紫は引き下がって俺に役を譲った。嫌な、役だ。

「北条、聞きたいことがあるんだけど」

「へいへい何でございましょう」

両手を組んでモミモミさせながら、北条は悪戯っぽい目で見上げる。俺は悪代官か。

やめてくれ、そんな、楽しい話じゃないんだ。

「あのさ、お前最近……」

そういえば、何で北条はこんなに明るいんだ？ 自分の死期を自覚しているはずなのに。柵はずっと幻覚を見ていたし、見ていないときは具合が悪そうだった。でも北条は今幻覚を見ているようには見えないのに、相手をするこつちが疲れるほどのハイテンションだ。強がりには見えない。

「最近、」

「みぎやあああああつっ！！ 出たあああああああ！！」

突然の絶叫に俺の心臓が跳ねる。北条は盛大にコケながらレジの前から逃走を図った。

「どうした！？」

「ヤツが！ ヤツが！ 黒くて平べったくつてすばしっこい、地獄からの使者がああ！ そこ！ そこ飛んでる！ あっ消えた！ どこ行っただ！？」

ぶんぶん腕を振り回す北条。

「私に近寄るな！ 醜い下等生命体め！ しゃーっ！」

「千鶴さん、頭です」

虚空に向かって猫のように威嚇する北条に向かって、紫は冷たい一言を浴びせた。

「！？！？」

北条は石像のように固まった。時が止まったようにピクリとも動

かない。見ると、北条の頭のとつぺんには黒くて平べったい生命体がいた。

「秀人くん……紫さん……なんとか、なんとか、し、てっ」

今にも泣きだしそうな表情で仮面のように表情が固定されたまま、口元だけ器用に動かしている北条は、非常にシユールな画だった。

「頭振って逃がせ！ そのあと俺が退治すっから！」

「でも、でも……！」

「頭の上で潰されたいか！」

「そんなことしたら殺すわ！」

「死体が多い！ 俺もゴキも死んじまうじゃねえか！ 早く体から離せてっ！」

「でもでもでも……あ、ああ、あ」

「千鶴さん、目瞑って下さい」

いつの間にかスプレー缶を携えた紫が前へ出る。悠然と仁王立ちに構えた紫は、ノズルを北条の頭に突きつけ、

「ちよっとおおおおおお！？」

ブシャアアアア！ と、最終兵器を炸裂させた。

地獄よりの使者は、こてん、とあっけなく床に転がり落ち、臨終。北条の髪は殺虫剤ででろでろになった。呆氣にとられて茫然自失の北条は、さつきとは別の原因で石像のように硬直していた。つまり、驚愕、である。

「お前、頭おかしいんじゃないの！？」

「？ スプレー代なら後で払います」

「あ、店頭にあった奴使ったんだ。いや、それだけじゃなくて、やり方ってもんがあるだろうよ！」

「ですが目的は達成しました」

紫は真顔ながらもやや誇らしげな様子である。

「危ねえじゃんか！ もっと他に思いつかねえのかよ！？」

「何だかんだで何もしなかった春見君よりはマシかと。とことん使えませんね、春見君は」

「今回ばかりは断じてそんなことを言われる筋合いはない！」

十六話（後書き）

第二章の投稿を始めました。お読みくださった方、ありがとうございます。

感想お待ちしております。アドバイスなどしていただけるととっても嬉しいです！

十七話

その後、スーパー北条の店長である北条のお父さんが現れ、事情を察するやいなや、「上がっていきなさい上がっていきなさい」とまくし立てられ、あれよあれよといううちに俺達は北条家に入り込んでいた。店舗の二階が丸々自宅として使われており、外観に似つかわしく真新しい雰囲気の内だった。北条は今、多量の殺虫剤を洗い流すべくシャワーを浴びている。

「後で北条に謝つとけよ」

「気にしているようには見えませんでした」

「……いや、でも流石にあれは正気じゃなかったと思うぞ」

そうですね、と気のない返事をする紫。北条の父親に通されたのは北条の自室だった。女の子の部屋と言うだけで尻の居心地が悪い。紫の部屋はもう慣れたのだが、違う奴の部屋となるとまた緊張が襲う。まったく生前の交友関係を呪うばかりである。

「春見君、女の子の部屋だからってモゾモゾと落ち着きを失うのは止めてください。関係ないはずの私まで恐怖感を感じます」

「なんでお前はそういう穿った見方しかできないんだよ！」

はぁー、と息をつく。紫は理知的に背筋を伸ばして、床に正座している。ひらひらとしたワンピースの裾が床に散っていた。

「そういえばお前、どうしていつも黒いワンピース着てんだ？」

ふと疑問に思ったことを口にする。紫は、出会った当初から外行きの服は必ず黒のワンピースだ。所々にフリルやリボンが控えめにしつらえられていて、ロングのスカートは踝あたりまで伸びている。「生前の、母の形見に似ている服だからです」

冷淡な、感情の読めない声だった。黒い切れ長の瞳はじつと前を見つめていて、俺を見てはいない。

紫の過去。考えたことがなかった。高校生くらいの年齢で死神をやっているのだから、俺と同じように早死だったのは判る。その上

生前に母を亡くしていたのか。紫のことを知れた喜びと、辛い過去に対する同情が混じって言葉にならない。肉親を失った人間にかけられる言葉を、以前と同じように俺は見つけることが出来ずに押し黙る。「別に春見君が気に病むことではありませんよ。昔のことですし、気にしていませんから」

そう言う紫だが、その母親の形見に似た服をわざわざ着ているのも事実だ。

「そうか」

俺も気に留めてない、とアピールするように、努めて軽い口調で答えた。紫が気にしていないというのならそれで良いのだ。死神の仕事でもあるまいし、俺が首を突っ込むのは分が違う。

その時、部屋の扉が開いて、中年の女性が顔を出した。小柄で顔の雰囲気のごとくなく北条に似ている。北条の母親だろう。コップの乗ったお盆を持っていて、俺たちの前にそれを置く。

「こんにちは。家まで上がってもらっちゃってごめんなさいね」

柔らかい口調で女性は言った。

「いえいえ、お騒がせしたのは俺たちが悪いので」

目配せすると紫もぺこりと頭を下げた。自分の言葉で謝罪するべきと思ったが、そう提案する前に向こうが口を開いていた。

「千鶴、今日はすごく楽しそうだったから良かったわ」

「あれが楽しそうですか」

流石の北条も殺虫剤を頭にぶっかけられて楽しいわけないと思うが。

「あんなことがあつてから随分落ち込んでいたから。最近は随分笑うようになつてきたけれどね」

「あんなこと？」

思わせぶりの言葉に気を引かれてそう問い返した瞬間、扉が勢いよく開かれた。

「うはー！ 気持ち良かったー！」

バスタオルを肩にかけたまま、ティーシャツにデニムというラフ

な出で立ちで北条が部屋に入ってきた。わしゃわしゃと豪快に髪を拭いている。

「あ、お母さん。良いよ、飲み物とか私がつけてくるから」

「私も千鶴のお友達と会って見たかったから良いのよ。それじゃあ私は店に戻るから、二人ともゆっくりして行って」

微笑んで、北条の母親は空のお盆を手に、部屋を出て行った。その後ろ姿を、紫がじっと見つめているのが目に入り、それが妙に印象に残った。そしてそれは北条も同じらしく。

「どうかした？ 紫さん？」

「え？ いえ、なんでもありません」

長い睫を伏せて、紫は呟いた。

「うちのお母さんが美人でびっくりしてしまったかな？ どうもお父さんが言うには昔は奏木でも一二を争う別嬪さんだったとか。

そこんとこどう思うかな、男の子の秀人くん！」

びしっと指さして俺を指名する北条。脈絡なさすぎ。いきなり水を向けられた俺はたじろぐばかりだ。そこんとこ、と言われても。

「う、うんまあ綺麗な方ではあるんじゃないか」

「曖昧だなあ。もしかして秀人くんは紫さんの前で他の女の人を褒められないとか？」

「なぜそうなる」

「いや、だって紫さんみたいなタイプは一度惚れこんだら凄そうだもん。嫉妬深いよ、絶対」

「誰が誰に惚れこんだって？ なんか勘違いしてないか」

「紫さんが秀人くんにだよー」

にかーっと悪戯っぽく口元を歪める北条。どうしてみんな俺と紫の仲を邪推するのだ。抗戦しようとして文句を考えている間に北条が追い打ちをかける。

「ねえねえ紫さん、本当に秀人くんのこと好きじゃない？」

「え、ええ、いいとこ、家畜ですね」

紫にやたらと顔を近づけて詰め寄る北条に、一方の紫は顔面どア

ツプの迫力にやや慄きながらも、俺の意志を継いで（俺を傷つけつつ）反駁。だがそれをものともせず北条はさらに間合いを詰める。「でもさでもさ、いつも一緒に買い物に来るじゃん？　なんでなんで？　一緒に住んでんの？」

「……え」

往生の無邪気な一言に、場の空気が凍った。無意識に俺と紫は顔を見合わせる。一緒に住んでなどいない。でも、でも、こっやって指摘されてみると、同じようなものではないか！？

「私が一方的に春見君を飼っている、という感じですね」

「そんな逃げ方があるか！　住んでるアパートが隣部屋なんだよ！」

隣部屋、などという邪推確定の単語を口走ったことに後悔を覚えるも後の祭り。北条はくつきりした大きな瞳を余計輝かせて、すでにゲージー杯いっぱいテンションをさらに上昇させる。

「青春！　それって青春じゃん！　てかもうそれ恋人確定だし！」

今付き合っても時間の問題ですし！？　うっはーっ、良いな良いな！　私もそんな青春したいよー！」

「いやそんな惚れた腫れたの話じゃないんだ。今日も出刃包丁で脳みそぶちまけられるところだった」

「あれは全て春見君が悪いです。変態極まる蛮行に鞭をくれてやっただけのことです」

まあ、否定はできない。

「良いな良いな！　紫さんの手料理とかすっごい美味しかったりするんだろうな！　お嬢様っぽい外見に関わらず実は家庭的な一面を持つ紫さん！　萌えええ！」

「お前俺の話聞いてた！？　紫の出刃包丁は魚ではなく俺に向くんだぞー！」

「でも春見君はマゾなのでそれが嬉しいとか」

「お願いだから話ややこしくするのやめてくんない！？」

ツッコミ疲れて俺の声はもう涙声かもしれない。ツッコむ対象が一人から二人になっただけで労力が格段に違う。

「でも秀人くん、そうやって紫さんのこと呼び捨てにするのもなんか怪しいよね」

「紫は名字で呼ばれるの嫌いみたいだからな」

正確には、不快、であったか。

「ふーん。……ねえ、紫さんちょっと来て！」

「私、ですか？ あっ」

いきなり指名されて困惑する紫の手を握り、北条は半ば強引に紫を部屋の隅に連れ込んだ。

「……し、……ひで……きですよ？ ……に……い」

「……べ、べつに……けで、……です」

「ほ……に？ ひで……もよ？」

「……えっ」

「……」

「……」

二人の会話は上手く聞き取れないが、どうも紫が柄にもなくあたふたとした様子を見せている。残された俺はそんな二人を眺めてぼけーっと眺める。

すると、二人が話している横に、それが見えた。勉強机とベッドの間に隠れて見えなかったのだが、ちょっと首を伸ばして覗き込むと、それは置いてあった。

あれって、ギター、だよな？

楽器の類には疎い俺だが、スタンドに立てかけられたそれが、エレキトリックギターであることくらいは判る。北条はギター弾くのか。へー。後でなんか演奏してみてもらうのも面白いかもしれない、と思ったところでなにかやるべきことを忘れている気がした。

そこで女子二人の内緒話会は解散したようで、二人とも俺のところまで戻ってくる。俺の目の前に座るなり、紫が真っ黒い瞳で俺をじっと見つめた。

「な、なんだよ」

紫の顔は心なしに紅潮している気もする。あたふたしたり赤面し

たり、さつきから普段の紫にあるまじき拳動が目立つな。

「春見、君……あのう……ええと……」

これまたらしくもなく歯切れの悪い紫。

「いえ……なんでもありません……」

どうしたんだ？　いつもの凜として涼しげな紫はどこへ行った？

今では居心地悪そうに視線を泳がせて、出かかった言葉を飲み込むように唇を噛んでいる。

「紫？　マジで大丈夫かお前」

「ええ、はい……」

紫の後ろで、北条が必死に笑いを堪えているのが目に入ったので、俺は軽く睨んでやった。

「怖い目するなあ、秀人くん」

「うっせ。それよか、北条ってギター弾けんのか？　なんかやってみてくれよ」

必殺、話題逸らし。なんか違うこと話しているうちに紫も元に戻るだろう。

「へ？　ギターなんて全然触ったこともないけど？」

きよとん、とした顔で首を傾げる北条に、紫も怪訝な表情をした。

「え、でも、そこにギター置いてあるじゃねえか」

勉強机とベッドの陰に置かれたエレキギターを指差す。

「？　何してんの、秀人くん？」

北条は不思議そうに俺を見上げるだけだった。俺の指差す先に目を凝らして、そこには何もないと主張するように「何？　何を指差してるの？　なんもないじゃん。まさかユーフォー？　ついに奏木町にも訪れたか宇宙の民よ！」などとはしゃいでいる。

その時、階下から野太い声で「ちずるー！」と呼ぶ声がした。

「あ、お父さんだ！　そろそろレジ戻らなくちゃだから、二人ともまたそうめん買いにきてね！　まけるから！」

元氣よく言い置いて、北条は部屋から駆けだした。

十七話（後書き）

十七話でした。お読みいただいた方、ありがとうございます。

なんか、紫のキャラがぶれてきた気がするな……

感想お待ちしております。未熟者ですので、アドバイス是非！

十八話

「訊きそびれましたね、春見君」

スーパ―北条からの帰り道、紫の口から出た言葉に、俺は嘆息する。

「タイミングが無かったんだ」

レジ打ちに戻ると言って出て行った北条の後ろ姿を見送りながら、俺は自分の失態にげんなりした。突然のゴキブリ騒動のせいで自分の任務をすっかり忘れていた。北条が見ているはずの幻覚の内容や、過去に失った人物を聞きだして、幻覚解除の糸口を掴む予定だったのだが。情けない失念に自己嫌悪気味にため息をつく。

「『俺がやる。そう決めたからさ』」

「!？」

紫は不敵な笑みを薄く湛えて、横目で俺を流し見る。

「痒いです、春見君」

「悪かった！ それは忘れてくれ！ また明日行って今度こそ訊くから！」

顔の前で合掌して見せる。紫が神にしたように、北条は俺が助けたいという気持ちは本物だ。明日挽回してやるさ。

「そんなことより、あいつはなんでとぼけてたんだろうな」

真面目な口調に戻して俺は尋ねる。すると紫も真剣な面持ちになつて逡巡し、しばらくして口を開いた。

「とぼけてなどいなかったと思いますよ。彼女は本当にあのギターが見えていなかったんだと思います」

「普通に置いてあったじゃないか。見えないわけがない」

「いいえ。見えなかつたんですよ。春見君、死神の仕事に積極的になるのは良いことだと思いますが、あなたはまだ知識も経験も足りません。だからここで助言させてもらいますが、幻覚というのは必ずしも『見たい』という積極的な願望から生まれるとは限りません」

「？ 幻覚は、悪魔に死を悟らされた奴が願いを叶えたいと望んで発生するものだろ？……あ」

そうか。そういうことか。

「ええ、『見たくない』と望むことで、その対象が見えなくなるといふ幻覚も存在します。私の経験上、死ぬまでの僅かな間、何かを見たくないと呼ぶ人も少なくありませんでした」

「じゃあ、北条はギターが見えないっていう幻覚を見てるのか」

それなら、北条が普段幻覚を見ている素振りを見せないことにも合点がいく。幻覚とともに独白してしまう榊とは違い、北条は単にギターが見えないだけなのだ。

「あとは過去ですね。悪魔に襲われた人間はかつて自分と近い人間を亡くしているものです。そのトラウマを知らない、絶対に説得はできません。説得と言うのはまず第一に、理解、が必要ですから」

普段の紫を見ても、とてもこいつが他人を理解しているとは思えないのだが、榊の件を思い出せば紫の本質がそうでないことが判る。不思議な奴だ。

「そもそもどうして春見君は突然仕事にやる気が出ているんですか？ 前は随分私の方針に反対していたじゃないですか」

「ああ……」

紫に尋ねられて、思わず口籠る。確かに紫からしたら疑問に思うかも知れない。俺の方向転換はひどく急であったから。でもだからと言って、そのきつかけを白状するわけにもいかなかった。

「また、今度言うよ」

怠惰で無意味で無気力だった生前にできなかったことが、今からでもできるかも知れない、なんて言うのは気恥ずかしい。生きる意味、なんてこつぱずかしいことを口走れるほど俺はキザな奴ではない。

ましてや、お前がかっこよかったから、など口が裂けても言えない。

翌日。再びスーパー北条を訪れると、北条は今日もレジの前で労働に勤しんでいた。ちなみに今日は俺一人である。紫は付いてこようとしたが、昨日の恥ずかしい発言をせめて有言実行という結果にするべく俺は一人で再びこの土を踏んでいるわけだ。

「よっ」

「申し訳ございませんが、当店では『バツタの煮つけ』はお取り扱いはしておりません。ご所望でしたら明日までに入荷いたしますが如何しますか？」

「誰も所望してねえよ。そんなもん入荷できんのか」

「私が裏の空き地で獲ってくるんだよー」

「やめてくれ……」

にへらーっと破顔する北条の頭に手を置く。すると、おっ、これはちようどいい高さではないか。

「あ、はい。セクハラですね、分かります。店長呼びます」

「待てい！ 店長ってお前の父親だろ！ 娘がセクハラされたなんて大騒ぎになるから止める！ セクハラしてないし」

「十分セクハラだよっ。花も恥らう女子高生に無断で触れるなんてっ」

「……そうか、お前高校生なのか。ちっこいから忘れてた」

「ああ！ さり気なく禁句を言ってしまったね？ 言ってしまったかね？ 私は堂々の高校二年生ですよ！ ねえお父さーん！ 暴漢が

私にセク……」

咄嗟に北条の口を手で塞ぎ、がっちり頭ごとホールドする。ジタバタ暴れる北条を片手間で牽制しつつ、俺は強引に話題を変更する。

「なあお前、最近変な夢見なかったか」

さり気なく。「冗談に交えたように気軽に尋ねる。俺は紫のように冷静沈着な口調では話せないし、自然とひとから話を聞き出すなんて芸当はできない。ならば、重い話は軽く訊くというのが俺の考えた最善の策だった。

「例えば、自分が死ぬ瞬間を夢に見る、とかさ」

努めて軽薄な口調に、北条の顔から表情が消えた。「え？」と言葉ともいえない音を喉から発したまま、どうして？ と言うように俺を見上げる。さあ、ここからだ。

「北条、お前が見た夢は……」

「みぎやあああああつっ！！ 出たあああああああ！！」

またか！ 重要な話をしようとすると言様は！

「美也子 ！！」

叫びながら北条は俺の腕から抜け出して入口へと駆けて行った。ゴキじゃなかったらしい。

「よ、千鶴。久しぶりだね」

千鶴の名前を呼んだその少女に、千鶴はダイブするように抱きついた。「美也子ー！ 会いたかったよーっ」と頬ずりしている。

「分かった、分かったって！ 分かったから離せ！ 暑い！」

美也子と呼ばれた少女は纏わりつく北条を剥がしながら、「元気だった？」と尋ねる。

「元気だったよー。美也子がいなくて寂しかったけど！ うはー、本当に美也子だあ」

すりすり。飼い主に懐く猫のようだ。

「今ねーセクハラされてたところなんだよー。美也子のおかげで助かったー」

「セクハラ？」

と、美也子なる少女が俺を見る。いや、そんな目で見るな、そんな目で。

「誤解だ。俺はちょっと頭に手置いただけで、北条が一人で騒いでただけ」

「ああ、千鶴は身長コンプレックスだしね。でも二人とも仲良さそうだったじゃない。あなた、名前は？」

俺が名乗ると向こうも、神崎美也子だよ、と名乗った。ポニーテールに結った髪に、勝気な目が似合う。整った目鼻立ちで、北条とじやれていると美少女二人が戯れる図となり、大変目によろしい。

「北条と友達なのか？」

「まあね。あんた、見たことない顔だけど、越してきたの？」

なんだか前にも聞いた台詞だ。奏木町のように狭い田舎町だと部外者というのは目立つのだろう。

「父親の仕事の都合でな」

「ふーん、珍しいね。あたしは逆に奏木から出て行った人間だよ」

神崎は寂しげに笑う。入ってくる人間より出ていく人間の方がよっぽど多い、と神崎は続けた。

「まーまー美也子ちゃん、その男は放っておいて、今日は何しに来たの？　これから遊べる？」

「ごめん、実家に用事があったさ。早めに済ませて帰らなきゃいけないんだ。夏休みだし、また近いうちに来るからさ、今日はごめん」

「むー、そっか……本当に近いうちに来てね」

「約束する。近いうちにまた来るよ」

しょんぼりと肩を落とした北条にかける神崎の声は優しげだ。それだけで二人の仲の良さが解る。

北条がぺたぺたとスキンシップを取って別れを惜しんだあと、神崎は「じゃあそろそろ」と出入り口に足を向けた。

ふと思う。北条の過去を知るのに旧友の話の聞くというのも手じゃないか？　神崎が北条の過去を知らないという可能性もあるが、

もし知っていた場合にそれは聞いておいた方が良い。なにより、北条本人に「お前は昔誰を失ったんだ？ 死を悟って何を願ったんだ？」と質問するのはやはり辛い。所詮俺の逃げ腰が理由なのだが、俺のような怠惰な人種にとって自己の正当化というのは得意とするところである。

「俺も帰るわ」

そう言い残して、俺は神崎を追ってスーパー北条を出た。

十八話（後書き）

十八話でした。お読みくださった方、ありがとうございます。

なんか展開が遅いかな……？

感想、アドバイス、お待ちしています！

十九話

「いつから北条と友達なんだ？」

神崎はスーパー北条を出てから、篝原壮の方向へ歩いていった。実家が農家だというので、篝原壮の近くに広がる田園の一部は神崎家のものなのかもしれない。

自然と並んで歩く形になる。日差しは体を責めたてるように強烈で、サウナの中にもいるようだ。

「千鶴とは小学生のころからの付き合いだよ。中学も一緒だったんだけど、高校は違うところに進んだ。この辺だと奏木高校か隣町の高校に進むのが普通なんだけど、でも私は親の仕事の都合で、そこには通えそうになかったから、引越し先に近い高校に進んだんだ」
「ふうん。じゃあ結構長い付き合いなんだな。最近も会いに来てるみたいだし」

「月に一、二回ね。実家は奏木にあるし、千鶴に会いにいかないといつ寂しがるから」

「北条、お前のこと相当好きなんだな」

「自分で言うのも変だけど、好かれてるよ、あたしは」

神崎は何故か弱々しく笑った。さっきまでの快活に話す神崎にはそれが似合わない気がして俺は首を傾げる。

「千鶴、あんたにも随分懐いてたから、教えるけどさ」

「？」

しばらく逡巡した後、神崎は口を開いた。

「中学時代、あたしと千鶴とあともう二人で、バンドやってたんだ。『A short of joy』っていうバンド名でさ。千鶴はギター兼ボーカルで、あたしはギター。学園祭でライブだったりして、すっごい楽しかった」

神崎の声は昔を懐かしむようで、語尾も過去形だ。今はそれがない、と透けて見えて、俺は気まずく押し黙る。ここから話が好転す

ることはいんだらう。

「メンバーの中で私だけ違う高校に進んじゃってさ、解散っていう話も出たんだけど、私の希望で存続してもらった。その方があたしも寂しくないから。それで、三人は高校に入ってから新しいギターの子を探して、新生『A short of joy』として活動し始めたんだ。で、去年の夏休みに新しいギターの子との親睦会ってことで近くのキャンプ場に遊びに行ったんだよ」

それは自分のことではないはずなのだが、神崎の声は酷く弱々しい。

「その時、キャンプ場の近くの山に行ったんだけど、道に迷っちゃったらしくてずっと歩いてたら途中で凄い雨が降ってきて、土砂崩れが起きた」

蝉の声が、神崎の話に相槌を打つように鳴り響く。

「四人とも疲れてたから上手く逃げられなくて、みんな泥に飲まれた。そのまま雨は降り続けて、救助隊が駆け付けたのは随分時間が経ってからだった」

もう続きは解るだろ？ と言いたげに神崎はそこで言葉を切った。弱々しくも残っていた笑みはもう完全に消えていた。

「千鶴だけ生きてた。運よく体の全部が泥に埋まったわけじゃなかったから」

はー、と嘆息して、神崎は空をかき混ぜるように天を仰いだ。日差しを遮って、神崎の顔に影ができる。

「あいつ一人だけ残っちゃってさ、一時期は自殺でもしそうな勢いで落ち込んでたんだけど、最近は随分持ち直したよ」

「そうだったのか……」

今のハイテンションな北条からは想像できない。友達を一度に三人も失うという壮絶な過去を経て、一年ほどであの笑顔をもた浮かべるとは、凄まじい精神力だ。たとえそれが幻覚の影響であったとしても、潜在的な心の強さなくしてあの笑顔は作れないだらう。

「千鶴、まだギターやってんのかな……」

神崎のその言葉に俺ははっとした。ギターが見えないのが北条の幻覚だとするなら、悪魔に願った内容は「ギターを見たくない」だ。バンドメンバーを失って、自分の死期を自覚して願いを問われて、「ギターなんて見たくない」と願う気持ちは分からなくない。忘れない記憶に繋がるものを見たくない、と思うのはごく自然なことだ。「もう、やってないみたいだ」

俺は死神であって、北条は幻覚を見ている、とは明かせず俺は曖昧に言った。

「そうだよ。ギターなんて弾いたら、あいつらのこと思い出しちゃうだろうから」

考えてみれば、そういう神崎だって自分の友人を二人亡くしているのだ。直接目で見て、自分だけ生き残ってしまった北条とは違うにしても、神崎も相当ショックだったろう。そんな神崎の言葉を聞いて、「幻覚を解くのは本当にその人のためになるのか？」という疑問が俺の中で再燃し始めていた。神は結果として幸福だったが、北条はどうだろう？ 幻覚を解くことで、思い出したくないものを出させてしまうだけなんじゃないのか？ 北条に笑顔を与えるどころか、笑顔を奪ってしまうんじゃないか？ あまりにも、独善的な考えなんじゃないか？ そう訴えかける自分が、自分の中で大きくなっていく。

「でもさ、あたしは千鶴にギター弾いて欲しいし、歌って欲しいんだよ」

さっきまでとは違うはつきりとした快活な声で、神崎が言った。思わず神崎の横顔を見つめる。

「どうして？」

「中学時代一緒に音楽やってたあたしなら判るんだけど、千鶴が一番楽しそうにするのってみんな演奏してる時なんだよ。千鶴は誰よりもあのバンドが好きで、音楽が好きで、みんな演奏する一体感とか、ライブの緊張感とか高揚感とかが好きだったんだよ。千鶴にそういうのを教えてくれたのは、歌とギターだからさ。音楽がな

きや、千鶴は千鶴じゃないよ」

それはもうほとんど自分に言い聞かせているようだった。俺に話すことで、自分自身も自覚しようとしている。

「春見、これ見てくれよ」

そう言つて神崎が差し出したのは携帯電話だ。神崎はデータボックスの中から動画ファイルを選択する。

「これ、中学の学園祭の動画。観に来た友達に撮ってもらったんだ」画面の中に、ギターを提げてマイクに向かう北条と、ギターを提げた神崎と、ベースとドラムの女の子の四人が映った。体育館か何かのステージの上だろう。ブレる映像の中で、割れた音が響く。

『みんなー！ 来てくれてありがとう！ A s h o r t o f j o y で し ゅ ！ あ、噛んじゃった！』

観客がどつと沸く。ステージに立つメンバー達も楽しげに笑っている。

『では気を取り直して、早速一曲目行きまーっす！』

北条がマイクに向かってそう叫び、演奏が始まった。

歪んだエレキギターのサウンドの中で、ドラムの音が弾ける。イントロが終わり、北条の歌声と伴奏が調和する。携帯電話のスピーカーでは全ての音がなймаぜになって、良く聞こえないけれど、良い曲だと思った。聞いたことのないメロディーだった。

「神崎、これ、なんて曲？」

「『Don't s t o p』っていうんだ。私がいた頃に作った、最初で最後のオリジナル曲だよ」

音が割れてほとんど歌詞が聞こえないのが残念だが、アップテンポながら優しい曲調だ。

画面の中で北条が跳ねる。ギターを弾きながら、マイクに向かって歌声を張り上げる。

ああ、なんて楽しそうなんだろう。なんて晴れやかな笑顔なんだろう。

俺と軽口を叩きあつても、紫と内緒話をして、あいつはこんな

に楽しそうじゃなかった。俺の見てきた北条の笑顔に遙かに勝る。

これが北条の本当の笑顔なんだ。「音楽がなきゃ、千鶴は千鶴じゃないよ」と言った神崎の言う通りだ。

「ごめん、こんな見せられても困るよね」

そう言って神崎は動画を停止して携帯電話をポケットに戻した。

「いや、良いもの見たよ。本当に楽しそうだった」

「でも私には、千鶴にまたギター弾いて歌って欲しいって言う勇氣がない。そんなこと言って、もし千鶴が昔みたいに落ち込んだじゃうのが怖い。今の千鶴は、百パーセントじゃないけど、それなりに楽しそうだから余計にね」

「そっか……」

神崎の言うことはもっともだ。出過ぎたことをして結局不幸を生んだのでは目も当てられない。でも。

「でも、今の北条より、音楽をやってる北条の方が幸せそうなのは確かだろ」

「まあね」

嘆息するように呟いて、神崎は足を止めた。

「あたし、ここ曲がるから」

田んぼを横切るぼろいアスファルトの道は所々十字路があり、それぞれが田んぼの中に点在する民家へと繋がっている。

「じゃあな。北条の話、ありがとう」

「礼なんていらない。私が誰かに話したかったただけだから」

後ろ姿に手を振って神崎は歩いていく。じつとりと暑い潮風に、ポニーテールが揺れていた。

「働き者ですね、春見君」

紫の部屋に入ると、紫は一人でそうめんを食べていた。

「良いことだろ」

「悪魔に襲われた人間が百人いたとして、百人全員の幻覚を解くのが最善だというわけではありませんよ」

「……分かつてる」

紫とて、これまで幻覚を解いてきたのは「ほとんど全員」だと言っていた。幾人かはそのままにしたということだ。

まったく、死神というのは本当に独善的な権力を持った存在だ。幸せの定義など当人にしか判らないはずなのに、押し付けがましいことこの上ない。死神の独善的行為が結果として他者に幸福を与えたとしても、それが当人の最大の幸福であるかはわからない。人助けなど呼んでいいのかもわからない。

でも、百パーセントに届かなくても、五十パーセントしか持っていない奴を七十パーセントまでひきあげる努力をするのは、悪ではないはずだ。

なくても良い。でもあつた方が良い。

榊の笑顔を俺は今でも鮮明に思い出せる。

「紫は、北条の幻覚を解くのには反対なのか」

「それは彼女の過去や精神状態や環境やら、色々調べないと分かりません」

「そうか。あ、その過去なんだけどな、今日神崎っていう北条の友達に会って、多分ギターが見えないことに繋がる過去が聞けたんだ」

神崎の話のまま伝えようと、紫は神妙な面持ちでそれを聞いた。

「……というわけなんだ。演奏してる時の北条が本当に楽しそうだな。北条は音楽やってなきゃ北条じゃないって神崎は言ってたし」

「それで、春見君は千鶴さんを説得して、また千鶴さんに音楽をや

って欲しいわけですか」

「ああ。北条がまたギターを弾いて、歌えるのなら、それはあいつにとつて幸せなはずだ」

「……春見君、随分変わりましたね。妙なキノコでも拾って食べましたか」

「もつと俺を評価するような方向に考えられないか」

「私には、春見君が無理をしているように見えます」

「食べ終わって空になった皿を端に避けて、紫はそんなことを言った。」

「無理なんか別にしてねえよ。俺がしたいと思ったからしてるだけだ」

生前できなかったことを、今から取り戻すため。

「春見君は、心の底から確証を持って、千鶴さんに音楽を再開して欲しいと思っっていますか？ 千鶴さんがギターを視認できないのは、

『昔を思い出したくないから』だけですか？」

黒すぎる瞳に俺は怯んだ。いつか見た、強い意志を持った紫の瞳。でも今度は俺と紫の立場は反転していた。

「それは……」

はつきりしない。漠然とした目標を盲信するだけで、その過程を疎かにしていないか？ 紫の問いかけはそんな風に質問しているように聞こえた。

「ふっ」

突然に紫が薄く笑って、拍子抜けする。なんで笑うんだよ。

「そんな思いつめなくても良いですよ。私だって、自分が絶対に正しいと思ひ込んで幻覚を解いたことなんかありません」

「……」

「春見君の困ってる顔が見たかっただけです」

いや、それはそれでどうなんだろう。激しく不本意だ。

「お前、ホント性格歪んでると思うぞ……」

「よく言われます」

さらりと答えた紫に眩暈を覚える。お前良いのかそれで。

「……そんなことより、俺の分のそうめんも作ってくれないか」

蒸し風呂のような外を歩いてきたせいで元からない体力を消費したんだろう、腹の虫も懸命に鳴いていた。

「裸エプロンですか……？」

「いや、全然頼んでないけど、良いの？」

「汚らわしいです、二度と口を開かないで下さい」

「どっちが!？」

……その後、結局そうめんは自分で作った。

十九話（後書き）

十九話でした。お読みくださった皆様、ありがとうございます！

私は音楽がとても好きなので第二章は音楽絡めてみました。今後、趣味全開の展開になる可能性があります（笑）

未熟者ですゆえ、感想やアドバイスなどいただけると嬉しいです。よろしければお願いいたします。>（―――）<

祖父母の家に入ると、ひんやりとした空気と共に、埃くさいような据えた臭いが私の鼻を突いた。

「美也子ちゃん、いらっしやい。暑かったろう」

しわがれた声で私を呼んだのは祖母だ。

「こんにちは。お母さんのスーツがまだ実家にあって取りに行つて欲しいって頼まれただけなんだけど、どこにあるか分かる？」

「ああ、それならねえ、二階の、昔の美也子ちゃんの部屋のクローゼットにあると思うよ。取りに行つといで」

「分かった」

祖母に背を向けて、上階へと向かう階段に足をかける。

この家は、私が生まれた時から父の職場が転勤になる二年前までずっと住んでいた場所だ。両親と祖父母と五人で暮らしていた。昔ながらの日本家屋の雰囲気根強く残る建築で、小さいころは天井の木目が恐ろしくて仕方がなかった。

中学生になつてからあてがわれた自室は、級友たちのそれと比べてもかなり大きい方だろう。農家の家というのは大きいのだ。

クローゼットの中を開けると、独特のかび臭さが漂った。言われていたスーツを探し出そうと、ハンガーにかかった服たちを掻き分ける。

すると、奥にしまつてある物が見えた。

「そういえば、これは置いて行つたんだっけ……」

マイナーなメーカーの安エレキギター。千鶴たちとバンド組むと決めて、初めて買ったギターだった。暫くしてから高いギターに買い替えたから、こつちはお蔵入りになつていたので。

春見との会話を思い出す。初めてあつたあの男に随分と一方的に語ってしまった。迷惑がられたかもしれない。

向こうは向こうで千鶴の過去に思うところがあつたようだし、千鶴と親交もあつたようなので、話したことに後悔はしていない。しかしあんなに饒舌に語ってしまったのはやはり私があつたことを誰かに吐露してしまいたかつたからなのかもしれない。

床に腰を降ろして、ギターを構える。指で弦を弾くと調子つばずれな音がした。ずっと放置していたのでチューニングがずれている。今はもうバンドはやっていない。今から高校の友人同士でバンドをやつたつて、A s h o r t o f j o y のように楽しめる気がしなかつた。自然、ギターからも距離を置くようになっていった。今では週末に少し触る程度だ。

私は、自分では死んでしまつたかつてのメンバーについてはある程度心の整理が付いているつもりで、ギターを弾いてもいちいちあいつらを思い出すことはなくなつた。それがみんなに申し訳ない気がしてしまつたのも、ギターと疎遠になつた理由の一つである。

適当にペグを回して、なんとか聞ける程度にチューニングをする。耳はあまり良い方ではないが、かつて練習した成果があつてか、なかなか良い音が出た。

「千鶴……」

千鶴はもう、ギターはやらないんだろう。歌は歌わないんだろう。そういえば、春見に言い忘れていたことがあつたな、と心の中で呟いた。

「秀人くん、買い物好きなの？」

「え、うん、まあ、そんなとこ」

かれこれ三日連続でスーパー北条を訪れることになり、北条も些か怪訝な視線を向ける。今日も俺は一人だ。引き続き名誉挽回。

「ていうか昨日も一昨日も何も買わなかったよね」

ジト目で見上げられて、俺は何も言い返せない。こんなちびっこで可愛い北条にもすっかりと商人の血が流れているということか。「今日はちゃんと何か買っていこうと思う。あ、ボケなくて良いぞ」「そんな！？ 釘差された！ シロアリの佃煮を進めようと思ったのに！」

「どんだん常識から離れていく……！ マジで店頭で置くなよ……？」

「大丈夫。在庫管理はお父さんの仕事だし、流石に私シロアリ捕まえるのは無理」

「バツタなら獲ってくるのが恐ろしいよ」

花も恥らう女子高生はバツタの捕獲に乗り出し、あまつさえ煮つけにしてしまうものなんだろうか。

「田舎の女なんよ、私は」

北条がありもしない胸を張る。どう甘く見積もってもそこに起伏は存在せず、色気ではなく可愛さが先行してしまっている。まあ北条の場合はその可愛さが並外れているので、俺はいずれにしろたじろいでしまっただけれど。

ちづる。

平仮名で書かれたネームプレートに目が行って、俺は自分の職務を嫌でも思い出させられた。

今日こそちゃんと訊こう。

「北条、昨日聞きそびれたことなんだけども」

「ん？」

重い話は軽く、だ。なるべく軽い口調で俺は切り出した。

「夢の話だよ」

夢、と言った途端、北条の顔から一瞬表情が消える。眉を曇らせ、北条は押し黙った。

「なあ、この世には死神がいるって言ったら、信じるか？」

「死神……？ そっか……死神、か、なるほどね」

北条は口角を上げて小さく笑った。

「死神って言っても、お前が考えてるような奴じゃないぞ」

「違うの？」

「お前に、その、死を悟らせたり、願いを叶えたりしたのは、死神じゃなくて悪魔っていう」

出来るだけなんでもない口調で言ってるつもりだ。それでも、自分の声が震えてるのが分かる。

「へー。なんだが突飛な話だね」

「俺もそう思う」

「でも、うん、あの夢はそういうオカルトな話が絡んでるんだね」
オカルト、か。実能的を射た意見だ。

「秀人くんは、私がもうすぐ死んじやうって知ってたんだ」

頭上から見下ろすようになる俺からは、俯いた北条の表情は見えない。

「……そうだよ。紫もな。俺たちは、死神だから」

顔を上げた北条の顔は、達観したような、諦めきったような、疲れ果てたような色に満ちていた。いつもの無邪気な笑顔とは程遠い。

レジスターを置いたテーブルに腰かけ、北条は天井を見上げた。

「どこまで知ってるの？」

「……全部。バンドの話は、昨日神崎から聞いた。幻覚のことも、予想はついてる」

「ふーん」

なんの感情も読み取れない、息を吐くような声だ。続きを促すように、北条は俺を横目で流し見た。その行為が幼い容姿の北条からは想像できないほど大人びていて、思わず俺は怯んだ。喉の奥から絞り出すようにして次の言葉を紡ぐ。

「……お前は、部屋に置いてあるギターが見えない。それは、昔を思い出したくないがためにだ」

「うーん、半分正解ってところかな。でも半分ははずれ」

天井を見上げたまま、北条はそういう採点をした。

「半分、はずれ？」

「そ。後半がね」

北条の態度はいたって落ち着いている。榊のような動揺は全く見せない。おかげで俺も思っていたよりも落ち着いて話せる。

その代りに、俺の知らない雰囲気を纏った北条がそこにいた。

「ギターが見たくないって願ったのは、昔を思い出したくないからじゃないのか？」

「全然違う。むしろ逆だよ。私は、いつだって思い出の中で、葵と和葉と優華と美咲と一緒に演奏していたよ。みんなを忘れようと思ったことなんて一度もないよ」

語気を強めた北条に気圧されて、何も言えなくなった。自分の見立てがはずれていたことに動揺したし、北条の強い否定の言葉に狼狽した。

「忘れたいわけじゃないじゃん。どんなに私が悲しくたって、私はみんなを忘れちゃいけない。あの時、私だけ生き残っちゃったんだから」

あの時といのは、土砂崩れのことだろう。北条以外のバンドメンバーの命を奪い去った悪夢のような天災。

「でもさ、人間って不思議だよな」

唇を噛んで言葉を切って、北条の声が悲痛なものに変わる。

「どんなに忘れたくないことも、少しずつ忘れていっちゃうんだ……。毎日毎日みんなの顔を思い出して、演奏してるところを想像しても、昨日より今日の方があやふやで、今日より明日の方があやふやなんだ。忘れたくないか、ないのに……！」

北条が袖で目元を覆う。

「忘れちゃうよっ……こんなに好きなのに……！ みんなのことがこんなに好きなのに……！」

歯を食いしばるようにして北条は滔々と言葉を絞り出す。

「何処に行っちゃったの……！ みんな、どこにいるの？ 私はこんなに会いたいののに、どうしたらみんなを忘れないでいられるの？ 会いたいの！ 会いたいの！ みんなが伴奏してくれなきゃ、私は歌えない……！ どうしたら、みんな、私に会ってくれるの……」

嗚咽を堪えているのか、北条の声は喉から絞り出すようだ。

背中を折るようにして俯き、座ったテーブルの端を握り込む。

今初めて知った。涙を、人に見られたくないやつなんだ、北条は。つきり人前でわんわん泣いて、誰かに慰められるタイプかと思っていた。

でも、そんなの全然違った。北条はそんなに弱くない。そんなに強くない。

中途半端に弱くて、中途半端に強いから、こうして強がっているんだ。

「いつまでだって、どこまでだって、一緒に行けるはずだったのに……」

どうして、その小さな肩に、そんなに大きなものを背負わなくちゃならないんだ。

弱かったら楽なのに。強かったら楽なのに。中途半端で宙ぶらりんだから、酷く苦しいんだろう。

「北条……」

「ごめん……秀人くん……」

俺は黙って北条にハンカチを差し出す。突っ返されるかとも思ったが、受け取ってくれたのは素直に嬉しかった。

「泣いてるところなんて、もう誰にも見せるつもりじゃなかったんだけどね……」

「……」

「私さ、自分が死ぬのが怖くないんだ。嫌だとも思わない」
涙に枯れた声に、俺は反射的に返した。

「なんでだよ」

「だって、死んじゃったなら、またみんなと会えるんだよ。天国で、演奏できるかもしれないんだよ」

そんな考え方があるのか。俺も生前、生に固執してはいなかった。でも死を望んではいなかった。死ぬというのは怖かった。「死ぬのが怖くない」なんて、一体どれほど現実に苦悩したら言えるんだろう。こいつは、北条は、どれだけ苦しかったんだろう。

「北条、俺たちは、お前の幻覚を解きに来た」

今このタイミングでそう切り出したのは、恐らく、北条の顔がひどく清々しいものだったからだろう。

涙を流して何か心に溜まっていたものが吐き出されたのか。

そんな表情で話せるほどに北条にとっての死とは気分が良いものなのか。

「北条が、幻覚を必要ないと自分で納得したら、幻覚は見えなくなる」

そんな突拍子の無さすぎる俺の発言に、北条は飄々として答えた。「そういうものなんだ。我ながら、あの時の演技は堂に入ったと思うんだけどね」

「紫が気づいたんだよ。あいつはそういうのに敏感だから」

「確かに紫さん細かいことに気が付きそうだね」

うんうん、と頷いて、

「私は、ギターなんて見たくないよ」

と、北条ははっきりと宣言した。

「なんで、そう願ったんだ」

ギターを弾いたらメンバーのことをもっと思い出せるかもしれないのに。音楽をきっかけにして、思い出に浸ることをなぜしない？「さつき秀人くんは当てられなかったもんね。そんなに知りたいの？」

「知りたいさ」

俺がそう答えると、

「嫌だ。教えてあげない」

笑顔とも泣き顔ともとれるような顔で、からかうように北条は言った。

「それよりさ秀人くん、お祭り行こうよ」

「お祭り？」

突然の話題転換に付いて行けず首をかしげる俺に、北条はひどく明るい声で説明を始めた。

「そう！ 奏木町には神社で夏祭りがあるんだよ！ 露店でお腹いっぱい食べるのを一年中楽しみにしてるんだから！」

突然戻ってきたいつもの北条は、俺を指差しながら元気よく宣言する。

さっきまでの北条は、まるで最初からいなかったように消え去っていた。

「私と秀人くんと美也子と紫さんも呼んで、四人でお祭りに繰り出すの！ どう、青春でしょ？」

妙に青春にこだわるやつだ。

それが、北条は一度青春を破壊されているからなんじゃないかと考えつくのに十秒ほどかかった。

「……行くか」

北条が求めているのは、楽しい時間、だろう。それに俺が貢献できるのなら、それも良い。

「よっしゃあ！ お祭り再来週だから、美也子と紫さんと四人で行こう！ 美也子、都合会うと良いな！」

あいつならお祭りに行くと言えば何とかして予定くらい合わせてくるだろう。

「紫さんにも伝えといてね！」

下手くそなウインクをかまして北条は親指を立てた。

二十話（後書き）

二十話でした。お読みくださった方に心から感謝です。

ギターにまつわる話は書いていて楽しいです。趣味に爆走しています。すみません（笑）

感想お待ちしております！

二十一話

北条の幻覚を解くことを諦めたわけではない。桐嶋の言葉を聞いた榊の笑顔が忘れられないように、動画の中の北条の笑顔は忘れられないのだ。

我ながらお人よしだと思う。少なくとも生前はもっとドライな性格だった。面倒事には極力関わらないように努めていたし、ギャグ漫画でしか笑わかった俺が他人の笑顔が見たいだなんて、生前の俺が聞いたら卒倒する。キモイ、そう思うに違いない。

だが構うものか。

生前と今と、どっちが楽しく生活できているかと言えば、面倒なことが多い今の方に軍配が上がる。

榊の幻覚を解く算段はついていた。我ながら妙策が思いついたものだ。

そして俺と紫は今奏木駅にいた。商店街を海とは反対側に進み、階段を少し登れば奏木駅だ。小高い位置に建てられているので、ホームからは商店街と田んぼが見渡せる。目を凝らせば水平線も見えるだろう。当然のようにホームに屋根はなく、実に気持ちが良い。この天気を除けば。

見上げた空には雲一つなく、非情な日差しが肌を焼いていた。湿気を多量に含んだ空気が身体に纏わりつく。

それなのに。

「一時間に一本……だと？」

今にも倒壊しそうな駅舎の壁に貼られた時刻表を見て青ざめる。

「田舎ですから」

例の如く黒い日傘を差して、紫は異様に涼しげだ。なぜこいつは立ってるだけでこっも絵になるのだろう。

「あと二十分もここで待つのか……」

午前十時三十分を指した柱時計を眺めて俺は嘆息した。冗談ではなく干からびてしまいそうだ。

「こんな暑い日に隣町まで出かけるなんて言い出したのは春見君ではないですか」

「東京二十三区内に住んでた俺としては、駅に電車が一時間も来ないなんて想像できなかったんだよ……」

「へたれもやしっ子ですね」

「悪かったな」

そんな苦言に耳を痛めつつ、俺はどうしても線路の奥を見つめてしまふ。蝉がうるさい。

「楽器屋でしたか」

「そつだよ。隣町まで行けばあるんだろ」

「まあ見たことはありますが、突然どうしたんですか」

怪訝な目で見てくる紫に、俺は自分の思いついた策をもう一度頭の中で反芻するように話し始めた。

「俺はやっぱり北条にギターを弾いて欲しいんだ。で、あいつがどうしたらまたギターを弾こうと思ってくれるかを検討した結果、俺がギターを弾いて見せて『私も弾きたい』って思わせることにした」

上手くいくかは判らないが、やる価値はある。北条がどうしてギターを見たくないか願ったのかは聞けずじまいだが、週末までの期間を無駄にはしたくない。

夏祭りに行くことは紫も賛成してくれていた。

「上手くいくといいですね」

「全然上手くいって欲しいと願う口調じゃないけどな」

「いえ、本当に応援していますよ。弟子の成功を願うのは師匠として当たり前ではないですか」

そう言われて今更思い出すのだが、そういえば俺は見習いという身分だった。

「俺は、良い弟子か」

自然と口をついて出た言葉に自分で困惑する。これじゃあまるで

紫の見習いであることを嬉々として受け入れているようである。早く天界に帰りたいという願望はもう大きくないが、見習いという身分なのはちよつと悔しいものだ。

「ええ、まあ」

紫は、またも気のない返事をする。

服に絞れるほどの汗が滲み込んだ頃、ホームに到着した電車は一両だけだった。カルチャーショックに軽い眩暈を覚えながらも、サウナにしているような時間に終止符が打たれたことに歓喜する。

乗り込んでも俺と紫意外に人はおらず、貸切状態の車両に揺られること三十分。俺たちは唐川という駅に降り立った。

「おお、都会だ」

ホームの向こうにさらにホームが見える。複数の路線が交わる駅を久しぶりに目にした。

人の数も決して多くはないが奏木とは比べものにならない。

「都会っ子の春見君はこういうのが好きですか」

「好きと言うか、慣れてるといふか。紫は生きてる頃から田舎か？」

「いえ、都会でしたよ。でも私は奏木の雰囲気慣れてしまいました。だからもう人混みは駄目です」

別に人混みなんて大層な呼び名を与えられるほど人はいない。奏木は田舎過ぎる。

駅を出ると、これまた奏木とは比較にならない盛況ぶりを見せる商店街に出た。シャッターの閉まった店もちらりほらりとあるが、シャッターどころかそもそも建物自体が少ない奏木とは大違いである。

八百屋、写真屋、魚屋、花屋、ケーキ屋という定番の並びの中、ショーウィンドウにギターを置いた店を見つけた。

「あれか」

「私は入ったことありませんからよく分かりませんが」

「俺だつて楽器屋なんて入ったことねえよ」

「買ってしまった」

一時間後。店から出た俺はバンドマンよろしくエレキギターを背負っていた。

ストラトタイプのエレキギターと、アンプと、それらを繋ぐ線であるシールドと、調律（ギターではチューニングって言うらしい）に使うチューナーと、教則本がついて二万九千八百円という「入門セット」なるものがあつたのでそれを購入した。店主の話を聞くにこれは大変な破格であるらしいのだが、相場を知らない俺には実感が無いし、絶対的には痛い出費に他ならない。経費ということにして天界で清算してもらえないか近藤に掛け合ってみようと思う。

「不健康そうな春見君になんか似合いますね」

「嫌な理由だな……」

だがまあこの手の楽器は体育会系の奴よりも、ちょっと不健康そうな奴が似合うという意見には同感だ。

「三日坊主にならないといいですが」

「……大丈夫」

即答できなかった自分が悲しい。飽きっぽくて根性なしなのは自覚している。

ギターの入ったケースを背負い直した。

「この後どうする？ ついでに買物でもしていくか？」

ひどく家庭的な申し出に、紫は黒い日傘をくるりと回して、そうですね、と答えた。

そういえば楽器屋のある並びに惣菜屋があったのを思い出す。半歩後ろをついてくる紫を連れてその店へと向かった。

「おお！」

陳列されたトレーにはきんぴらごぼつやら煮物やらひじきやら焼き鮭というヘルシーなおかずが並んでおり、俺は感動した。

「なんて、健康的なんだ……！」

俺や紫の食生活といえばカップラーメンと冷凍食品を中心に、最近ではそうめんがせいぜいである。添加物の味が嫌いという紫にとっても、この店のレパートリーは感動的だったよう。

「こつという店が奏木にも欲しいですね」

と、紫も真つ黒い瞳を輝かせていた。

「今まで知らなかったのか」

「ええ。奏木からほとんど出たことはありませんから。服を買う時くらいですね、こつちに来るのは」

「服って言ってもそればかりじゃねえか」

黒いワンピースに目をやって、はたと思いつく。こいつが同じような服を着ているのはそれが母親の形見に似ているからだ。

気まずい空気になるかと思いきや、紫はさして気にした様子もなく惣菜をトレーからパックに取りながら言った。

「私が好きでそうしているんだから、良いんです」

感情の読めない声音に、どきりとする。紫が過去にトラウマを抱えていて、俺が今それをほじくり返したかと思うと気が気ではなかった。

「なあ紫、浴衣、持ってるか？」

話題を変えようと咄嗟に出た言葉はまたしても服の話で、自分の低能さにうんざりする。

「もし持っていないなら、買ってやるよ。北条と神崎と夏祭り行くだろ」

決死のフォロー。それを聞いた紫は墨を流したような黒髪をふあささと舞わせて俺を振り返る。

「天界からは経費として落ちませんよ」

「……自腹だ」

輝いた黒すぎる瞳は、ヘルシー惣菜を物色する時よりも輝いていた。

冷めた雰囲気を纏いながら、期待するような眼差しに俺の心臓が跳ねた。

かわいい。

やばい。

紫、かわいいぞ。

薄っぺらい財布をポケットの中で撫でながら、しかし俺はにやつく口元を誤魔化すのに必死だった。

二十一話（後書き）

二十一話でした。お読みくださった方、ありがとうございます。

秀人、ギター上手くなれると良いですね。……他人事みたいですが
（笑）作者として愛を持って応援いたします！（笑）

感想お待ちしております！

二十二話

「これでしょうか……いや、こつち……？」

あーでもないこーでもないと売り物の浴衣をいくつも抱えた紫を眺めながら、俺は手持無沙汰に群衆を遠巻きにしていた。

惣菜屋からしばらく歩いたところに見つけたファストファッションの大手量販店では夏祭り浴衣セールが開催されていた。そこには奏木では考えられない、人だかりという現象が発生していたのである。人混みが苦手なはずの紫は怯みながらもその中へ溶けていった。

群がる女性客の中でも、紫は一際目立っている。

こうして人混みの中にいると実感するのだが、やはり紫は群を抜いて美人である。榊といい北条といい神崎といい、奏木では妙に見てくれの良い奴が多い中でも紫は異彩を放っていたのだから、こんな状況では尚更だ。

「春見君、試着室に行きましょう」

両手に一着ずつ浴衣を提げた紫が俺のところまで戻ってくる。

「一応聞いておくけど、いくらくらい？」

「どうでも良いです」

良くねえよ。俺が文句を口にする前に紫は店の奥へと歩いていく。だがあれだけ綺麗な女の子と一緒に買い物しているという優越感が俺を寛容にするのか、俺は黙って後を付いて行った。

店内の棚には洒落た夏仕様の洋服が並び、垢抜けた雰囲気醸し出していた。奏木には絶対に存在しない空気に、生前を思い出す。あまり派手な服を買ったことはないが、少なくとも田んぼよりは馴染がある。

試着室に入った紫を待つこと三分。

カーテンを開けて現れた紫に俺は卒倒しかけた。

「……………どうですか？」

そう言って俺を見つめる紫は、黒い生地には花火の絵があしらわれた浴衣に身を包んでいた。浴衣の帯によって際立った腰や胸の線が洗練されている。そこに和の風情が調和することによって紫の綺麗さ可愛さ倍増であった。

「うんうんうんうん。い、良いん、じゃっないか！」

「興奮しないで下さい。吐きます」

相変わらず冷徹な視線を送る紫はそのまま試着室の中へと消える。まさか吐きに行ったわけでもあるまい。

さっきのは呂律が回らなかっただけだ。

しばらく待つと紫は今度はまた違う浴衣を着て現れた。

「春見君お得意の下種な視線ではなく、あくまで健全な目で見て、どうですか？」

付けられた条件に若干の不本意さを感じながらも、言われた通り努めて健全に紫を見る。

これまた黒の生地であるが、今度は花火ではなく朝顔。白い朝顔が布に咲き誇っていて、水墨画のようだ。普段の格好のせいか、こういうモノトーンなカラーリングが紫には似合うな、と思った。

「そっちの方が可愛いと思うぞ」

「……………っ」

自然と口をついて出た率直な感想に、紫が絶句する。

思わず本音が出てしまった！ 心の中で反芻してみるとかなり恥ずかしい台詞だったと後悔する。

紫はぱくぱくと無言で口を動かしながら、顔を赤くしていた。

「だ、大丈夫か、お前」

「……………春見君の意見に頷くのも癪ですが、私も初めからこっちの方が良いと思っていたのでしょうがありません。こっちします」

そう言いながら、ばたばたとカーテンの向こうへと戻っていく紫。普段なかなかお目にかかれない表情が見られたが、いかんせん素直じゃないところが紫らしい。

「春見君もやればできるじゃないですか」

「買ってもらっておいでそんな言い方があるか」

結局朝顔が描いてある方の浴衣を購入した紫（金を払ったのは俺）は再び炎天下に身を晒していた。

「いまいち男前にかける春見君も財布なら出せるわけですね」

「そこだけピンポイントな表現すんなよ！ ただのヘタレの方がまだマシだ！」

「春見君」

「ん？」

急に声のトーンを下げる紫。

「……なんでもありません」

「？」

唇を噛むようにして俯き、紫は日傘をくるくると回す。なんだか歯切れが悪い。

「言いたいことがあるなら言えよ」

「別に、なんでもありません」

日傘が俺の方に向けられてしまったせいで、紫の顔が見えなくなつた。口調はいつものクールさが戻り、鈴を転がすような涼しげな雰囲気宿す。

「千鶴さんの説得はいつするんですか」

唐突な話題転換に、俺は現実に引き戻されたような気がした。右

肩にギターケースが食い込んで鈍い痛みを感じる。汗で滑り落ちそうになるのを背負い直した。

「弾けるようになったらだ」

目の前でギターを弾いて見せてやることで説得するつもりなのだから、俺が演奏出来ねば話にならない。

俺は人を説得するだなんてことはひどく苦手で、全く持って成功させられる気がしない。だからと言って紫のようにひとに任せるとしても、状況を呼んで裏から手回しするような巧いこともできない。なら、俺が自分で実施しつつ会話による説得もしなければ良い。

そう考えて思いついたのが、ギターを弾くということだった。もし北条が音楽をやっている時が一番幸せで、心のどこかでまた音楽をやりたいと思うなら、目の前でギターを弾かれたら心動かされるはずだ。

「猛特訓ですね」

紫の言う通りである。ギターを習得するのがどれくらい難しいかは判らないが、残った時間は多くない。北条が命を落とす前に完成させなくてはならない。

北条が、あと数週間で死んでしまう。

全く考えられないことだ。あんなに元気なのに。あんなに元気でいられるほど強い奴なのに。不慮の事故ってなんだよ？

やめよう。考えるだけ悲しくなる。自分がやるべきことだけやれば良い。

「春見君は、どうしてそんなに千鶴さんの幻覚を解こうと思うのですか」

似たような質問は前にもされた。今回は曖昧に誤魔化したし、今回だつてきつかけに関してはそうするつもりである。

「北条がより辛くない生き方をしてほしいからかな。自分の目の前で、もし自分が力を貸せば幸せな気持ちになるかもしれない奴がいたら、放っておくのは気分が悪い」

これは百パーセント本心だ。

「そうですか。殊勝ですね」

照りつける太陽の光を遮るために差された日傘は俺の視界をも覆ってしまつて、紫の表情は見えない。多分、いつもの無表情だろう。「紫は、どうして柗の幻覚を解いたんだ」

「柗さんの幻覚を解いたのは私ではなくて桐嶋さんです」

「……お前の方が殊勝だよ」

その通りだけど、あの状況は紫無くして存在し得なかった。そんなことを指摘しても紫はなんということもなくはぐらかしてしまうだろう。そんな気がして俺は深追いしない。俺だつて黙っている本音はあるのだからこれでお相子だ。

「それ、持とうか」

紫の持つビニール袋を指す。中に入っているのは浴衣だけだが、日傘も持っている紫は両手がふさがることになる。普段「へたれへたれ」と言われまくっている俺としては、ある種の脅迫観念的なものが塊となつて口を伝つて放出されたわけだ。

「春見君にははなかなかやりますね。では、お言葉に甘えて」

差し出されたビニール袋を受け取つて、俺は左の袖で額の汗をぬぐう。夏休みというのは本当に暑い。そんな当たり前のことを死んでから改めて気が付いた。クーラーと言つのは季節感を忘れさせる。

「春見君」

「なんだ？」

「今もそうですし、さつきも言いかけてましたが」

そう言つて紫は日傘を目深にかぶるようにした。さして長身ではない紫は、俺の目線からではもう胸くらいまで姿が隠れてしまう。

「あ、ありがとうございます」

纏っている冷めた雰囲気ので大人びた印象になり、なんだか俺より十センチも背が低いとは思えない紫だが、実際にはそれくらいは低い。

それにしても。

なんて、不器用なやつ。

本当よくその性格で一年間も死神をやってこられたものだ。まあ人のことを言えない気がする俺は自分が激しく不安だが。あああ、やっぱり早く天界に帰りたいかもしれん。

商店街の向こうが屋気楼に霞む中、道行く人々は手をうちわに顔を扇いだり、襟元をぱたぱたやって涼を求めていた。俺もそうしたいが柄でもない優しさによって両手は塞がっている。

そういえば紫はいつも日傘を差しているけれど、それはそんなに涼しいものなのか？ 元々持っているお嬢様然とした雰囲気を強固にするだけのアイテムのようにも見える。だって黒いし、暑そうである。

湿度と気温で頭がぼーっとする。歩く足も他人の物みたいだ。サウナかここは。

「……あ」

そのとき短く紫の声。

「どうした？」

隣を歩いていたはずの紫がいつの間にかいないことに気が付いて、俺は後ろを振り返る。紫は切れ長の瞳を見開いて、その場に立ち尽くしていた。

「鳥のフンでもくらったか？」

「冗談なようできて、もし本当だったら全く冗談にならない軽口を叩きつつ紫の立っている所まで引き返す。そもそも日傘を差しているから直撃は免れるはずだが。」

「ハンカチならあるけど貸……」

「……………」

「おい」

様子がおかしい。紫は驚いたように目を見開いたまま表情が固まって、茫然としている。心ここに在らずという感じだ。

一点を見つめるような視線の先を追うと、小さな女の子が目に入った。

泣いている。女の子の前には三十代ほどの女性がいて、腰に手を

当てる女の子を見下ろしていた。「どうしてそんなことするの!? お外ではみんなに迷惑がかかっちゃうでしょ? わからないの!?」「……ごめんなさい。もうしません、ごめんなさい」そんな会話が聞こえてきた。

「……………」
紫の右手から力が抜け、日傘が落ちる。俺は慌ててそれを拾い、紫に詰め寄った。

「どうしたんだよ? 具合でも悪いのか?」

母親に怒られて泣く女の子に視線を釘づけにしたまま紫は動かない。その表情は紫が泣き出しそうにも見えた。

「……………」
このままでは埒が明かない。

俺は浴衣の入った袋を肘までずり降ろして、紫の手を取った。それが思ったよりも華奢でどきまぎしながらも、緊急事態だからと心を落ち着かせる。

「おい、紫、大丈夫か!？」

「……………」え、あ……………す、すみません……………」

深い昏睡から醒めたような顔だ。この炎天下で汗一つ見受けられない。

「どうしたんだよ、いきなり」

「いえ……………なんでも、ありません……………」

惜しく思いながらも紫の手を放す。代わりに日傘を受け取る紫の手は小刻みに震えていた。

黒いスカートが熱風に揺れる。

「とりあえず、帰ろう」

「……………」はい

ひどく間があつてから、紫は答える。考えて発した言葉ではなく、反射で答えたようだ。無言のまま、視線が動かない。ずっと一点を見つめ続けていた。

視線の先に、涙を流す女の子はもういなくなっていた。

二十三話

篝原壮に着くころには紫は元に戻っていた。奏木まで戻ってくる電車の中では終始上の空であったが、下車してからしばらくするいつもの調子を取り戻した。

「本当に大丈夫なのか」

「はい。ちよつと貧血気味だっただけですから」

鍵穴に鍵を差し込みながら紫はそう主張する。

貧血には見えなかったが。まあ本人がそれで良いならばらくはそつとおこつ。

俺も自分の部屋の鍵を開けて、紫と別れる。

ソファーに買ってきたギター類を置いて一息つく。

とつと始めなくてはならない。そもそも北条の寿命はそう長くないのだから、それまでには絶対に間に合わせなければならぬ。

生前、親にピアノをやらされたことがあった。俺の意志ではなく母親の意向で半ば強制的にピアノ教室に通うことになった。始めのうち嫌々ながらも鍵盤に触れ、次第にメロディーが奏でられるようになる自分でも楽しくなったのだが、それも長く続かなかつた。一曲目は良かった。今考えてみれば屁みたいに簡単な曲だった。誰だつて三日あれば弾けるようになる。だが二曲目が問題で、少し難易度が上がった。練習中に何度か躓いて、一週間ほど練習を続けても弾けるようにはならず、そこでピアノそのものに嫌気がさして辞めてしまった。それ以来ピアノには触れていない。

今度のギターはどうだ。俺の意志でやると決めたら良いが、ピアノの二の舞は避けたい。

こういふとき、ものを上達する鉄則として、「今すぐやる」といふのがある。生前の俺には到底縁の無い話であったが、母親はよく口を酸っぱくして言ったものだ。「後で後で」と先延ばしにすると絶対に挫折する。恥ずかしながらこれは俺が身を以て体験している。

「やるか」

景気づけにやたら大きな声で呟いてギターケースを開け、ギターを取り出す。別の袋に入っていたアンプやら教則本やらも取り出して、なにやら太いコードらしきものでギターの穴とアンプを繋ぎ、アンプの電源を入れる。試に弦を指で弾いてみる。

ジャラーン。

「おお……！」

えらくカッコイイじゃねえか！

教則本をパラパラめくり、アンプの使い方を見ながらつまみをいじくる。

ギヤヤーーン！

「おおおおお……！」

これは、予想以上にカッコイイ。あんまりロックを聴く趣味は無かったが、弦を指で弾くだけでこんなにかした音が出せるとは感動ものである。エレキギターおそるべし。

ジャカジャカジャカジャカ！！ ギヤヤーーン！

「春見君」

振り返って見ると、玄関に紫が立っていた。ギターの音が大きくて扉の開く音に気が付かなかった。

「どうした？」

「五月蠅いです」

「……」

「思わず引つ越したくなりました」

「そんなに！？」

「ロックンロール……春見君が気取ってもイタいだけですよ」

ばたん。と、優雅にターンして紫は扉の向こうに姿を消した。

なんだと……？ 言いたいこと言いやがって！ ええい、見てるよ！？ 引きこもりの底力をみせてやるうじゃねえか！

そうして俺の猛特訓が始まった。

「やーやーいらっしやい。今日こそ何か買ってもらっからね」

「いやいや、本当に申し訳ないと思ってるんだ」

かれこれ四度目になるが、最初のそうめん以外俺の財布は一度も口を開いていなかった。だが今日は死神の仕事ではなく純粹な買い物客としての来店なので期待してもらいたい。

「よ、春見」

「お前もいんのか」

店の奥からアイスクャンディーをくわえた神崎が出てきた。タンクトップにショートパンツというこれでもかという夏スタイルだ。

「あー！ それ二つに割れる一番高いやつじゃん！ せっかくサービスなのにどーしてそう欲張るかなー！」

「けちけちする子には片方あげない」

二本棒の刺さったアイスを割ろうと構えた神崎が手をおろす。

「ふえー！？ けちけちしないから！ なんならチョコと飴もサービスしちゃうからあ！」

それじゃ商売にならなからう。

「いいよ、べつに。ほら、あげる」

「！ ありがとうー！ 美也子大好きー！！」

「うむ、よしよし」

抱きつく北条を窘めて、神崎は北条の頭を撫でる。したり顔で視線をくれる神崎に俺はほほう、と一つ感心していた。下げてから上げたか、なんとという人心掌握術。まあ愛情があればそれも良いけど

も。

「おい北条、ラブラブなのは良いけど客のことも忘れんなよ」

「なに？ 嫉妬？ はっ、下らない男！」

「お前に言われてもお子ちゃまのおふざげにか聞こえん」

「なにをー！？ 私を子供扱いするかー！」

犬歯をむき出しにして威嚇する北条に、俺は参ったのポーズをとりながらも内心安堵感を感じていた。

俺が死神だの悪魔だのという話を出してからも今までと変わらな
い接し方をしてくれることに安心した。でももしそれが北条の強が
りだったといたら、俺は酷い偽善者だ。ギターの弾き過ぎで脈打つ
ように痛む左手を握り込んだ。

「ほらほら暴れない。今日は本当に客みたいだし、店員らしく案内
してやんな」

「こんなちっちゃいスーパーで案内なんていらぬもん。一人で買
い物くらいしろ、べー」

「ムカデの刺身だつてさ」

「うん、任せといて」

ぼん、と薄っぺらい胸を拳で叩く北条。

「待て待て。誰がそんなものを注文した！」

「でもごめんなさい。流石にムカデは無理……」

「いやそんな申し訳なさそうにしなくてもいいよ……」

それより俺は今日の晩飯を買いに来たのである。流石にそうめん
にも飽きがきて、新たな食糧が必要であった。

「なかこう、料理の全くできない人間が簡単に調理できて、かつこ
の夏を乗り越えられるようなスタミナ溢れるものはないだろうか。
ボケなくていいから」

「本当素直じゃないよね秀人くんは。はいはい、ご案内しますよお
客様ー」

そう投げやりに言って、北条はレジを離れて陳列棚の方へと歩い
ていく。付いて来いということらしい。隣で神崎が苦笑していた。

「神崎、夏祭りってどこでやるんだ」

「海辺の山にある神社だよ。結構歩くけど大丈夫？」

「どうも俺の身の回りの女性陣は俺のことを舐めすぎている気がする」

これでも柵を海からアパートまでお姫様抱っこで運んだことだつてある。火事場の馬鹿力と言われればそれまでだが、それにしたつてちよつとした山道くらい歩けるといふものだ。

「紫さんもくるんだよね？」

「ああ。紫のこと知ってんのか」

「ここで会うことが多いよ。ありやそうそういない美人だしね、一回会ったら忘れないよ」

感心したように言う神崎。同じ死神で、あまつさえ隣室に住んでいる俺でもしよつちゆうドギマギさせられるのだから、スーパーで何度か会ったとなれば印象もさぞ大きいだろう。ああ、そういう天性のものって羨ましい。

そんな悲観的なことを考えていると、北条が立ち止まってくるりと振り返った。

「冷やし中華なんてどうかな秀人くん。涼しいし簡単だしお腹いっぱいだよ」

「冷やし中華か……きゆうりとか卵とかの付け合せに苦労しそうなんだが」

「卵はまだしもきゆうりくらい頑張ろうよ……」

ほとほと呆れ返ったというような北条。紫にも言っちゃってくれ。今日はただの買い物と言うことで一人で来ているが、これも所詮は紫のパシリである。

「ま、なんとか都合してみるよ。サンキョ」

冷やし中華のパッケージを手に取るうとしたところで。

「つつつ！」

「ゴキ………！」

柵の縁に奴はいて、北条は顔面蒼白になりながらよろよろと後退

していく。その間に奴は翅を広げてどこへやら飛んで行ってしまったのだが、北条はそれにビビったのかその場で思いつき仰け反った。「痛っ！」

北条の頭はそばにあった菓子子の棚に直撃して、時すでに遅し。もはや痛快とも言える勢いで棚が倒壊した。ポテトチップスだの煎餅だのという菓子類が床に散乱し、目を覆わんばかりの光景である。

「あーあ、やつちやったねー」

神崎はさして驚いた様子も見せずに菓子子の一つを手取る。

「なんでそんな落ち着いてんだよ」

「割といつものことだから」

「そんなことないもん！」

河豚のように頬を膨らませて反駁する北条だが、いや、全然説得力がない。

屈んで菓子子の袋を拾う。あーあー随分な量だぞこりゃ。

しばらく三人で地道な作業を続けていると。

「お」

「あ」

「わ、悪りい」

「あ、あたしも、ごめん」

偶々神崎と俺の取ろうとしたパッケージが被ってしまい、僅差で俺の手が神崎の手の上に置かれるような形になる。咄嗟に手を引っ込めて、なんだか気まずくなって目を逸らしてしまう俺と神崎。

「ちよつと何二人で安いラブコメみたいなことしてんの！」

「悪かった悪かった！」

北条が肘で俺の肋骨を襲撃してくるので神崎にも一言求めようとすると、もう一度目が合った。神崎がとさっきまで重なっていた左手と俺の顔を交互に見つめる。

「……………」

「な、なんだよ」

「春見、お前……………」

「こらーっそこー！ 怪しく見つめ合わない！」

ぷりぷり怒れ狂う北条がまだ柵にあった冷やし中華をひったくるようにして手に取り、さっさとレジへ向かう。

「それは後で私とお父さんでやっとかから、早く帰れー！ 私の美也子に手をだすなあ！」

「はいはい、お前の愛しの神崎を盗ったりしねえよ」

むーっと膨れる北条に微笑ましいものを感じつつも、恐らく見た目より北条は怒っていきそうなので素直に引き下がることにする。

「春見」

レジに向かおうとすると神崎が俺を呼びとめた。これ以上北条の怒りを買いきらいそうに恐ろしいが、無視するわけにもいかずに振り返る。

「左手、見せてみな」

「？ なんでだよ？ 別に良いけど」

左手を差し出すと、神崎は自分の手で俺の人差し指を摘まむようにして押した。

「っー！」

ギターのせいでできたタコが激しく痛んだ。針か何かを刺されたような痛みが襲う。

「春見……お前、めちゃくちゃ良い奴だな。感心するよ。あたしが思ってた十倍くらい良い奴だ。言い忘れてたことがあったけど、忘れたままにしておくわ」

妙に思わせぶりなことを言って、にやりと口元を上げた神崎が目を細めた。

「頑張れよ。あたしもなんか手助けするから」

「……サンキュ」

お前だつてめちゃくちゃ良い奴だろうよ。

神崎の真剣な目を見ていて、俺はふと思いついた。

「なあ神崎、貸して欲しいものがあんだけど」

二十三話（後書き）

二十三話でした。お読みくださった方、ありがとうございます。

脇役のつもりで書いていた神崎がいつの間にか自分の中ですごい存在になってきています。これからも頑張ります！

よろしければ感想を。お待ちしております！

二十四話

「才能を感じませんね」

「うるせー」

ジャーソンジャーソジャラーン。

「そもそもこういうのはアコースティックギターでやった方が雰囲気が出るのではないですか」

その「こういうの」というのは先程神崎が貸してくれた楽譜に載っていた曲だ。やはり神崎の実家は篝原社の周りの農家の一つらしく、場所を教えるところまで直接持つて来てくれた。

「そういうのはあんま考えなかつたんだ……」

正直、「エレキギターかっけー！」と思つて衝動買いした節があるからこれは完全に俺の落ち度である。だがまあ北条がやっていたのはロックバンドだし、ロックといえばエレキだろう。その方が北条に対して説得力がある気がした。

「無計画ですね。………春見君、これはもしかして弾きながら歌うのですか……?」

「わ、悪いかよ」

そう、俺は弾き語りをやるつもりなのであった。ギターだけより難易度は上がるが、それだけの価値はあると思つた。

俺が部屋に籠つてギターの練習をしていると、紫が上がり込んで来ていた。

自分の部屋で聞いていると雑音にしか聞こえないため、何なら練習を観察しようというつもりらしい。こういうのは人に見られるとやりにくいものだが、追っ払うのも気が引けるので、俺はなるべくギヤラリーを気にしないように努める。

「人差し指がここで……中指がこゝ……」

難しい。指が思うように動かない。ここ二週間、金属製の弦を握り続けているため左手の指先はタコだらけだ。それでもほとんど一

日中練習する時間はあるのでなんとか形にはなってきた。つつかえつつかえでどうにも綺麗に弾けないが、ゼロからの出発にしては頑張っている方だろう。歌もある程度乗るようになってきた。音痴なのが残念だがこればかりは二週間かそこらでどうこうなるものではない。

「千鶴さんのために、随分と必死ですね」

いつものことながら涼しげな紫の口調は、どこか不満さも含んでいる気がした。

「ん？　なんか問題でもあるか」

「いいえ別に、なんでもありません」

面白くなさそうにそっぽを向く紫。

「……あ、間違えた。ここところがどうにもない。紫は生きてる頃楽器とかやってたのか」

「いいえ。楽器はおろか習い事など何もしたことはありませんでした」

「ふーん」

俺は強制的に塾に通わされていた時があつたが当然のように一回も行かずに辞めてしまった。

再び俺がギターに夢中になり始めると紫はテレビのリモコンを持ち出してニュースを見始めた。奏木のような辺境ではチャンネルが東京とはかなり異なる。まず3チャンネル以外の奇数チャンネルが見られることに驚いた。

午後六時のニュースは天気予報を終え、芸能ニュースとスポーツ報道を伝える。興味が失せたのか紫はチャンネルを変えた。ほとんどの局でニュースをやっている時間帯なので変えた先でもニュースをやっていた。『……市のマンションで三歳の女児が遺体で発見された事件で、女児の身体には殴られたような痣が数か所見つかることから警察は児童虐待の疑いで母親を……』

「そついや、今日北条のところまで冷やし中華買ってきたんだけどさ、きゅうりとか切れるか？」

視線は指の動きを追いながら紫に尋ねる。気温も湿度も熱帯夜のそれで、弦が汗で滑り上手く弾けずため息を漏らす。

「……………」
「おい、紫？ きゅうりとか切れ……………」

視線を上げると、紫はテレビ画面を凝視したまま石像のように固まっていた。

何かを呟くように唇を動かして、しかしそれは声にならない。

先日唐川で見た紫だった。心ここに在らずといった様子で体を強張らせたまま、茫然としている。

どうしたんだ、一体。

「紫」

呼びかけても紫は全く反応せず、それは柵を思い出させた。胸がざわつく。ひどく不快な風が網戸を抜けて汗を冷やし、この熱帯夜に身震いしたい心地だった。

「紫っ！ー！」

「……………」

なんだか怖くなって俺は声を張り上げた。すると幽霊に驚いたように紫が背中をびくつかせた。

「……………」すみません……………今日は、もう寝ます……………」

そう言って立ち上がり、紫は漆黒のスカートを揺らしながら早足の玄関へと歩いていく。声をかけようにも、その背中が、一人にして欲しい、と語っているようで俺は唇を噛んだだけだった。

明日は、北条と約束した夏祭りの日だ。

お雛子が夏を掻き立てる。

和太鼓の重音は山の方から麓原壮にまで響いて来ていた。茜空には透き通るような尺八の音色が潮風に乗って抜けていく。

間もなく午後六時。北条たちとの待ち合わせにはまだ三十分ほどあるが、現地集合なのでそろそろ出なければならぬ。俺はいつも通りジーンズにTシャツという出で立ちで紫を待っていた。

昨晚唐突に自室に帰ってしまった紫とは今日まだ顔を合わせていない。昼食時に訪ねようとしたのだが、部屋は鍵がかかったままで物音ひとつしなかったのはまだ寝ていたのかもしれない。それだけに今紫と顔を合わせるといふことに妙に気が張ってしまう。

「お待たせしました」

がちやりと紫の部屋の扉が開いて、俺は慌てて振り向いた。

「似合うでしょうか」

「……おおおっ」

現れた紫に、俺の心臓が跳ねた。

二人で買いに行った、黒地に朝顔の咲いた浴衣。浴衣という純和風な服装は瞳も髪も真っ黒で大和撫子な紫には非常に似合っている。普段は腰まで伸びる長髪を今日はお団子に結っていて、露わになっただけの首筋が眩しい。

「私のことを二秒以上見つめたら目が潰れるとかそういう機能が欲しいです」

「それは一体誰に付く機能なんだろう」

何はともあれ、一日ぶりに見た紫がいつもの紫であったことにはほっと胸を撫で下ろした。これからもあんなことが続くようならば詳しく訊いてみよう。

「行きましよう春見君。軟弱な足腰を駆使する時ですよ」

そう言って歩み出た紫の左手に、ハンカチのようなものが巻かれていたのが見えた。

とじあえず、今日はあ祭りであります。

二十四話（後書き）

二十四話でした。お読みくださった方、ありがとうございます！更
新遅れてすみません>（――）<

最近暑すぎてパソコンの前に座っているだけで汗だくになりますね
……体調崩しそうです涙

アドバイスなどいただけると嬉しいです！ よろしければ感想を）
^^）／

二十五話

「秀人くーん！ 紫さーん！ こっちこっちー！」

海に沿った山道を抜けると（辛かった。大変情けない）元氣よく跳ねまわる北条が待っていた。隣には神崎もいる。二人とも涼しげに浴衣を着こなしていて、いつも通りな俺はどうにも気後れしてしまふ。

「遅いよ！ すっごい待ったよ」

「まだ待ち合わせ時間前じゃねえか。お前らが早過ぎんだよ」

「千鶴が早く行く早く行くって騒ぐからさ、祭りの設営前からいるんだよ。あたし神崎美也子、よろしく」

言いつつ紫に笑いかける神崎もいつになく楽しそうだった。

「黒江紫、です」

なんだか片言っばい紫はやはり人見知りか。死神の仕事が絡まないとどうもエンジンがかからないらしい。

篝原社を出たころ茜色だった空は薄らと藍を帯び始め、遠く東の空には瑠璃色が溜まっていた。それが引き伸ばされるのもそう時間はかかるまい。

ここに至るまでの山道は途中で下りに変わり、潮の香りが流れ始めたと思ったらいつの間にか目の前に海があった。砂浜を望む社がひっそりと建っていて、その周りには焼きそばやたこ焼きという定番の露店が軒を連ねている。

「奏木のどこにこんなに人がいたんだ……」

思わずそう呟いてしまうほどにお祭りは盛況で、俺は田舎の祭りを舐めていたようだ。

「これからまだまだ増えるよ。ほらほら、早く綿あめ食べよ！ お好み焼きもベビーカーも！ お母さんからたんまり軍資金貰ってきてるから！ あ、金魚すくいとかヨーヨー釣りもかかせないよね！」

北条は今日の予定を指折り数えて満面の笑みを輝かせる。両手の指を二周も三周も折ったり伸ばしたりして、思い立ったように顔を上げた。

「ダメ、数えきんない！ もう片っ端から潰して行こう！」

この時間になつても気温は下がらず、幾分ぬるい海風に浴衣の裾を揺らしながら北条は子供の様に走り出す。女子高生にしてはちっこいその背中を見失わないように俺達三人も早足に賑わいのある露店へと向かった。

「春見君これはなんですか」

「何って見るからに金魚すくいだろうよ」

「『金魚すくい』？ なるほどこれが」

切れ長の目を細め、顎に白魚のような指を添えて妙に知的な紫。

「金魚すくいを知らずしてどうやって今まで夏祭りを越えてきたんだ」

「どうやってと言われましても、お祭りなど生まれて初めてです」

そう言う紫の足元では北条が水槽を前に奮闘していた。

「くおらーっ！ 金魚ごときが私から逃げるなー！」

かれこれ五本目のポイを片手に、北条は金魚を追って躍起になっている。捕獲した金魚の一時保管場所として水槽に浮かべられたお椀には水しか入っておらず、それを嘲笑うように無数の金魚たちが北条のポイをすり抜ける。

「あー！ また破れた！ これインチキなんじゃないの！？ おじさんもう一本！！」

インチキだと思っなら止めとけよ、という忠告は寸でのところで飲み込む。こういうものはインチキだと分かりつつ夢中になってしまつものだ。友達と夏祭りに来たことなどない俺は、小学生低学年のころ母親に連れられて地元のお祭りに行ったことを思い出しながらそう自分に言い聞かせた。

「またー！？ も、もう一本！！」

「千鶴……！ もう止めときなつて！ 食べ物買つお金なくなつちやうよ？」

七本目のポイを手にしようとしたところで、流石に見かねたのか神崎が止めに入った。北条の財布を取り上げてそれを頭上に掲げる。「！ そーやって私のこと馬鹿にしてー！ 良いもん美也子なんて！ 秀人くん！」

いきなり俺の手を掴んで北条は人混みの中へと潜り込んでいく。「おいちよつと！ あいつらとはぐれるぞ！」

「抵抗しない！ 秀人君は今から私のお財布だよ！ 美也子なんて知らないんだから！」

紫と神崎とはまた異様なペアだが、案外気が合うかも知れないなとも思つた。

あーあ。下げてから上げる神崎のせこい人心掌握術も今回は失敗のようだ。だがこの二人のことだからそのうちころつと仲直りするだろう。

「焼きそばの屋台発見！ 秀人くん財布準備！」

「……後で清算してくれよ」

言いつつ俺は渋々ポケットから財布を取り出す。

喧嘩するほど仲が良い。何だかんだ言つて、北条は楽しそうだ。

北条が楽しいなら、このお祭りに来て良かったと思える。そのため小銭をちよつとばかし出すくらい誰が厭つか。いや厭わない。反語。

「秀人くん太っ腹！ やっぱり男はそうでなくちゃね。おじさーん焼きそば一つー！」

威勢のいいおやしからパックを受け取った北条はよほどお腹が空いていたのか、すぐにパックを開けて割り箸を割る。

「喉詰まらせんなよ」

「らいひょうぶらいひょうぶ！」

口いっぱい麵を頬張って、北条はリスのようにほった膨らましながら解読不可能な北条語を喋った。

大勢の往来がある中、ぱくぱくと物を口に突っ込むのをやめない北条が人混みに流されそうになって、その腕を掴む。

「あ、セクハラ」

「高校生にもなって迷子の呼び出しされんのは嫌だろ。つかそれは言えんのか」

俺の言葉など意にも介さず北条はきよきよとあたりを見回して次の目標物を探した。

「次はじゃがバタ行くよ秀人くん！」

目をキラキラさせて北条は俺の手を掴み返した。そのまま俺は引っ張られるようにして北条の後ろを付いていく。

この分だとしばらく紫と神崎には合流できそうもない気がした。

人の間を縫うようにして俺達はじゃがバタの屋台へ辿りつき、北条は今度はじゃがバタを頬張る。

その後も「綿あめ！」「焼き鳥！」「お好み焼き！」と次々に屋台を飛んでまわり、食べる速度が追い付かなくなつた北条は腕に食品を抱えたまま、今度は「かき氷！」と下駄を鳴らして猪突猛進。やれやれである。

「食べてからにしるって。第一食べきれんのかそんなに」

「B級グルメは別腹なんだよ」

そう言いながら北条は屋台のおばさんからかき氷のカップを受け取る。

「やっぱ夏と言えばこれはかかせない……………あっ」

べちゃ。と、北条はカップを取り落した。赤くシロップのかかった雪のようなかき氷が、地面に豪快に広がった。

「言わんこつちゃねえ……」

「……………」

ひどくしょんぼりした様子の北条は、じつと落ちたかき氷とそれを掴み損ねた左手を見つめて、一つため息をついた。

「……………うっかり、しちゃったな……………」

「ん？　なんか言ったか？」

「あれあれ、気を付けなきゃダメよー。ほら、お嬢ちゃん可愛いから、おばちゃんがサーブスしてあげる」

そう言ってかき氷屋のおばさんは新たなかき氷を差し出してくれた。

北条は落ち込んだ表情をぱつと明るく変えて、

「！　おばさんありがとう！　この恩は死ぬまで忘れません！」

と、それを受け取った。そこでまたエンジンがかかり直したのが、北条はくるりと俺を振り仰ぐ。

「秀人くん！　ヨーヨー釣り行こう！　んぎゃ！？」

「元気だなお前」

北条は下駄を小石につつかえさせてすつ転んでいた。持っていた食品類は全て先程のかき氷同様の無残な姿となっってしまった。

「だから食べてからにしろと」

「こ、こんなんでめげないよ私は！」

浴衣がはだけて目のやり場に困る俺をよそに北条は、寝ていた犬がやるように唐突に起き上がる。何故かかき氷を落とした時よりも気にした様子を見せずに、そのまま立ち上がるうとして、

「痛っ」

すぐにその場にへたり込んでしまった。顔をしかめて左足首を手でさする。行き交う人々もなんだなんだと視線を投げていた。

「足、くじいたのか」

見ていられなくなつて、俺は北条の傍らにしゃがみ込んだ。

「しょうがねえな。どっかで休もう。紫と神崎と合流するまでしばらく待機だ」

俺がしゃがんだまま背中を差し出すと、北条は驚いたような表情のまま頬を赤くした。

そんな顔すんなよ。俺だって恥ずかしいんだから！ おんぶなんてこっぱずかしいこと限りないし、まして今はお祭りという衆人環視の下である。通行人の一人もいなかった榊のときとはあまりにも勝手が違う。

「……早く」

「あうっ……は、はいっ」

すっとんきょんな声を上げて、北条はおずおずと俺の肩に手をかける。北条の脚に手を回してそのまま持ち上げた。流石、ちっちゃいだけあって軽いな。

「今失礼なこと考えたでしょ！」

耳元でキンキン叫ぶ北条をなだめつつ、俺は人混みを避けるように露店の密集する一体から逃れた。

砂浜に行こう。神社の立地上、群衆から少し離れると砂浜だ。ここから見える限りいちやくカップルなんか数組いて、何とも居心地が悪そうだが砂浜なら地面は柔らかいし、のんびりできる。

「……ありがと、秀人くん」

吐息が耳にかかって一瞬たじろぐ。背中と首筋に北条がぴったりと密着していて、あつたかくて柔らかい。失礼ながら何処が胸なのか特定できる感触はないけれど。

「まーた失礼なこと考えてそうだなー」

「エスパァーかお前は」

「ちっちっちつ。女の勘だよ」

「『女の子』って感じだけだな」

「むーっ！」

北条が俺の頭を後ろからぽかぽかと叩く。全然痛くはないが、なんとなく「痛い痛い」と言っておいた。

「よいしょ」

「そういうの年寄りくさいよ」

暴れたせいでずり落ちかけた北条を背負い直すと、北条がからかうように言った。

「悪かったな体力なくて。お前ももつとしっかり掴んでろよ。手は怪我してないだろ」

さつきから北条は右手ばかり俺の服を掴んで、左手はふらふらと宙に彷徨わせていた。

「んー、そうだねー」

妙に平坦で感情の困らない声音で言っつて、それでも北条は左手を遊ばせる。

「おーい、しっかりしろつて」

「ねえ、秀人くん」

「ん？」

「上手く鳴けない蝉さんがいたとします」

「なんだよいきなり」

しかし北条は俺の耳元で、ひどく寂しそうな声で、語り始めた。

「上手く鳴けない蝉さんは、前は上手く鳴ける蝉さんでした。蝉さんは今日、七日目を迎えます。六日目の昨日、仲間の蝉たちはほとんど死んでしまいました。それを機に、蝉さんは上手く鳴けなくなつてしまったのです。そして上手く鳴けなくなつてしまった蝉さんも、明日には死んでしまうでしょう」

波の音とお囃子が、小さくなっていくように感じた。

「今日の蝉さんと昨日までの蝉さんは違います。鳴くのが下手になつてしまいました。そして、昨日までの蝉さんは楽しい蝉さんで、今日の蝉さんは悲しい蝉さんです」

一つ嘆息して。

「秀人くん、上手く鳴けない蝉さんは、今日も鳴くべきかな？」

こてん、とおでこを俺に預けた北条は、そんなことを尋ねてきた。その声音は、俺が死神であることを明かした日の北条で、ひどく達

観して疲れたような響きを持っていた。

帰ってきた波とお離子が俺と北条の間に流れて。

「鳴くべきだ」

俺は答えた。

「どうしてかな？」

北条は問う。

「蝉は、鳴いてなくちゃ、蝉じゃないからだ」

俺はそう答えた。

「今日の蝉さんは、昨日までの蝉さんでありたいのかもしれないよ？」

砂浜にたどり着いて、俺は北条を降ろしてやる。一つお礼を言って北条は砂浜に寝ころがる。俺もその隣に腰を降ろした。

「蝉さんは、もう上手く鳴けないんだよ？」

「……………それは……………」

暗い海面に、お祭りの明かりがきらきらと反射している。海までもが賑やかに見えた。

「私ね」

俺が言い終わる前に北条が口を開いた。

空を見上げる北条。俺も一緒になって見上げると、そこには嘘のように沢山の星があった。

「私ね、左手が、上手く、動かないんだ」

二十五話（後書き）

二十五話でした。お読みくださった方、ありがとうございます。

最近、「死神の人助け」の次の作品の構想が思いついて、それを書きとめるのに必死で更新が遅れております（汗 すみません！

よろしければ感想、アドバイスなんかいただけると嬉しいです（^ ^）

二十六話

「私ね、左手が、上手く、動かないんだ」

「え……？」

「土砂崩れに巻き込まれたのは知ってるんでしょ？ その時ね、私も無傷だったわけじゃないんだよ」

右手で左手を握って、北条は続ける。

「傷口はもうあんまり目立たないし、動かすことはできるから、傍からみたらわからないよね」

寂しく疲れたような口調。北条は左手を夜空にかざして、それを彷徨わせる。

「上手くものを握ることができないんだ。力が入らなくて」

「じゃあ、さつきかき氷を落としたのは……」

「そうだよ。だから焼きそばも綿あめもお好み焼きも、なんにも左手には持たなかった。そういう癖を付けてきた。なんでも右手で持つように心掛けてきたのに、今日は、なんだか浮かれちゃって、うつかりしてみたい」

困ったように微笑を浮かべる北条は、痛々しいほどに哀しげで、諦めさえ感じさせて、俺は胸を締め付けられる。

「だから、ギターを、弾かないのか」

「あたり。やっと正解にたどり着いたね秀人くん」

そうか。そういうことか。三人もの人間が命を落とす土砂崩れに巻き込まれて、無傷なわけがない。左手が不自由になって、そしてそれはギタリストにとって致命的なことだ。

タコだらけになった自分の左手を見る。左手が無くしてギターは弾けない。左手で弦を押さえなくては、音程のコントロールはできない。それはこの二週間でも十分に解る。

でも。

「でも、だからって見えないように願うことはないだろ？ 友達を

忘れたくないなら、ギターを見るだけだつて……。右手で弦を弾くだけだつて音は出る。そうしたら、忘れないでいられるんじゃないのか？」

「あのね秀人くん、私の左手は病院できちんとリハビリをすれば治る可能性もあるらしいんだよ」

「なら、なおさらじゃないか。リハビリをして、少しでもギターを弾けるようになったら、それこそギターをきっかけにして友達を鮮明に思い出せる。リハビリ……してないのか？」

「してないよ」

「どうして」

北条は砂の上で寝返りを打つようにして俺と反対の方向を向いた。「もしリハビリをして、少しでも回復したらまたギターを弾きたくなつちやうじゃん」

「それで良いじゃないか」

「良く、ないよ……完全には回復しないかもしれないんだよ……？
上手く動かない左手で、弦を押さえて、下手くそな音しか出せなくて、昔みたいには、バンドをやっていたころみたいには、みんなが、生きていたころみたいには………弾けないかもしれないんだよ……？」

そつぽを向いた北条はそのまま膝を抱えるように丸くなる。つつかえつつかえに話す北条の身体は小刻みに震えていた。

「上手くギターが弾けて、みんなで楽しく音楽やつてたのが昔の私。みんながいなくなつちやつて、ギターが上手く弾けないのが今の私。私は……私が、まるつきり昔の私でないのが怖いんだ。……きつと、きつと今の私は今の私で……昔の私じゃない……。ギターの音はね、それを思い知らせるよ。調子つばずれで下手くそなギターの音は私に言つよ……『お前は、バンドをやったところのお前じゃない。みんなが生きていたのは、昔のことなんだ』って………そんなの、嫌だよ………認めたく、ないよ………」

そつ言つて、北条は嗚咽を漏らした。断続的な嗚咽が、お雛子も

波の音も俺の耳から消してしまった。

上手く鳴けなくなってしまった蝉。

『昨日までの蝉さんは楽しい蝉さんで、今日の蝉さんは悲しい蝉さんです』

それは、お前なのか？ 北条？

音楽をやっていた楽しい北条と、左手が不自由になってしまった悲しい北条の話なのか？

そんなの、そんなの、なんて悲しいことだろう。

忘れたくない。でも、認めたくない。関係なさそうなその二つは。

「秀人くん……今日はありがとう。色々買ってもらって、おんぶまでしてもらって。楽しかった」

「……………」

その二つは、一緒にいられない。

「あーあ、私もうすぐ死んじゃうんだよねー。なんか実感ないなー」

「北条……………」

俺の方に向き返って、そしてふと北条は無表情になった。

「あの時、私も死んじゃえば良かったのかな」

「そんなことあるわけないだろ！ お前は………… お前は、お前じゃないか！」

そんな風に言ってくれるんだ、と北条は弱々しく破顔した。

「優しいね、秀人くん。ねえ、なくべきかな？」

北条は尋ねた。

上手く鳴けない蝉は、それでも死ぬまで鳴き続けるべきかと。

「忘れたくないよ……………認めたくない、よ……………。私のそばで、生きていてほしい……………。いなくならないでほしいよ……………」

北条は言葉を紡いでいく。

だから、できないから、逃げた。蓋をした。開けたら、認めることになる。私は、一人になる。忘れたくないけれど、認めたくない。その二つは、仲良くなれない。どちらかを選ばなくてはならない。認めたら、忘れられないかもしれない。認めなかったら、すぐに忘れて

しまつだろつ。だって、そこにその人たちはいないから。見えないものを見つめ続けることはできない。だから、見えないものは見えないままで、見えないことを受け入れなくちゃ、いなくなつたことが蔑になつてしまつ。

嫌だよ。怖いよ。どうしたら良いか、解んないよ。どつちも、悲しいよ。

北条は、懺悔をするようにそう漏らす。言いながら、北条は再び丸くなつていた。

それは泣いているのを見られなくないからだろつ。強くも弱くもなく、中途半端で宙ぶらりんな北条は、泣いているのを見られたくないから。

強くないのに、弱くないのに、どうして運命は北条を責めるのか。世界は、どうしてこつも理不尽なのだろつ。

「北条、お前はさ、偉いよ」

「え？」

目元を赤く腫らした北条が俺を見上げた。

「偉い偉い。だってさ、普通そんなに悲しいことがあつたらずつと塞ぎこんで、自分から死んじまう奴だつているだろつさ。でもお前はいつも笑つてる。俺や、神崎や、紫や、親御さんの前で笑つてる。楽しそうにしてる。十分だよ。お前は、凄いや」

「秀人くん……」

お祭りの賑わいに混じつて大きな和太鼓の音が響いた。その時。

「おい！ 千鶴ー！ 春見ー！」

神崎の声がした。

「あ！ 美也子ー！ 紫さんもー！」

何かが入れ替わつたように北条は明るい声でそう叫び、手をぶんぶん振つた。

浴衣姿の二人が俺たちの所まで歩いて来て、以外にも紫が先に口を開いた。

「こんなところで何をしていますか二人とも。探しましたよ。」

あ、北条さん大丈夫でしたか？ 貞操は守れましたか？」

「てーそー？」

「つまりですね、」

「解説せんで良い！ 無垢な北条に何を教え込もうとしていやがる！」

「無垢だからこそ、自分の身を守る術と知識を教え込まなければいけません」

「まあ一理あるけど……いや、そうじゃなくて、まず俺が北条に何かしたかのような誤解を解くのを忘れていた」

少々憤慨しつつも俺はここで待機することにした経緯を二人に説明した。

「そっか。悪かったね春見。ご苦労さん」

「聞いたか紫。神崎を見習え」

「……………」

「深刻に困った顔をしないでくれ……………」

「ほらほら春見、紫さんのこと困らせてないでさ、これから社の前のところで見たいものがあるんだけど、一緒に行かない？」

「見たいもの？」

北条が頭の上にクエスチョンマークを並べて小首を傾げた。

二十六話（後書き）

二十六話でした。お読みくださった方、ありがとうございます。
夏休みに入って暇なはずなのに更新が遅れております……（汗

感想いただけると非常に嬉しいです（^^）／

二十七話

北条を再びおんぶする。四人で露店の並ぶところまで戻ってくる
と、喧騒は先程までよりも大きくなっている気がした。夜闇が舞い
降りて辺りはすっかり暗く、露店の放つ裸電球の明かりだけが人々
を照らしている。その間を縫うようにして俺たちは社の前までやっ
て来た。するとそこには小さめのステージのようなものとパイプい
すがいくつも並べられていて、ちらほらと席が埋まり始めていた。

「なんだこれ」

「地域住民のパフォーマンスショー的なイベントだよ」

「……そんなん見て楽しいか？」

聞くからに田舎くさくてしょぼそうなイベントだった。正直全然
好奇心を刺激されないのだが、それは都会癖が抜け切れていないか
らかと他の面々を見回すと、

「……………」

「……………」

「それでもないみたいだった。」

「美也子ー大丈夫？ 美也子いつもこんなん全っ然気にしてなかつ
たし、私存在すら忘れてたよ」

「いーから！ 黙って見る！」

「知り合いが出るとかそういうあれか？」

「そうそうそうそう。楽しみなんだよ」

なんだか言い方がめちゃくちゃ取り繕ったようでもうにも腑に落
ちない。だが北条は足を怪我しているから、どのみち露店めぐりは
しばらくできない。ここで座っているのもさほど悪い提案でもない
気がした。

「ま、新参者だし、つべこべ言わずに見るか」

そう言っって手近なパイプ椅子に腰かけると、神崎が隣でほっと胸
を撫で下ろしていた。

何考えてんだ、神崎のやつ。

やがて司会者らしき人（商店街にある魚屋のおやじ）がマイクを持って現れ、開口一番しょうものないおやじギャグをかまして会場を微妙な笑いのどん底に叩き落とし、なににも気にしていない様子で「プログラムナンバー一番！」と威勢のいい濁声を張り上げた。

見知った酒屋のおやじがステージに現れて北島三郎の与作を歌い、次に出てきた地元中学生がそこそ上手いジャグリングを披露し、地元漁師の女房達が数人で出てきて奏木節なるもので観客を沸かせたころ。

「春見、そろそろだ」

隣に座る神崎がそう俺に耳打ちしてきた。

「そろそろって何がだよ？ お前の知り合いがか？ ならなんで俺に」

「エントリーナンバー四番！ 春見秀人さんのギター弾き語り！」
「ぱちぱちぱち、と会場に拍手が起ころ。」

.....はい？

「ほら、行ってこい春見。ステージ裏に機材は全部準備してある。
私の古いやつだけどギターも」

神崎が俺の背中をぽんぽんと押す。

いや、待て待て待て。

「秀人くんギター弾けたの？」

と北条が目丸くする。その横ではなぜか紫が感心したような仕事草で一人こくこくと頷いていた。

どういうことだこれは。訳が分からん。

「おい春見、魚屋のおじさん困ってるから早く行ってあげてくれよ」

「いや、待てよ神崎これは.....」

「しよーがないな.....」

そう言っつて神崎は俺の耳に口を寄せた。

「あたしが折角弾き語り用に曲をリメイクしたんだよ？ 今ここで

千鶴に見せてやってくれよ。完璧じゃなくても良いからさ、音を聞かせるだけでいいんだよ」

「でも、北条は左手が上手く動かないって……」

「分かっているよそんなこと。それも踏まえた上で私はここまでやってんだよ。わざわざあんたの名前をエントリーさせて」

「……………」

「春見秀人さんいらっしやいませんか？ いないのでしたら次、五番の」

「待つてください！！！」

俺は、叫んでいた。タコだらけで痛む左手を握りしめて。

「います！ 春見秀人、います！」

一歩踏み出したところで。

「春見君」

玲瓏な声が俺を呼んだ。

「春見君、頑張ってください」

「ああ、頑張るよ」

サンキユ、と呟いて俺はステージに向かって歩き出す。

神崎は、北条のことを全て分かった上でこんな状況をセツティングした。左手が上手く動かなくても、今の自分を昔の自分じゃないと恐れても、それでも、音楽がなくなっちゃだめだと。鳴かなくてはならないと。上手くなけない蝉も、鳴かなくてはならなんだと。泣いている場合じゃない。お前は鳴かなくちゃいけないんだと。

それなら、何を迷う必要がある？ 俺だって、北条の為に今までギターを練習してきたのだ。確かに今日蝉さんは悲しい。でも、明日は、楽しいかもしれない。明日には死んでしまっけれど、でも、明日は、楽しいかもしれない。

俺はステージに上がる。古びた板が鈍く軋む。ステージ裏には北条の両親がいて、神崎のギターとアンプ類を渡してくれた。

「ありがとうございます」

「それは私たちの台詞よ。私も旦那も応援してるから」

いつか見た北条のお母さんはにっこり笑ってそう言った。その笑顔はどうしようもなく北条にそっくりで、俺は自然と左の拳を握りしめた。

ジャラーン。

神崎の、少し時代を感じさせるギターで俺は音の調節をする。緊張で手が震えた。上手くピックが持てない。

くっそ、失敗なんかすんじゃねえぞ、俺。

二週間という期間はそれでもまだ短くて、俺もまだ完全に弾きこなせるわけではない。その上大勢を前にして歌もつけてやるのは成功する気がしなかった。でも、やらなくては。神崎も言っていた。北条に見せてればいいのだ。

俺は調節を終えて、観客席の前にギターを構え、マイクに顔を近づける。

歌うのは、『A short of joy』の唯一のオリジナル曲。

俺の為に、神崎が元々ロック調の曲を弾き語り用にアレンジしてくれたのだ。

大きく息を吸って、演奏を始める。

“みんなで歩けば どこまでだって行けるだろう
手を繋いでいたら ずっとみんなでいられるだろう”

北条の顔が見えた。神崎と紫に挟まれて。北条はステージを見上げながらぼかんとしていた。なんだか俺はそれが嬉しくなって、自然と声を張り上げた。

“もしもあなたが笑ったら 私も笑い転げよう
あなたが涙を流したら 私も隣で泣き喚こう”

ずっと一緒だよ　ずっと一緒だよ”

ずっと一緒に居られなかった北条は、この歌をどう思っ
て聞いているだろう。悲しいだろうか。寂しいだろうか。でも、この歌は悲
しい曲じゃなかったはずだ。ずっとこれを歌ってきた北条が、それ
が一番よく知っている。

“君のギターが聞こえる
私の歌を重ねよう”

“二度と見れない夢ならば　せめて私は忘れない
もしもこの手が離れても　ここで立ち止まらないで”

“一人でだって歩けるさ
一人でだって歩けるさ”

“みんなで走ろう　みんなで走ろう”

そうだ、北条。止まるな。進め、北条。良いんだ。その後何
が待っていても、がむしゃらに突き進んで、ぼろぼろになって、でも
それを後悔するはずがないんだ。それで良いんだよ、北条。
なあ北条、だから

“一人でだって　歩けるさ”

二十七話（後書き）

前話の投稿から二か月近く経ってしまいました………新しい別の話がい浮かんだので構想を練っていたら、いつの間にか夏が終わっていました！簡単にと、まあ、浮気ですね。情けないです。紫に怒られますね。きっと根に持つタイプですあれは。ブルブル……

そんなわけで新しいお話を連載しますので、よろしければそちらも！作風は全く異なりますが是非どうぞ（^^）ノ

「死神の人助け」も頑張つて続けようと思しますので、今後もお付き合ひしていただければ幸いです！

ここまでお読み下さった方、ありがとうございます！（――）
<

二十八話（エピソード）

「みんな遅い　！　ちゃんと私に付いて来てよ！」
北条が振り返って叫んだ。大人な俺達三人は三步後ろを付いていく。

「迷子にはなんなよ」

祭りはいよいよ盛り上がりを見せ、まだ日のあつた時間よりも格段に人の数は増えていた。それに伴って露店の店主たちも威勢を上げて客を呼び込む。まあ、まんまと呼び寄せられているのが北条なわけだが。

「春見、ありがとう」

「そう言われるのもなんだか変な感じだ。あの田舎くさいイベントにエントリーしてくれたのは神崎だしな」

それに、仕事だから。それは言わないことにしている。もし紫だつたらそうするだろうと考えて黙っていることにした。桐嶋の時はやむを得ず明かしたが、本当なら第三者に公言するのはタブーだ。それ以前に、神崎にもうすぐ北条が死んでしまうと告げるのはあまりに酷だ。今回の件で一番不幸なのは、神崎なのだから。神崎だけに救いが無い。

もしかしたら、こういう神崎みたいなやつが今度は悪魔に襲われて、当事者として死神と関わることになるのかもしれない。そんなことを思った。

「春見君、私は貴方のことを見くびっていました。ただのへたれもやし野郎だと思っていました」

「いやまあ毎度のことながら一言多いけど、まあサンキュ」

「あなたのような人だったら、違っていたかもしれないね……」

「？　どういうことだ？」

「いいえ、独り言ですよ。あ、私もかき氷でも買おうと思います」

そう言って紫は袖から財布を取り出した。その瞬間左手に巻かれ

たハンカチがちらりと見えて、俺はその布の藍色がひどく気になつた。

「あたしも買う！ 紫さんはシロップ何にする？」

「私は、カルピスでしようか」

二人はかき氷の露店に並ぶ列へと加わった。少し前には北条も並んでいる。ちらちらとこちらを振り返つては神崎に「お財布！」と懇願していた。

心なしか、北条の表情が変わった気がする。俺の先入観かもしれないが、今の北条の方が楽しそうに見える。

俺は、これで良かっただろうか。ステージから戻った後、北条は不器用そうに左手を閉じたり開いたりしながら言った。

「蝉さんは、鳴かないとね」

俺は、自分の人生を取り戻せているだろうか。意味を見つけられているだろうか。

北条が楽しそにしているのを見て、俺は思い立つ。

善人つて、良いもんだ。偽善者だっていないよりいた方が良い。

死神は、いてもいなくても良い。でも、いた方が良い。

確かにそうだな。

北条が神崎から財布を受け取つて、「かき氷一つ！ 超大盛りで！」と店主のおばさんに頼んでいた。

神崎も紫もそれ以外の並んだ人々も笑っていた。

それを見て俺は目頭が熱くなる。死ぬんじゃないやねえよ、北条。なんでこんなに悲しい結末なんだよ。楽しいよつて結局は悲しいじゃないか。親しくなるとこんなにも悲しい。

でも、ギターを弾かないままこの世を離れるよりは良いんじゃないかと、俺は思った。

秀人くんたちと別れ、さんざん露店を回ってから家に帰ると、一足先に先に帰宅していたお母さんが出迎えてくれた。

「お帰り千鶴」

お母さんは、同情のような期待のような、すごく複雑そうな表情をしていた。

「ただいま。楽しかったよ、お祭り」

「そう、良かったわね。……ねえ千鶴」

「良いよ、何も言わなくて」

なんだか棘のある言い方になってしまったな、と反省して私はお母さんに一つ笑いかけた。

「廊下とか、窓閉めといた方が良いかも」

私がそう言うと母は救われたような顔をして頷いた。

階段を昇る足がふらつく。夏祭りで歩き回ったのが半分、緊張が半分。

うつん、本当はもつといろいろなことが絡み合っているのだけれど、でもそれは考えたってしょうがない。

私の部屋の扉を開けると、闇の中に何かが光ったように見えた。

私は心臓が飛び跳ねるように鼓動するのを押さえて、蛍光灯のスイッチを入れた。

「あ……」

あった。

「あつ……あ、う……うつうつ……」

悲しいから泣いているんじゃないのは、いつぶりだろう。きつと、中三の文化祭ライブの打ち上げ以来だろう。私の涙腺は今までの涙とは違うものでも流すかのように、緩みまくっていた。

「……こ、こついう涙は、見せてもいいよね……」

私は一人呟いて、それを手に取った。

懐かしい感触。懐かしい重み。ストラップを肩にかけるのも、ネックに触れるのも、あんまりに懐かしくて、余計に涙は止まらなくなってしまう。

そつだ、どうせなら。

私はこれまた懐かしいアンプやらシールドやらを取り出して、接続した。

グワーンというアンプのノイズの音だけで、私の心臓が震えた。

ジャーン。

そつだ。この音。この音、だよ……。

弦を弾く手が止まらない。長いこと見てもいなかったのに、不思議と私の右手は弦を弾く感覚を忘れていなかった。

左手が上手く使えないのがもどかしい。もし動くのなら、音だけじゃなくて、それはメロディーになるのに。

弦を押さええない、開放弦の音しか鳴らない。

でも。

「ああ、そつか……」

私は気がついた。

「そつだつたんだ……私つて、ばかだな……」

一瞬ひいていた涙が再び目に溜まってくる。

「一緒に、いられるじゃん……」

そつだつたんだ、と。私はなんてばかだつたんだろう、と。自分を貶しても責めきれない。でもそんなことをしたらきつと秀人くんに怒られちゃうね。と思って私は、ばか、と言うのをやめた。

できないから、逃げた。蓋をした。開けたら、認めることになる。私は、一人になる。忘れたくないけれど、認めたくない。その二つは、仲良くなれない。どちらかを選ばなくてはならない。認めたら、忘れないかもしれない。認めなかったら、すぐに忘れてしまうだろう。だって、そこにその人たちはいないから。見えないものを見つ

め続けることはできない。だから、見えないものは見えないままで、見えないことを受け入れなくちゃ、いなくなつたことが蔑になつてしまふ。

ありがとうね、秀人くん、美也子。本当にありがとう。もう、なんて言つたつて言いきれないほどありがとう。優し過ぎる秀人くん、本っ当にありがとう。

分かつたんだ。ありがとう。だつてね、

「葵……和葉……優華……美咲……」

いなくなつちやつたみんなは、何処を探しても見つからなかつたみんなは。

ここに、いたんだもの。

ギターの中に、音色の中に、音楽の中に、いたんだもの。

右手が自然と弦を弾くように、私は自然と口ずさんでいた。

“二度と見れない夢ならば　せめて私は忘れない
もしもこの手が離れても　ここで立ち止まらないで

立ち止まらないよ。私、明日から病院に行くつて決めた。リハビリするつて決めた。間に合わないかもしれないけど、私が死んじやうのが先かもしれないけど、でも、突き進むつて決めた。それが、みんなとられる唯一の方法だから。

“一人でだつて歩けるさ
一人でだつて歩けるさ”

“みんなで走ろう　みんなで走ろう”

方法、だから。

一人でだって、歩けるぞ。

二十八話（エピソード）（後書き）

お読みくださった方、ありがとうございました。

二十八話をもって第二章は完結です。千鶴の話、いかがだったでしょうか？

感想いただけると嬉しいです。

物語は第三章へと続きます。第三章は紫に焦点をあてた話にするつもりです。この第三章をもって「死神の人助け」を完結させようと思っております。

これからも拙作にお付き合いいただけると幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9055s/>

死神の人助け

2011年10月4日03時29分発行